

# 坊っちゃん

夏目漱石

青空文庫



親おやゆず讓ずりの無鉄砲むてつぱうで小供こどもの時から損ばかりしている。小学校に居る時分学校の二階から飛び降りて一週間ほど腰こしを抜ぬかした事がある。なぜそんな無闇むやみをしたと聞く人があるかも知れぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出していたら、同級生の一人が冗談ようだんに、いくら威張いばつても、そこから飛び降りる事は出来まい。弱虫はややーい。と囃はやしたからである。小使こつかいに負ぶさつて帰つて来た時、おやじが大きな眼めをして二階ぐらいから飛び降りて腰を抜かす奴やつがあるかと云いつたから、この次は抜かさずに飛んで見せますと答えた。

親類のものから西洋製のナイフを貰もらつて奇麗きれいな刃はを日に翳かざして、友達ともだちに見せていたら、一人が光る事は光るが切れそうもないと云つた。切れぬ事があるか、何でも切つてみせると受け合つた。そんなら君の指を切つてみると注文したから、何だ指ぐらいこの通りだと右の手の親指こゆうの甲こうをはずに切り込こんだ。幸さいわいナイフが小さいのと、親指の骨かたが堅かたかつたので、今だに親指は手に付いている。しかし創痕きずあとは死ぬまで消えぬ。

庭を東へ二十歩に行き尽すと、南上がりにいささかばかりの菜園があつて、真中に栗の木が一本立っている。これは命より大事な栗だ。実の熟する時分は起き抜けに背戸を出て落ちた奴を拾つてきて、学校で食う。菜園の西側が山城屋という質屋の庭続きで、この質屋に勘太郎という十三四の倅が居た。勘太郎は無論弱虫である。弱虫の癖に四つ目垣を乗りこえて、栗を盗みにくる。ある日の夕方折戸の蔭に隠れて、とうとう勘太郎を捕まえてやつた。その時勘太郎は逃げ路を失つて、一生懸命に飛びかかつてきた。向うは二つばかり年上である。弱虫だが力は強い。鉢の開いた頭を、こつちの胸へ宛ててぐいぐい押した拍子に、勘太郎の頭がすべつて、おれの袷の袖の中にはいった。邪魔になつて手が使えぬから、無暗に手を振つたら、袖の中にある勘太郎の頭が、右左へぐらぐら靡いた。しまいに苦しがつて袖の中から、おれの二の腕へ食い付いた。痛かつたから勘太郎を垣根へ押しつけておいて、足捌をかけて向うへ倒してやつた。山城屋の地面は菜園より六尺がた低い。勘太郎は四つ目垣を半分崩して、自分の領分へ真逆様に落ちて、ぐうと云つた。勘太郎が落ちるときに、おれの袷の片袖がもげて、急に手が自由になつた。その晩母が山城屋に詫びに行つたついでに袷の片袖も取り返して来た。

この外いたずらは大分やつた。大工の兼公と肴屋の角をつれて、茂作の人参畠

をあらした事がある。人参の芽が出揃でそろわぬ処ところへ藁わらが一面に敷しいてあつたから、その上で三人が半日相撲すもうをとりつづけに取つたら、人参がみんな踏ふみつぶされてしまった。古川ふるかわの持つている田圃たんぼの井戸いどを埋うめて尻しりを持ち込まれた事もある。太い孟宗もうそうの節を抜いて、深く埋めた中から水が湧わき出て、そこいらの稲いねにみずがかかる仕掛しかけであつた。その時分はどんな仕掛か知らぬから、石や棒ぼうちぎれをぎゆうぎゆう井戸の中へ挿さし込んで、水が出なくなつたのを見届みとけて、うちへ歸かえつて飯を食つていたら、古川が真赤まっかになつて怒鳴どなり込こんで来た。たしか罰金ばつぎんを出して済すまんだようである。

おやじはちつともおれを可愛かわいがつてくれなかつた。母は兄あにばかり鼻ひ尻しりにしていた。この兄はやに色が白しろくつて、芝居しばいの真似まねをして女おんな形がたになるのが好きだつた。おれを見る度にこいつはどうせ碌ろくなものにはならないと、おやじが云つた。乱暴で乱暴で行く先が案じられると母が云つた。なるほど碌なものにはならない。ご覧の通りの始末である。行く先が案じられたのも無理はない。ただ懲ちやうえき役やくに行かないで生きているばかりである。

母が病気で死ぬにさんち二三日前にさんち所ところで宙返ちゆうかへりをしてへつつい角かくで肋あはら骨ほねを撲うつて大いに痛いたかつた。母が大層怒おこつて、お前まへのようなものの顔は見たくないと云うから、親類しんるいへ泊とまりに行つていた。するととうとう死んだと云う報知しらせが来た。そう早く死ぬとは思わなかつた。

そんな大病なら、もう少し大人しくすればよかつたと思つて歸つて来た。そうしたら例の兄がおれを親不孝だ、おれのために、おつかさんが早く死んだんだと云つた。口惜しかつたから、兄の横つ面を張つて大變叱られた。

母が死んでからは、おやじと兄と三人で暮していた。おやじは何にもせぬ男で、人の顔さえ見れば貴様は駄目だ駄目だと口癖のように云つていた。何が駄目なんだか今に分らない。妙なおやじがあつたもんだ。兄は実業家になるとか云つてしきりに英語を勉強していた。元來女のような性分で、ずるいから、仲がよくなかつた。十日に一遍ぐらいの割で喧嘩をしていた。ある時将棋をさしたら卑怯な待駒をして、人が困ると嬉しそうに冷やかした。あんまり腹が立つたから、手に在つた飛車を眉間へ擲きつけてやった。眉間が割れて少々血が出た。兄がおやじに言付けた。おやじがおれを勘当すると言ひ出した。その時はもう仕方がないと観念して先方の云う通り勘当されるつもりでいたら、十年來召し使つている清という下女が、泣きながらおやじに詫言まつて、ようやくおやじの怒りが解けた。それにもかかわらずあまりおやじを怖いとは思わなかつた。かえつてこの清と云う下女に氣の毒であつた。この下女はもと由緒のあるものだったそうだが、瓦解のときに零落して、つい奉公までするようになったのだと聞いている。だから婆さんである。

この婆さんがどういふ因縁か、おれを非常に可愛がつてくれた。不思議なものである。母も死ぬ三日前に愛想をつかした——おやじも年中持て余している——町内では乱暴者の悪太郎と爪弾きをする——このおれを無暗に珍重してくれた。おれは到底人に好かれる性でないとあきらめていたから、他人から木の端のように取り扱われるのは何とも思わない、かえつてこの清のようになやほやしてくれのを不審に考えた。清は時々台所で人の居ない時に「あなたは真直でよいご気性だ」と賞める事が時々あつた。しかしおれには清の云う意味が分からなかつた。好い気性なら清以外のものも、もう少し善くしてくれるだろうと思つた。清がこんな事を云う度におれはお世辞は嫌いだと答えるのが常であつた。すると婆さんはそれだから好いご気性ですと云つては、嬉しそうにおれの顔を眺めてゐる。自分の力でおれを製造して誇つてゐるように見える。少々気味がわるかつた。母が死んでから清はいよいよおれを可愛がつた。時々は小供心になぜあんなに可愛がるのかと不審に思つた。つまらない、廃せばいいのにと思つた。気の毒だと思つた。それでも清は可愛がる。折々は自分の小遣いで金鍰や紅梅焼を買つてくれる。寒い夜などはひそかに蕎麦粉を仕入れておいて、いつの間にか寝ている枕元に蕎麦湯を持つて来てくれる。時には鍋焼餛飩さえ買つてくれた。ただ食い物ばかりではない。靴足袋ももら

った。鉛筆えんぴつも貰った、帳面も貰った。これはずっと後の事であるが金を三円ばかり貸してくれた事さえある。何も貸せと云った訳ではない。向うで部屋へ持ってきてお小遣いがなくてお困りでしょう、お使いなさいと云つてくれたんだ。おれは無論入らないと云つたが、是非使えと云うから、借りておいた。実は大変嬉しかった。その三円を蝦蟇口がまぐちへ入れて、懐ふところへ入れたなり便所へ行つたら、すぼりと後架こうかの中へ落おとしてしまった。仕方がないから、のそのそ出てきて実はこれこれだと清に話したところが、清は早速竹の棒を捜さがして来て、取つて上げますと云つた。しばらくすると井戸端いどばたでざあ音がするから、出てみたら竹の先へ蝦蟇口の紐ひもを引き懸かけたのを水で洗つていた。それから口をあけて壺いちえんさつ円札を改めたら茶色になつて模様が消えかかつていた。清は火鉢で乾かわかして、これでいいでしょうと出した。ちよつとかいでみて臭くさいやと云つたら、それじゃお出しなさい、取り換かえて来て上げますからと、どこでどう胡魔化ごまかしたか札の代りに銀貨を三円持つて来た。この三円は何に使つたか忘れてしまった。今に返すよと云つたぎり、返さない。今となつては十倍にして返してやりたくても返せない。

清が物をくれる時には必ずおやじも兄も居ない時に限る。おれは何が嫌いだと云つて人に隠れて自分だけ得をするほど嫌いな事はない。兄とは無論仲がよくないけれども、兄に



隠して清から菓子や色鉛筆を貰いたくはない。なぜ、おれ一人に連れて、兄さんには遣ら  
 ないのかと清に聞く事がある。すると清は澄すましたものでお兄様あにいさまはお父様とうさまが買ってお  
 上げなさるから構いませんと云う。これは不公平である。おやじは頑固がんこだけれども、そん  
 な依怙えこひいき鼻負なひきはせぬ男だ。しかし清の眼から見るとそう見えるのだろう。全く愛おぼに溺れてい  
 たに違ちがいない。元は身分のあるものでも教育のない婆さんだから仕方がない。単にこれば  
 かりではない。鼻負目は恐ろしいものだ。清はおれをもつて将来立身出世して立派なもの  
 になると思い込んでいた。その癖勉強をする兄は色ばかり白くつて、とても役には立たな  
 いと一人できめてしまった。こんな婆さんに逢あつては叶かなわない。自分の好きなものは必ず  
 えらい人物になつて、嫌いなひとはきつと落ち振れるものと信じている。おれはその時か  
 ら別段何になると云う了りようけん見みもなかつた。しかし清がなるると云うものだから、やつ  
 ぱり何かに成れるんだらうと思つていた。今から考えると馬鹿馬鹿ばかばかしい。ある時などは清  
 にどんなものになるだらうと聞いてみた事がある。ところが清にも別段の考えもなかつた  
 ようだ。ただ手車てぐるまへ乗つて、立派な玄関げんかんのある家をこしらえるに相違そつひないと云つた。  
 それから清はおれがうちでも持つて独立したら、一いっしょ所になる気でいた。どうか置いて  
 下さいと何遍も繰り返して頼んだ。おれも何だかうちが持てるような気がして、うん置いて

てやると返事だけはしておいた。ところがこの女はなかなか想像の強い女で、あなたほど  
こがお好き、こうじまち麴町ですか麻布ですか、お庭へぶらんこをおこしらえ遊ばせ、西洋間は  
一つでたくさんですなどと勝手な計画を独りで並べていた。その時は家なんか欲しくも何  
ともなかった。西洋館も日本建にほんだても全く不用であったから、そんなものは欲しくないと、  
いつでも清に答えた。すると、あなたは欲がすくなくって、心が奇麗だと云ってまた賞め  
た。清は何と云っても賞めてくれる。

母が死んでから五六年の間はこの状態で暮していた。おやじには叱られる。兄とは喧嘩  
をする。清には菓子を貰う、時々賞められる。別に望みもない。これでたくさんだと思っ  
ていた。ほかの小供も一いちがい概にこんなものだろうと思っていた。ただ清が何かにつけて、  
あなたはお可哀かわいそう想だ、不仕合ふしあわせだと無暗に云うものだから、それじゃ可哀想で不仕合せ  
なんだろうと思つた。その外に苦になる事は少しもなかった。ただおやじが小遣いをくれ  
ないには閉口した。

母が死んでから六年目の正月におやじも卒中で亡くなった。その年の四月におれはある  
私立の中学校を卒業する。六月に兄は商業学校を卒業した。兄は何か会社の九州の支店  
に口があつて行かなければならん。おれは東京でまだ学問をしなければならぬ。兄は家

を売つて財産を片付けて任地へ出立すると云い出した。おれはどうでもするがよからうと返事をした。どうせ兄の厄介になる気はない。世話をしてくれるにしたところで、喧嘩をするから、向うでも何とか云い出すに極つてゐる。なまじい保護を受ければこそ、こんな兄に頭を下げなければならぬ。牛乳配達をしても食つてられると覚悟をした。兄はそれから道具屋を呼んで来て、先祖代々の瓦落多を二束三文に売った。家屋敷はある人の周旋である金満家に譲つた。この方は大分金になつたようだが、詳しい事は一向知らぬ。おれは一ヶ月以前から、しばらく前途の方向のつくまで神田の小川町へ下宿してゐた。清は十何年居たうちが人手に渡るのを大いに残念がったが、自分のものでないから、仕様がなかつた。あなたがもう少し年をとつていらつしやれば、ここがご相続が出来ますものとしきりに口説いてゐた。もう少し年をとつて相続が出来るものなら、今でも相続が出来るはずだ。婆さんは何も知らないから年さえ取れば兄の家がもらえると信じてゐる。

兄とおれはかように分れたが、困つたのは清の行く先である。兄は無論連れて行ける身分でなし、清も兄の尻にくつ付いて九州下りまで出掛ける気は毛頭なし、と云つてこの時のおれは四畳半の安下宿に籠つて、それすらもいざとなれば直ちに引き払わねばならぬ

始末だ。どうする事も出来ん。清に聞いてみた。どこかへ奉公でもする気かねと云つたらあなたがおうちを持つて、奥さまをお貰いになるまでは、仕方がないから、甥の厄介になりましょうとようやく決心した返事をした。この甥は裁判所の書記でまず今日には差支えなく暮していたから、今までも清に来るなら来いと二三度勧めたのだが、清はたとい下女奉公はしても年来住み馴れた家の方がいいと云つて応じなかつた。しかし今の場合知らぬ屋敷へ奉公易えをして入らぬ気兼ねを仕直すより、甥の厄介になる方がましだと思つたのだろう。それにしても早くうちを持つての、妻を貰えの、来て世話をするのと云う。親身の甥よりも他人のおれの方が好きなのだろう。

九州へ立つ二日前兄が下宿へ来て金を六百円出してこれを資本にして商買をするなり、学資にして勉強をするなり、どうしても随意に使うがいい、その代りあとは構わないと云つた。兄にしては感心なやり方だ、何の六百円ぐらい貰わんでも困りはせんと思つたが、例に似ぬ淡泊な処置が気に入ったから、礼を云つて貰つておいた。兄はそれから五十円出してこれをついでに清に渡してくれと云つたから、異議なく引き受けた。二日立つて新橋の停車場で分れたぎり兄にはその後一遍も逢わない。

おれは六百円の使用法について寝ながら考えた。商買をしたって面倒くさくつて旨く出

来るものじゃなし、ことに六百円の金で商買らしい商買がやれる訳でもなからう。よしやれるとしても、今のようじゃ人の前へ出て教育を受けたと威張れないからつまり損になるばかりだ。資本などはどうでもいいから、これを学資にして勉強してやろう。六百円を三に割つて一年に二百円ずつ使えば三年間は勉強が出来る。三年間一生懸命にやれば何か出来る。それからこの学校へはいろいろと考えたが、学問は生来しょうらい、どれもこれも好きでない。ことに語学とか文学とか云うものは真平まっぴらご免めんだ。新体詩などと来ては二十行あるうちで一行も分らない。どうせ嫌いなものなら何をやっても同じ事だと思つたが、幸い物理学校の前を通り掛かつたら生徒募集の広告が出ていたから、何も縁だと思つて規則書をもらつてすぐ入学の手続きをしてみました。今考えるとこれも親譲りの無鉄砲から起おこつた失策だ。

三年間まあ人並ひとなみに勉強はしたが別段たちのいい方でもないから、席順はいつでも下から勘定かんじょうする方が便利であつた。しかし不思議なもので、三年立つたらとうとう卒業してしまつた。自分でも可笑おかしいと思つたが苦情を云う訳もないから大人しく卒業しておいた。

卒業してから八日目に校長が呼びに来たから、何か用だろうと思つて、出掛けて行つた

ら、四国辺のある中学校で数学の教師が入る。月給は四十円だが、行つてはどうだという相談である。おれは三年間学問はしたが実を云うと教師になる気も、田舎へ行く考えも何もなかった。もつとも教師以外に何をしようと云うあてもなかったから、この相談を受けた時、行きましようとして即席てくせきに返事をした。これも親譲りの無鉄砲たつたが祟つたのである。

引き受けた以上は赴任ふにんせねばならぬ。この三年間は四畳半に蟄居ちつきよして小言はただの一度も聞いた事がない。喧嘩もせずに済んだ。おれの生涯のうちでは比較的小言ひかくてきのんきな時節であつた。しかしこうなると四畳半も引き払わなければならぬ。生れてから東京以外に踏み出したのは、同級生と一所に鎌倉かまくらへ遠足した時ばかりである。今度は鎌倉どころではない。大変な遠くへ行かねばならぬ。地図で見ると海浜で針の先ほど小さく見える。どうせ碌な所ではあるまい。どんな町で、どんな人が住んでるか分らん。分らんでも困らない。心配にはならぬ。ただ行くばかりである。もつとも少々面倒臭い。

家をたた置たまんでからも清の所へは折々行つた。清の甥おというのは存外結構な人である。おれが行くたびに、居りさえすれば、何くれと款待もてなしてくれた。清はおれを前へ置いて、いろいろおれの自慢じまんを甥おに聞かせた。今に学校を卒業すると麹町辺へ屋敷を買つて役所へ通うのだなどと吹聴ふいちやうした事もある。独りで極きめて一人ひとりで喋舌しゃべるから、こっちは困こまつて

顔を赤くした。それも一度や二度ではない。折々おれが小さい時寝小便をした事まで持ち出すには閉口した。甥は何と思つて清の自慢を聞いていたか分らぬ。ただ清は昔風の女だから、自分とおれの關係を封建時代の主従のように考えていた。自分の主人なら甥のためにも主人に相違ないと合点したものらしい。甥こそいい面の皮だ。

いよいよ約束が極まつて、もう立つと云う三日前に清を尋ねたら、北向きの三疊に風邪を引いて寝ていた。おれの来たのを見て起き直るが早いか、坊っちゃんいつ家をお持ちなさいますと聞いた。卒業さえすれば金が自然とポケットの中に湧いて来ると思っている。そんなにえらい人をつらまえて、まだ坊っちゃんと呼ぶのはいよいよ馬鹿氣ている。おれは単簡に当分うちを持たない。田舎へ行くんだと云つたら、非常に失望した容子で、胡麻塩の鬢の乱れをしきりに撫でた。あまり氣の毒だから「行く事は行くがじき帰る。来年の夏休みにはきつと帰る」と慰めてやった。それでも妙な顔をしているから「何を見やげに買つて来てやろう、何が欲しい」と聞いてみたら「越後の笹飴が食べたい」と云つた。越後の笹飴なんて聞いた事もない。第一角が違ふ。「おれの行く田舎には笹飴はなさそうだ」と云つて聞かしたら「そんなら、どっちの見当です」と聞き返した。「西の方だよ」と云うと「箱根のさきですか手前ですか」と問う。随分持てあました。

出立の日には朝から来て、いろいろ世話をやいた。来る途とちゆう中小間物屋で買って来た齒は磨みがきと楊子ようじと手拭てぬぐいをズツクの革靴かばんに入れてくれた。そんな物は入らないと云つてもなかなか承知しない。車を並べて停車場へ着いて、プラットフォームの上へ出た時、車へ乗り込んだおれの顔をじつと見て「もうお別れになるかも知れません。随分きげんご機嫌きげんよう」と小さな声で云つた。目に涙なみだが一杯いっぱいたまっている。おれは泣かなかつた。しかしもう少しで泣くところであつた。汽車がよつほど動き出してから、もう大丈夫だいじようぶだろうと思つて、窓から首を出して、振り向いたら、やっぱり立っていた。何だか大変小さく見えた。

## 二

ぶうと云いつて汽船がとまると、舢はしけが岸を離はなれて、漕こぎ寄せて来た。船頭は真まつ裸ばだかに赤ふんどしをしめている。野蛮やばんな所だ。もつともこの熱さでは着物はきられまい。日が強いので水がやに光る。見つめていても眼めがくらむ。事務員に聞いてみるとおれはここへ降りるのだそうだ。見るところでは大森おおもりぐらいな漁村だ。人を馬鹿ばかにしていらあ、こんな所に我慢がまんが出来るものかと思つたが仕方がない。威勢いせいよく一番に飛び込んだ。続つづいて五六人



は乗つたろう。外に大きな箱はこを四つばかり積み込んで赤ふんは岸へ漕ぎ戻もどして来た。陸おかへ着いた時も、いの一いっ番に飛び上がつて、いきなり、磯いそに立たつていた鼻はなたれ小僧こぞうをつらまえて中学校はどこだと聞いた。小僧はぼんやりして、知らんがの、と云つた。気の利かぬ田舎なかものだ。猫ねこの額ぬかほどな町内の癖くせに、中学校のありかも知らぬ奴やつがあるものか。ところへ妙な筒みょうつつつぼうを着た男おとこがきて、こつちへ来いと云うから、尾ついて行いつたら、港屋かたとか云う宿屋へ連れて来た。やな女おんなが声こゑを揃そろえてお上あがりなさいと云うので、上あがるのがいやになつた。門口へ立たつたなり中学校を教おしえろと云つたら、中学校はこれから汽車で二里ばかり行いかなくつちやいけないと聞いて、なお上あがるのがいやになつた。おれは、筒つつつぼうを着た男おとこから、おれの革靴かばんを二つ引ひきたくつて、のそのそあるき出した。宿屋しゆくやのものは変へんな顔かほをしていた。

停車場はすぐ知れた。切符きつぷも訳わけなく買かつた。乗のり込んでみるとマツチ箱あはらのような汽車だ。ごろごろと五分ばかり動うごいたと思おもつたら、もう降ふりなければならぬ。道理で切符きつぷが安やすいと思おもつた。たつた三錢さんぜんである。それから車くるまを備やとつて、中学校へ来たら、もう放課後はなつちごで誰だれも居いない。宿直しゆくぢくはちよつと用達ようたしに出いたと小使こつかいが教おしえた。随分ずいぶん気楽きらくな宿直しゆくぢくがいるものだ。校長かうぢやうでも尋ねたずねようかと思おもつたが、草臥くたびれたから、車くるまに乗のつて宿屋しゆくやへ連れて行いけと車夫くるまぶに云

い付けた。車夫は威勢よく山城屋と云ううちへ横付けにした。山城屋とは質屋の勘太郎の屋号と同じだからちよつと面白く思った。

何だか二階の櫓子段の下の暗い部屋へ案内した。熱くって居られやしない。こんな部屋はいやだと云つたらあいにくみんな塞がっておりすからと云いながら革鞆を抛り出したまま出て行つた。仕方がないから部屋の中へはいつて汗をかいて我慢していた。やがて湯に入れと云うから、ぎぶりと飛び込んで、すぐ上がった。帰りがけに覗いてみると涼しそうな部屋がたくさん空いている。失敬な奴だ。嘘をつきやあがった。それから下女が膳を持つて来た。部屋は熱つかつたが、飯は下宿のよりも大分旨かつた。給仕をしながら下女がどちらからおいでになりましたと聞くから、東京から来たと答えた。すると東京はよい所でございますようと云つたから当り前だと答えてやつた。膳を下げた下女が台所へいつた時分、大きな笑い声が聞えた。くだらないから、すぐ寝たが、なかなか寝られない。熱いばかりではない。騒々しい。下宿の五倍ぐらいやかましい。うとうとしたら清の夢を見た。清が越後の笹館を笹ぐるみ、むしやむしや食っている。笹は毒だからよしたらよかろうと云うと、いえこの笹がお薬でございますと云つて旨そうに食っている。おれがあきれ返つて大きな口を開いてハハハハと笑つたら眼が覚めた。下女が雨戸を明けている。

相変らず空の底が突き抜けたような天気だ。

道中をしたら茶代をやるものだと聞いていた。茶代をやらないと粗末に取り扱われると聞いていた。こんな、狭くて暗い部屋へ押し込められるのも茶代をやらぬまいだらう。見すばらしい服装をして、ズツクの革靴と毛織子の蝙蝠傘を提げてるからだらう。田舎者の癖に人を見括ったな。一番茶代をやつて驚かしてやろう。おれはこれでも学資のあまりを三十円ほど懐に入れて東京を出て来たのだ。汽車と汽船の切符代と雑費を差し引いて、まだ十四円ほどある。みんなやつたつてこれからは月給を貰うんだから構わない。田舎者はしみつたれだから五円もやれば驚ろいて眼を廻すに極っている。どうするか見ろと済して顔を洗つて、部屋へ歸つて待つてると、夕べの下女が膳を持って来た。盆を持って給仕をしながら、やににやにや笑つてゐる。失敬な奴だ。顔のなかをお祭りでも通りやしまし。これでもこの下女の面よりよっぽど上等だ。飯を済ましてからにしようと思つていたが、癩に障つたから、中途で五円札を一枚出して、あとでこれを帳場へ持つて行けと云つたら、下女は変な顔をしていた。それから飯を済ましてすぐ学校へ出懸けた。靴は磨いてなかつた。

学校は昨日車で乗りつけたから、大概の見当は分つている。四つ角を二三度曲がつた

らすぐ門の前へ出た。門から玄関までは御影石で敷きつめてある。きのうこの敷石の上を車でがらがらと通った時は、無暗に仰山な音がするので少し弱った。途中から小倉の制服を着た生徒にたくさん逢ったが、みんなこの門をはいって行く。中にはおれより背が高くって強そうなのが居る。あんな奴を教えるのかと思つたら何だか気味が悪くなつた。名刺を出したら校長室へ通した。校長は薄髯のある、色の黒い、目の大きな狸のような男である。やにもつたいぶつていた。まあ精出して勉強してくれと云つて、恭しく大きな印の捺した、辞令を渡した。この辞令は東京へ帰るとき丸めて海の中へ抛り込んでしまつた。校長は今に職員に紹介してやるから、一々その人にこの辞令を見せるんだと云つて聞かした。余計な手数だ。そんな面倒な事をするよりこの辞令を三日間職員室へ張り付ける方がましだ。

教員が控所へ揃うには一時間目の喇叭が鳴らなくてはならぬ。大分時間がある。校長は時計を出して見て、追々ゆると話すつもりだが、まず大体の事を呑み込んでおいでもらおうと云つて、それから教育の精神について長いお談義を聞かした。おれは無論いい加減に聞いていたが、途中からこれは飛んだ所へ来たと思つた。校長の云うようにはとても出来ない。おれみたような無鉄砲なものをつらまえて、生徒の模範になれの、一校

の師表しひょうと仰あおがれなくてはいかんの、学問以外に個人の徳化とくわを及およぼさなくては教育者になれないの、と無暗むあんに法外な注文をする。そんなえらい人が月給四十円で遥々はるばるこんな田舎へくるもんか。人間は大概似たもんだ。腹が立てば喧嘩けんかの一つぐらいは誰でもするだろうと思つてたが、この様子じやめつたに口も聞けない、散歩も出来ない。そんなむずかしい役やくなら雇やとう前にこれこれだと話すがいい。おれは嘘うそをつくのが嫌きらいだから、仕方がない、だまされて来たのだとあきらめて、思い切りよく、ここで断ことわつて帰かへつちまおうと思つた。宿屋へ五円やつたから財布さいふの中には九円ながししかない。九円じや東京までは帰れない。茶代ちやだいなんかやらなければよかつた。惜おしい事をした。しかし九円だつて、どうかならない事はない。旅費は足りなくつても嘘をつくよりましだと思つて、到底とつていあなたのおつしやる通りにや、出来ません、この辞令は返しますと云つたら、校長は狸のような眼をぱちつかせておれの顔を見ていた。やがて、今のはただ希望である、あなたが希望通り出来ないのはよく知つているから心配しんぱいしなくつてもいいと云いながら笑つた。そのくらいよく知つてゐるなら、始めから威嚇おどしきさなければいいのに。

そう、こうする内に喇叭らふぱが鳴つた。教場の方が急にがやがやする。もう教員も控所へ揃そろいましたらうと云うから、校長に尾おいて教員控所へはいつた。広い細長い部屋の周囲に机

を並べてみんな腰をかけている。おれがはいったのを見て、みんな申し合せたようにおれの顔を見た。見世物じやあるまいし。それから申し付けられた通り一人一人の前へ行つて辞令を出して挨拶をした。大概は椅子を離れて腰をかかめるばかりであつたが、念の入つたのは差し出した辞令を受け取つて一応拝見をしてそれを恭しく返却した。まるで宮芝居の真似だ。十五人目に体操の教師へと廻つて来た時には、同じ事を何返もやるので少々じれつたくなつた。向うは一度で済む。こつちは同じ所作を十五返繰り返している。少しはひとの了見も察してみるがいい。

挨拶をしたうちに教頭のなにかしと云うのが居た。これは文学士だそうだ。文学士と云えば大学の卒業生だからえらい人なんだろう。妙に女のような優しい声を出す人だつた。もつとも驚いたのはこの暑いのにフランネルの襯衣を着ている。いくら薄地には相違なくつても暑いには極つてる。文学士だけにご苦労千万な服装をしたもんだ。しかもそれが赤シャツだから人を馬鹿にしている。あとから聞いたらこの男は年が年中赤シャツを着るんだそうだ。妙な病気があつた者だ。当人の説明では赤は身体に薬になるから、衛生のためにわざわざ誂らえるんだそうだが、入らざる心配だ。そんならついでに着物も袴も赤にすればいい。それから英語の教師に古賀とか云う大変顔色の悪い男が居た。大概顔の

蒼い人は瘠せてるもんだがこの男は蒼くふくれている。昔小学校へ行く時分、浅井の民さんと云う子が同級生にあつたが、この浅井のおやじがやはり、こんな色つやだった。浅井は百姓だから、百姓になるとあんな顔になるかと清に聞いてみたら、そうじゃありません、あの人はうらなりの唐茄子ばかり食べるから、蒼くふくれるんですと教えてくれた。それ以来蒼くふくれた人を見れば必ずうらなりの唐茄子を食った酬いだと思う。この英語の教師もうらなりばかり食つてるに違いない。もつともうらなりとは何の事か今もつて知らない。清に聞いてみた事はあるが、清は笑つて答えなかつた。大方清も知らないんだらう。それからおれと同じ数学の教師に堀田というのが居た。これは遅い毬栗坊主で、叡山の悪僧と云うべき面構である。人が町寧に辞令を見せたら見向きもせず、やあ君が新任の人か、ちと遊びに来給えアハハと云つた。何がアハハだ。そんな礼儀を心得ぬ奴の所へ誰が遊びに行くものか。おれはこの時からこの坊主に山嵐という渾名をつけてやった。漢学の先生はさすがに堅いものだ。昨日お着きで、さぞお疲れで、それでもう授業をお始めで、大分ご励精で、——とのべつに弁じたのは愛嬌のあるお爺さんだ。画学の教師は全く芸人風だ。べらべらした透綾の羽織を着て、扇子をぱちつかせて、お国はどちらでげす、え？ 東京？ そりや嬉しい、お仲間が出来て……私もこれ

で江戸っ子ですと云った。こんなのが江戸っ子なら江戸には生れたくないもんだと心中に考えた。そのほか一人一人についてこんな事を書けばいくらでもある。しかし際限がないからやめる。

挨拶が一通り済んだら、校長が今日はもう引き取ってもいい、もつとも授業上の事は数学の主任と打ち合せをしておいて、明後日から課業を始めてくれと云った。数学の主任は誰かと聞いてみたら例の山嵐であった。忌々しい、こいつの下に働くのかおやおやと失望した。山嵐は「おい君どこに宿つてるか、山城屋か、うん、今に行つて相談する」と云い残して白墨はくぼくを持つて教場へ出て行つた。主任の癖に向うから来て相談するなんて不見識な男だ。しかし呼び付けるよりは感心だ。

それから学校の門を出て、すぐ宿へ帰ろうと思つたが、帰つたつて仕方がないから、少し町を散歩してやろうと思つて、無暗に足の向く方があるき散らした。県庁も見た。古い前世紀の建築である。兵営も見た。麻布あさぶの聯隊れんたいより立派でない。大通りも見た。神樂坂かぐらざを半分かに狭くしたぐらいな道幅みちはばで町並まちなみはあれより落ちる。二十五万石の城下だつて高の知れたものだ。こんな所に住んでご城下だなどと威張いばつてる人間は可哀想かわいそうなものだと考えながらくると、いつしか山城屋の前に出た。広いようでも狭いものだ。これで大



抵いは見尽みつしたのだろう。帰かって飯いでも食くおうと門口かどぐちをはいった。帳場すわに坐すっていたかみさんが、おれの顔かほを見ると急に飛とび出してきてお帰り……と板いたの間まへ頭あたまをつけた。靴くつを脱ぬいで上がると、お座敷ざしきがあきましたからと下女げにょが二階にがいへ案内あんないをした。十五畳じゅうごじょうの表うら二階にがいで大きな床とこの間まがついている。おれは生なれてからまだこんな立派りつぱな座敷ざしきへはいった事ことはない。この後のちいつは入れるか分わらないから、洋服やうふくを脱ぬいで浴衣ゆかた一枚まいになつて座敷ざしきの真ま中なかへ大おほの字じに寝ねてみた。いい心持こころもちちである。

昼飯ひるめしを食くつてから早速さつそく清しみずへ手紙てがみをかいてやつた。おれは文章ぶんしょうがまずい上に字じを知らないから手紙てがみを書くのが大嫌だいきらいだ。またやる所ところもない。しかし清しみずは心配しんぱいしているだろう。難がた船ふねして死しにやしないかなどと思おもつちや困こまるから、奮ふん発ぱつして長いながいのを書かいてやつた。その文句ぶんぐはこうである。

「きのう着きいた。つまらん所ところだ。十五畳じゅうごじょうの座敷ざしきに寝ねている。宿屋しゆくやへ茶代ちやだいを五円ごえんやつた。かみさんが頭あたまを板いたの間まへすりつけた。夕ゆふべは寝ねられなかつた。清しみずが笹飴ささあめを笹ささごと食くう夢ゆめを見た。来年らいねんの夏なつは帰かる。今日けふ学校がっこうへ行いつてみんなにあだなをつけてやつた。校長がくしやうは狸ねこ、教頭がくしやうは赤あかシャツ、英語えいごの教師がくしやうはうらなり、数学すうがくは山嵐やまのあらし、画学ががくはのだいこ。今いまにいろいろな事ことを書かいてやる。さようなら」

手紙をかいてしまつたら、いい心持ちになつて眠気がさしたから、最前のように座敷の真中へのびのびと大の字に寝た。今度は夢も何も見ないでぐっすり寝た。この部屋かいと大きな声があるので目が覚めたら、山嵐がはいつて来た。最前は失敬、君の受持ちは……と人が起き上がるや否や談判を開かれたので大いに狼狽した。受持ちを聞いてみると別段むずかしい事もなさそうだから承知した。このくらいの事なら、明後日は愚、明日から始めると云つたつて驚ろかない。授業上の打ち合せが済んだら、君はいつまでこんな宿屋に居るつもりでもあるまい、僕がいい下宿を周旋してやるから移りたまえ。外のものでは承知しないが僕が話せばすぐ出来る。早い方がいいから、今日見て、あす移つて、あさつてから学校へ行けば極りがいいと一人で呑み込んでいる。なるほど十五畳敷にいつまで居る訳にも行くまい。月給をみんな宿料に払つても追つつかないかもしれない。五円の茶代を奮発してすぐ移るのはちと残念だが、どうせ移る者なら、早く引き越して落ち付く方が便利だから、そのところはよろしく山嵐に頼む事にした。すると山嵐はともかくもいつしよに来てみると云うから、行つた。町はずれの岡の中腹にある家で至極閑静だ。主人は骨董を売買するいか銀と云う男で、女房は亭主よりも四つばかり年嵩の女だ。中学校に居た時ウィッチと云う言葉を習つた事があるがこの女房はまさにな

イツチに似ている。ウイツチだつて人の女房だから構わない。とうとう明日から引き移る事にした。帰りに山嵐は通町とおうちようで氷水を一杯奢つたばいおこ。学校で逢つた時はやに横風おうふうな失敬な奴だと思つたが、こんなにいるいろ世話をしてくれるところを見ると、わるい男でもなさそうだ。ただおれと同じようにせつかちで肝癪かんしゃくもち持らしい。あとで聞いたらこの男が一番生徒に人望があるのだそうだ。

## 三

いよいよ学校へ出た。初めて教場へはいつて高い所へ乗つた時は、何だか変だつた。講釈をしながら、おれでも先生が勤まるのかと思つた。生徒はやかましい。時々図抜ずぬけた大きな声で先生と云う。先生には応こたえた。今まで物理学校で毎日先生先生と呼びつけていたが、先生と呼ぶのと、呼ばれるのは雲泥うんでいの差だ。何だか足の裏がむずむずする。おれは卑怯ひきような人間ではない。臆病おくびような男でもないが、惜おしい事に胆力たんによくが欠けている。先生と大きな声をされると、腹の減つた時に丸の内で午砲どんを聞いたような気がする。最初の一時間は何だかいい加減にやつてしまった。しかし別段困つた質問も掛かけられずに済んだ。

控所<sup>ひかえじよ</sup>へ帰つて来たたら、山嵐がどうだいと聞いた。うんと単簡に返事したら山嵐は安心したらしかつた。

二時間目に白墨<sup>はくぼく</sup>を持つて控所を出た時には何だか敵地へ乗り込むような気がした。教場へ出ると今度の組は前より大きな奴<sup>やつ</sup>ばかりである。おれは江戸<sup>えど</sup>つ子で華奢<sup>きゃしゃ</sup>に小作りに出来ているから、どうも高い所へ上がつても押しが利かない。喧嘩<sup>けんか</sup>なら相撲<sup>すもう</sup>取<sup>とり</sup>とでもやってみせるが、こんな大僧<sup>おおぞう</sup>を四十人も前へ並<sup>なら</sup>べて、ただ一枚<sup>まい</sup>の舌をたたいて恐<sup>きょう</sup>縮<sup>しゆく</sup>させる手際はない。しかしこんな田舎者<sup>いなかもの</sup>に弱身を見せると癖<sup>くせ</sup>になると思つたから、なるべく大きな声をして、少々巻き舌で講釈してやつた。最初のうちは、生徒も烟<sup>けむ</sup>に捲<sup>ま</sup>かれてぼんやりしていたから、それ見ろとますます得意になつて、べらんめい調を用いてたら、一番前の列の真中<sup>まんなか</sup>に居た、一番強そうな奴が、いきなり起立して先生と云う。そら来たと思ひながら、何だと聞いたたら、「あまり早くて分からんけれ、もちつと、ゆるゆる遣<sup>や</sup>つて、おくれんかな、もし」と云つた。おくれんかな、もしくは生温<sup>なまぬ</sup>るい言葉だ。早過ぎるなら、ゆつくり云つてやるが、おれは江戸つ子だから君等<sup>きみら</sup>の言葉は使えない、分<sup>わか</sup>らなければ、分るまで待つてゐるがいいと答えてやつた。この調子で二時間目は思つたより、うまく行つた。ただ帰りがけに生徒の一人がちよつとこの問題を解釈をしておくれんかな、もし、と出来

そうもない幾何の問題を持って逼つたには冷汗を流した。仕方がないから何だか分らない、この次教えてやると急いで引き揚げたら、生徒がわあと嘸した。その中に出来ん出来んと云う声が聞える。篋棒め、先生だつて、出来ないのは当り前だ。出来ないのを出来ないと云うのに不思議があるもんか。そんなものが出来るくらいなら四十円でこんな田舎へくるもんかと控所へ帰つて来た。今度はどうだとまた山嵐が聞いた。うんと云つたが、うんだけでは気が済まなかつたから、この学校の生徒は分らずやだなと云つてやつた。山嵐は妙な顔をしていた。

三時間目も、四時間目も昼過ぎの一時間も大同小異であつた。最初の日に出了た級は、いずれも少々ずつ失敗した。教師ははたで見るとほど楽じゃないと思つた。授業はひと通り済んだが、まだ帰れない、三時までほつ然として待つてなくてはならん。三時になると、受持級の生徒が自分の教室を掃除して報知にくるから検分をするんだそうだ。それから、出し席簿を一応調べてようやくお暇が出る。いくら月給で買われた身体だつて、あいた時間まで学校へ縛りつけて机と睨めつくらをさせるなんて法があるものか。しかしほかの連中はみんな大人しくご規則通りやつてるから新参のおればかり、だだを捏ねるのもよろしくないと思つて我慢していた。帰りがけに、君何でもかんでも三時過まで学校にいさせるの

は愚だぜと山嵐に訴えたら、山嵐はそうさアハハと笑ったが、あとから真面目になって、君あまり学校の不平を云うと、いかんぜ。云うなら僕だけに話せ、随分妙な人も居るかなと忠告がましい事を云った。四つ角で分れたから詳しい事は聞くひまがなかった。

それからうちへ帰つてくると、宿の亭主がお茶を入れましようと言つてやつて来る。

お茶を入れると云うからご馳走をするのかと思うと、おれの茶を遠慮なく入れて自分が飲むのだ。この様子では留守中も勝手にお茶を入れましようを一人で履行しているかも知れない。亭主が云うには手前は書画骨董がすきで、とうとうこんな商賈を内々で始めるようになりました。あなたもお見受け申すところ大分ご風流でいらつしやるらしい。ち

と道楽にお始めなすつてはいかがですと、飛んでもない勧誘をやる。二年前ある人の使に帝國ホテルへ行つた時は錠前直しと間違えられた事がある。ケツトを被つて、鎌倉の大仏を見物した時は車屋から親方と云われた。その外今日まで見損われた事は随分あるが、まだおれをつらまえて大分ご風流でいらつしやると云つたものはない。大抵はなりや様子でも分る。風流人なんていうものは、画を見て、頭巾を被るか短冊を持つてるものだ。このおれを風流人などと真面目に云うのはただの曲者じゃない。おれはそんな呑気な隠居のやるような事は嫌いだと言つたら、亭主はへへへと笑いな

がら、いえ始めから好きなものは、どなたもございませませんが、いったんこの道にはいると  
 なかなか出られませんかと一人で茶を注いで妙な手付てつきをして飲んでゐる。実はゆうべ茶を買  
 ってくれと頼たのんでおいたのだが、こんな苦い濃い茶はいやだ。一杯飲ばいむと胃に答えるよう  
 な気がする。今度からもつと苦くないのを買ってくれと云つたら、かしこまりましたとま  
 た一杯しぼつて飲んだ。人の茶だと思つて無暗むやみに飲むむ奴やつだ。主人が引き下がつてから、明  
 日の下読したよみをしてすぐ寝ねてしまった。

それから毎日毎日学校へ出ては規則通り働く、毎日毎日帰つて来ると主人がお茶を入れ  
 まししようと出てくる。一週間ばかりしたら学校の様子もひと通りは飲み込めたし、宿の夫  
 婦の人物も大概たいがいは分つた。ほかの教師に聞いてみると辞令を受けて一週間から一ヶ月ぐ  
 らいの間は自分の評判がいいだろうか、悪わるるいだろうか非常に気に掛かかるそうであるが、  
 おれは一向そんな感じはなかつた。教場で折々しくじるとその時だけはやな心持ちだが三  
 十分ばかり立つと奇麗きれいに消えてしまう。おれは何事によらず長く心配しようと思つても心  
 配が出来ない男だ。教場のしくじりが生徒にどんな影えい響きやうを与あたえて、その影響が校長や  
 教頭にどんな反応を呈ていするかまるで無頓着むとんじやくであつた。おれは前に云う通りあまり度胸の  
 据すわつた男ではないのだが、思い切りはすこぶるいい人間である。この学校がいけなければ

すぐどつかへ行く覚悟でいたから、狸も赤シャツも、ちつとも恐しくはなかった。まして  
教場の小僧共なんかには愛嬌もお世辞も使う気になれなかった。学校はそれでいいの  
だが下宿の方はそうはいかなかった。亭主が茶を飲みに来るだけなら我慢もするが、いろ  
いろな者を持つてくる。始めに持つて来たのは何でも印材で、十ばかり並べておいて、み  
んなで三円なら安い物だお買いなさいと云う。田舎巡りのへボ絵師じやあるまいし、そ  
んなものは入らないと云つたら、今度は華山とか何とか云う男の花鳥の掛物をもつて来  
た。自分で床の間へかけて、いい出来じやありませんかと云うから、そうかなと好加減  
に挨拶をすると、華山には二人ある、一人は何とか華山で、一人は何とか華山ですが、  
この幅はその何とか華山の方だと、くだらない講釈をしたあとで、どうです、あなたなら  
十五円にしておきます。お買いなさいと催促をする。金がないと断わると、金なんか、  
いつでもようございますとなかなか頑固だ。金があつても買わないんだと、その時は追っ  
払つちまつた。その次には鬼瓦ぐらいな大硯を担ぎ込んだ。これは端溪です、  
端溪ですと二遍も三遍も端溪がるから、面白半分に端溪た何だいと聞いたら、すぐ講釈を  
始め出した。端溪には上層中層下層とあつて、今時のものはみんな上層ですが、これはた  
しかに中層です、この眼をご覧なさい。眼が三つあるのは珍らしい。澆墨の具合も至極



よろしい、試してご覧なさいと、おれの前へ大きな硯を突きつける。いくらだと聞くと、持主が支那しなから持つて帰つて来て是非売りたいと云いますから、お安くして三十円にしておきましよと云う。この男は馬鹿ばかに相違そつういない。学校の方はどうかこうか無事に勤まりそ  
うだが、こう骨董責こつとうぜめに逢あつてはとても長く続きそうにない。

そのうち学校もいやになつた。ある日の晩大町おおまちと云う所を散歩していたら郵便局の隣となりに蕎麦そばとかいて、下に東京と注を加えた看板があつた。おれは蕎麦が大好きである。東京に居おつた時でも蕎麦屋の前を通つて薬味の香においをかぐと、どうしても暖簾のれんがぐぐりたくなつた。今日までは数学と骨董で蕎麦を忘れていたが、こうして看板を見ると素通りが出来なくなる。ついだから一杯食つて行こうと思つて上がり込んだ。見ると看板ほどでもない。東京と断ことわる以上はもう少し奇麗にしそうなものだが、東京を知らないのか、金がないのか、滅めつぼう法ぼうきたない。畳たたみは色が變つてお負けに砂でざらざらしている。壁かべは煤すすで真黒まっくろだ。天井てんじようはランプの油烟ゆえんで燻くすぼつてるのみか、低くつて、思わず首を縮めるくらいだ。ただ麗々と蕎麦の名前をかい張ちがり付けたねだん付だけは全く新しい。何でも古いうちを買つて二三日にさんち前から開業したに違ちがいなからう。ねだん付の第一号に天麩羅てんぷらとある。おい天麩羅を持つてこいと大きな声を出した。するとこの時まで隅すみの方に三人かたま

つて、何かつるつる、ちゅうちゅう食つてた連中が、ひとしくおれの方を見た。部屋が暗いので、ちよつと気がつかなかったが顔を合せると、みんな学校の生徒である。先方で挨拶をしたから、おれも挨拶をした。その晩は久し振に蕎麦を食つたので、旨かつたから天麩羅を四杯平げた。

翌日何の気もなく教場へはいると、黒板一杯ぐらいな大きな字で、天麩羅先生とかいてある。おれの顔を見てみんなわあと笑つた。おれは馬鹿馬鹿しいから、天麩羅を食つちや可笑しいかと聞いた。すると生徒の一人が、しかし四杯は過ぎるぞな、もし、と云つた。四杯食おうが五杯食おうがおれの錢でおれが食うのに文句があるもんかと、さつさと講義を済まして控所へ帰つて来た。十分立つて次の教場へ出ると一つ天麩羅四杯なり。但し笑うべからず。と黒板にかいてある。さつきは別に腹も立たなかつたが今度は癩に障つた。冗談も度を過ぎた。焼餅の黒焦のようなもので誰も賞め手はない。田舎者はこの呼吸が分からないからどこまで押して行つても構わないと云う了。見だろ。一時間あるくと見物する町もないような狭い都に住んで、外に何にも芸がないから、天麩羅事件を日露戦争のように触れちらかすんだらう。憐れな奴等だ。小供の時から、こんなに教育されるから、いやにひねっこびた、植木鉢の楓みたような小人が出来る

んだ。無邪気むじゃぎならいっしょに笑つてもいいが、こりやなんだ。小供こどもの癪くせに乙おつに毒気を持つてる。おれはだまつて、天麩羅を消して、こんないたずらが面白いが、卑怯ひきような冗談だ。君等は卑怯と云う意味を知つてるか、と云つたら、自分がした事を笑われて怒おこるのが卑怯じやろうがな、もしと答えた奴がある。やな奴だ。わざわざ東京から、こんな奴を教えに来たのかと思つたら情なくなつた。余計な減らず口を利かないで勉強しろと云つて、授業を始めてしまつた。それから次の教場へ出たら天麩羅を食うと減らず口が利きなくなるものなりと書いてある。どうも始末に終えない。あんまり腹が立つたから、そんな生意気な奴は教えないと云つてすたすた帰つて来てやつた。生徒は休みになつて喜んだそうだ。こうなると学校より骨董の方がまだましだ。

天麩羅蕎麦もうちへ帰つて、一晚寝たらそんなに肝癪かんしゃくに障らなくなつた。学校へ出てみると、生徒も出ている。何だか訳が分らない。それから三日ばかりは無事であつたが、四日目の晩に住田すみたと云う所へ行つて団子だんごを食つた。この住田と云う所は温泉のある町で城下から汽車だと十分ばかり、歩いて三十分で行かれる、料理屋も温泉宿も、公園もある上に遊廓ゆうかくがある。おれのはいった団子屋は遊廓の入口にあつて、大変うまいという評判だから、温泉に行つた帰りがけにちよつと食つてみた。今度は生徒にも逢わなかつたから、

誰も知るまいと思つて、翌日学校へ行つて、一時間目の教場へはいると団子二皿七錢と書いてある。實際おれは二皿食つて七錢払つた。どうも厄介な奴等だ。二時間目にもきつと何かあると思うと遊廓の団子旨い旨いと書いてある。あきれ返つた奴等だ。団子がそれで済んだと思つたら今度は赤手拭と云うのが評判になつた。何の事だと思つたら、つまらない来歴だ。おれはここへ来てから、毎日住田の温泉へ行く事に極めている。ほかの所は何を見ても東京の足元にも及ばないが温泉だけは立派なものだ。せつかく来た者だから毎日はいつてやろうという気で、晩飯前に運動かたがた出掛ける。ところが行くときは必ず西洋手拭の大きな奴をぶら下げて行く。この手拭が湯に染つた上へ、赤い縞が流れ出したのでちよつと見ると紅色に見える。おれはこの手拭を行きも帰りも、汽車に乗つてもあるいても、常にぶら下げている。それで生徒がおれの事を赤手拭赤手拭と云うんだそう。どうも狭い土地に住んでるとうるさいものだ。まだある。温泉は三階の新築で上等は浴衣をかして、流しをつけて八錢で済む。その上に女が天目へ茶を載せて出す。おれはいつでも上等へはいつた。すると四十円の月給で毎日上等へはいるのは贅沢だと云い出した。余計なお世話だ。まだある。湯壺は花崗石を畳み上げて、十五畳敷ぐらいの広さに仕切つてある。大抵は十三四人漬つてるがたまには誰も居ない事がある。深さは立つて

乳の辺まであるから、運動のために、湯の中を泳ぐのはなかなか愉快だ。おれは人の居ないのを見済みすましては十五疊の湯壺を泳ぎ巡まわつて喜んでいた。ところがある日三階から威勢いせいよく下りて今日も泳げるかなとざくろ口を覗のぞいてみると、大きな札へ黒々と湯の中で泳ぐべからずとかいて貼りはつけてある。湯の中で泳ぐものは、あまりあるまいから、この貼はり札ふだはおれのために特別に新調したのかも知れない。おれはそれから泳ぐのは断念した。泳ぐのは断念したが、学校へ出てみると、例の通り黒板に湯の中で泳ぐべからずと書いてあるには驚おどろいた。何だか生徒全体がおれ一人を探たんでい偵ていしているように思われた。くさくさした。生徒が何を云ったって、やろうと思つた事をやめるようなおれではないが、何でこんな狭苦しい鼻の先がつかえるような所へ来たのかと思うと情なくなつた。それでうちへ帰ると相変らず骨董責である。

#### 四

学校には宿直があつて、職員が代る代るこれをつとめる。但ただし狸たぬきと赤シヤツは例外である。何でこの兩人が当然の義務を免まぬかれるのかと聞いてみたら、奏そう任にん待たい遇ぐうだからと云

う。面白くもない。月給はたくさんとる、時間は少ない、それで宿直を逃がれるなんて不公平があるものか。勝手な規則をこしらえて、それが当たり前だというような顔をしている。よくまああんなにずうずうしく出来るものだ。これについては大分不公平であるが、山やま嵐あらしの説によると、いくら一人ひとりで不平を並べたつて通るものじゃないそうだ。一人だつて二人ふたりだつて正しい事なら通りそうなものだ。山嵐は *might is right* という英語を引いて説論せつ論を加えたが、何だか要領を得ないから、聞き返してみたら強者の権利と云う意味だそうだ。強者の権利ぐらいなら昔むかしから知っている。今さら山嵐から講釈をきかなくつてもいい。強者は議論としてこの宿直がいよいよおれの番に廻まわつて来た。一体かんしょう痾か性しょうだから夜具やぐふとん蒲団ふとんなどは自分のものへ楽に寝ないと寝たような心持ちがしない。小供の時から、友達のうちへ泊とまつた事はほとんどないくらいだ。友達のうちでさえ厭いやなら学校の宿直はなおさら厭だ。厭いとだけでも、これが四十円のうちへ籠こもつているなら仕方がない。我慢がまんして勤めてやろう。教師も生徒も帰ってしまったあとで、一人ぼかんとしているのは随ずいぶん分間ぶんかんが抜ぬけたものだ。宿直部屋は教場の裏手にある寄宿舎の西はずれの一室だ。ちよつとはいつてみたが、西日をまともに受けて、苦しくつて居たたまれない。田舎いなかだけあつて秋がきても、気長に

暑いもんだ。生徒の賄を取りよせて晩飯を済ましたが、まずいには恐れ入った。よくあんなものを食って、あれだけに暴れられたもんだ。それで晩飯を急いで四時半に片付けてしまうんだから豪傑に違いない。飯は食ったが、まだ日が暮れないから寝る訳に行かない。ちよつと温泉に行きたくなつた。宿直をして、外へ出るのはいい事だか、悪るい事だか知らないが、こうつくねんとして重禁錮同様な憂目に逢うのは我慢の出来るもんじやない。始めて学校へ来た時当直の人はと聞いたたら、ちよつと用達に出たと小使が答えたのを妙だと思つたが、自分に番が廻つてみると思い当る。出る方が正しいのだ。おれは小使にちよつと出てくると云つたら、何かご用ですかと聞くから、用じやない、温泉へはいるんだと答えて、さつさと出掛けた。赤手拭は宿へ忘れて来たのが残念だが今日は先方で借りとしよう。

それからかなりゆるりと、出たりはいつたりして、ようやく日暮方になつたから、汽車へ乗つて古町の停車場まで来て下りた。学校まではこれから四丁だ。訳はないとあるき出すと、向うから狸が来た。狸はこれからこの汽車で温泉へ行こうと云う計画なんだろう。すたすた急ぎ足にやってきたが、擦れ違つた時おれの顔を見たから、ちよつと挨拶をした。すると狸はあなたは今日は宿直ではなかつたですかねえと真面目くさつて聞いた。

なかつたですかねえもないもんだ。二時間前おれに向つて今夜は始めての宿直です。苦勞さま。と礼を云つたじやないか。校長なんかになるといやに曲りくねつた言葉を使うもんだ。おれは腹が立つたから、ええ宿直です。宿直ですから、これから歸つて泊る事はたしかに泊りますと云い捨てて済ましてあるき出した。豎町の四つ角までくると今度は山嵐やまあらしに出つ喰くわした。どうも狭い所だ。出てあるきさえすれば必ず誰かに逢う。「おい君は宿直じやないか」と聞くから「うん、宿直だ」と答えたら、「宿直が無暗むやみに出てあるくなんで、不都合ふつごうじやないか」と云つた。「ちつとも不都合なもんか、出てあるかない方が不都合だ」と威張いばつてみせた。「君のずぼらにも困るな、校長か教頭に出逢うと面倒めんどだぜ」と山嵐やまあらしに似合にわないない事を云うから「校長にはたつた今逢つた。暑い時には散歩さんぽでもしないと宿直も骨ほねでしよう」と校長が、おれの散歩をほめたよ」と云つて、面倒臭くせいから、さつさと学校へ歸つて来た。

それから日はすぐくれる。くれてから二時間ばかりは小使を宿直部屋へ呼んで話をしたが、それも飽あきたから、寝られないまでも床とこへはいらうと思つて、寝巻きまわに着換かえて、蚊帳かやを捲まくつて、赤い毛布けつとを跳はねのけて、とんと尻持しりもちを突ついて、仰向あおもむけになつた。おれが寝るときにとんと尻持しりもちをつくのは小供こどもの時からの癖くせだ。わるい癖くせだと云つて小川町おがわまちの下宿



に居た時分、二階下に居た法律学校の書生が苦情を持ち込んだ事がある。法律の書生なんてものは弱い癖に、やに口が達者なもので、愚<sup>ぐ</sup>な事を長たらしく述べ立てるから、寝る時にどんだん音がするのはおれの尻<sup>しり</sup>がわるいのじやない。下宿の建築が粗<sup>そ</sup>末<sup>まつ</sup>なんだ。掛<sup>か</sup>ケ合<sup>あ</sup>うなら下宿へ掛<sup>か</sup>ケ合<sup>あ</sup>えと凹<sup>へこ</sup>ましてやった。この宿直部屋は二階じやないから、いくら、どしんと倒<sup>たお</sup>れても構<sup>かま</sup>わな<sup>い</sup>。なるべく勢<sup>いきおい</sup>よく倒<sup>たお</sup>れないと寝<sup>ね</sup>たような心持ちがしない。ああ愉快だと足をうんと延ばすと、何だか両足へ飛び付いた。ざらざらして蚤<sup>のみ</sup>のようでもないからこいつあと驚<sup>おど</sup>ろいて、足を二三度毛布<sup>けつと</sup>の中で振<sup>ふ</sup>つてみた。するとざらざらと当たつたものが、急に殖<sup>ふ</sup>え出して脛<sup>すね</sup>が五六カ所、股<sup>もも</sup>が二三カ所、尻<sup>しり</sup>の下でぐちやりと踏<sup>ふ</sup>み潰<sup>つぶ</sup>したのが一つ、臍<sup>へそ</sup>の所まで飛び上がったのが一つ——いよいよ驚<sup>おど</sup>ろいた。早速<sup>さつそく</sup>起き上<sup>あが</sup>つて、毛布<sup>けつと</sup>をぱつと後ろへ抛<sup>ほう</sup>ると、蒲団の中から、バツタが五六十飛び出した。正体の知れない時は多少気味が悪<sup>わる</sup>るかつたが、バツタと相場が極<sup>き</sup>まつてみたら急に腹<sup>はら</sup>が立った。バツタの癖に人を驚<sup>おど</sup>ろかしやがつて、どうするか見ると、いきなり括<sup>くく</sup>り枕<sup>まくら</sup>を取<sup>と</sup>つて、二三度擲<sup>た</sup>きつけたが、相手が小<sup>ち</sup>さ過ぎるから勢<sup>いきおい</sup>よく抛<sup>な</sup>げつける割<sup>わり</sup>に利<sup>き</sup>目<sup>め</sup>がない。仕方がないから、また布団の上へ坐<sup>すわ</sup>つて、煤<sup>すす</sup>掃<sup>はき</sup>の時に塵<sup>ちり</sup>を丸<sup>まる</sup>めて畳<sup>たた</sup>み叩<sup>たた</sup>くように、そこら近<sup>ちか</sup>辺<sup>へ</sup>を無<sup>む</sup>暗<sup>あん</sup>にたいた。バツタが驚<sup>おど</sup>ろいた上に、枕<sup>まくら</sup>の勢<sup>いきおい</sup>で飛び上がるものだから、おれの肩<sup>かた</sup>だの、頭<sup>かぶ</sup>だの鼻<sup>はな</sup>の先<sup>さき</sup>だのへ

くつ付いたり、ぶつかつたりする。顔へ付いた奴は枕で叩く訳に行かないから、手で攪んで、一生懸命に擲きつける。忌々しい事に、いくら力を出しても、ぶつかる先が蚊帳だから、ふわりと動くだけで少しも手筈がない。バツタは擲きつけられたまま蚊帳へつらまつている。死にもどうもしない。ようやくの事に三十分ばかりでバツタは退治た。箒を持って来てバツタの死骸を掃き出した。小使が来て何ですかと云うから、何ですかもあるもんか、バツタを床の中に飼つとく奴がどこの国にある。間拔め。と叱つたら、私は存じませんと弁解をした。存じませんで済むかと箒を椽側へ抛り出したら、小使は恐る恐る箒を担いで帰って行った。

おれは早速寄宿生を三人ばかり総代に呼び出した。すると六人出て来た。六人だろうが十人だろうが構うものか。寝巻のまま腕まくりをして談判を始めた。

「なんでバツタなんか、おれの床の中へ入れた」

「バツタは何ぞな」と真先の一人がいった。やに落ち付いていやがる。この学校じゃ校長ばかりじゃない、生徒まで曲りくねった言葉を使うんだらう。

「バツタを知らないのか、知らなけりや見せてやろう」と云ったが、生憎掃き出してしまつて一匹も居ない。また小使を呼んで、「さっきのバツタを持ってこい」と云つたら、

「もう掃溜はきだめへ棄すててしまいましたが、拾つつて参まりましようか」と聞いた。「うんすぐ拾つつて来い」と云うと小使は急いで馳かけ出したが、やがて半紙の上へ十匹ばかり載のせて来て「どうもお気の毒ですが、生憎夜でこれだけしか見当りません。あしたになりましたらもつと拾つつて参まります」と云う。小使まで馬鹿ばかだ。おれはバツタの一つを生徒に見せて「バツタこれだ、大きなずう体をして、バツタを知らないた、何の事だ」と云うと、一番左の方に居た顔の丸い奴が「そりや、イナゴぞな、もし」と生意気におれを遣やり込こめた。

「籠べらぼう棒め、イナゴもバツタも同じもんだ。第一先生を捕つまえてなもした何だ。菜飯なめしは田で樂んがくの時より外に食うもんじやない」とあべこべに遣やり込こめてやったら「なもしと菜飯とは違ちがうぞな、もし」と云った。いつまで行いつてもなもしを使う奴だ。

「イナゴでもバツタでも、何でおれの床の中へ入れたんだ。おれがいつ、バツタを入れてくれと頼たのんだ」

「誰も入れやせんがな」

「入れないものが、どうして床の中に居るんだ」

「イナゴは温ぬくい所が好きじゃけれ、大方一人でおはいりたのじゃあろ」

「馬鹿あ云え。バツタが一人でおはいりになるなんて——バツタにおはいりになられてた

まるもんか。——さあなぜこんないたずらをしたか、云え」

「云えてて、入れんものを説明しようがないがな」

けちな奴等だ。自分で自分のした事が云えないくらいなら、てんでしないがいい。証しょうに  
抛なさえ拳がらなければ、しらを切るつもりで図太く構えていやがる。おれだつて中学に  
居た時分は少しはいたずらもしたもんだ。しかしだれがしたと聞かれた時に、尻込みをす  
るような卑怯ひきような事はただの一度もなかった。したものはしたので、しないものはしない  
に極きまつてる。おれなんぞは、いくら、いたずらをしたつて潔白なものだ。嘘を吐ついて罰ばつを  
逃にげるくらいなら、始めからいたずらなんかやるものか。いたずらと罰はつきもんだ。罰  
があるからいたずらも心持ちよく出来る。いたずらだけで罰はご免めんこうむ蒙もうるなんて下劣げれつな  
根性がどこの国に流行はやると思つてるんだ。金は借りるが、返す事はご免だと云う連中はみ  
んな、こんな奴等が卒業してやる仕事に相違そういない。全体中学校へ何しにはいつてるんだ。  
学校へはいつて、嘘を吐いて、胡魔化ごまかして、陰かげでこせこせ生意気な悪いたずらをして、そ  
うして大きな面で卒業すれば教育を受けたもんだと癩かんちが違いをしていやがる。話せない雑ぞ  
兵ひょうだ。

おれはこんな腐くさつた了りようけん見の奴等と談判するのは胸むな糞くそが悪わるいから、「そんなに云

われなきや、聞かなくっていい。中学校へはいつて、上品も下品も区別が出来ないのは気の毒なものだ」と云つて六人を逐つ放してやった。おれは言葉や様子こそあまり上品じゃないが、心はこいつらよりも遥かに上品なつもりだ。六人は悠々と引き揚げた。上部だけは教師のおれよりよっぽどえらく見える。実は落ち付いているだけなお悪るい。おれには到底これほどの度胸はない。

それからまた床へはいつて横になつたら、さつきの騒動で蚊帳の中はぶんぶん唸つてゐる。手燭をつけて一匹ずつ焼くなんて面倒な事は出来ないから、釣手はずして、長く畳んでおいて部屋の中で横堅十文字に振つたら、環が飛んで手の甲をいやというほど撲つた。三度目に床へはいつた時は少々落ち付いたがなかなか寝られない。時計を見ると十時半だ。考えてみると厄介な所へ来たもんだ。一体中学の先生なんて、どこへ行つてもこんなものを相手にするなら気の毒なものだ。よく先生が品切れにならない。よっぽど辛防強い朴念仁がなるんだろう。おれには到底やり切れない。それを思うと清なんてのは見上げたものだ。教育もない身分もない婆さんだが、人間としてはすこぶる尊とい。今まではあんなに世話になつて別段難有いとも思わなかつたが、こうして、一人で遠国へ来てみると、始めてあの親切がわかる。越後の笹飴が食いたければ、わざわざ越後まで

買いに行つて食わしてやつても、食わせるだけの価値は充じゆうぶん分ある。清はおれの事を欲がなくつて、真まっすぐ直な気性だと云つて、ほめるが、ほめられるおれよりも、ほめる本人の方が立派な人間だ。何だか清に逢いたくなつた。

清の事を考えながら、のつそつしている、突然とつぜんおれの頭の上で、数で云つたら三四十人もあろうか、二階が落つこちるほどどん、どん、どんと拍子ひょうしを取つて床板を踏みならす音がした。すると足音に比例した大きな関とぎの声が上がつた。おれは何事が持ち上がったのかと驚ろいて飛び起きた。飛び起きる途端とたんに、ははあきつきの意趣返いしゆがえしに生徒があばれるのだなと気がついた。手前のわるい事は悪るかつたと言つてしまわないうちは罪は消えないもんだ。わるい事は、手前達おほえに覚があるだろう。本来なら寝てから後悔こうかいしてあしたの朝でもあやまりに来るのが本筋だ。たとい、あやまらないまでも恐れ入つて、静せいしゆに寝ているべきだ。それを何だこの騒さわぎは。寄宿舎を建てて豚ぶたでも飼つておきあしまいし。気狂きちがひいじみた真似まねも大抵たいていにするがいい。どうするか見ると、寝巻のまま宿直部屋を飛び出して、楷子段はしごだんを三股半みまたはんに二階まで躍り上がった。すると不思議な事に、今まで頭の上で、たしかにどたばた暴れていたのが、急に静まり返つて、人声どころか足音もしなくなつた。これは妙だ。ランプはずでに消してあるから、暗くてどこに何が居るか判

然と分らないが、人氣のあるとないとは様子でも知れる。長く東から西へ貫いた廊下には鼠一匹も隠れていない。廊下のはずれから月がさして、遙か向うが際どく明るい。どうも変だ、おれは小供の時から、よく夢を見る癖があつて、夢中に跳ね起きて、わからぬ寝言を云つて、人に笑われた事がよくある。十六七の時ダイヤモンドを拾った夢を見た晩なぞは、むくりと立ち上がつて、そばに居た兄に、今のダイヤモンドはどうしたと、非常な勢で尋ねたくらいだ。その時は三日ばかりうち中の笑い草になつて大いに弱つた。ことによると今のも夢かも知れない。しかしたしかにあばれたに違いないがと、廊下の真中で考え込んでいると、月のさしている向うのはずれで、一二三わあと、三四十人の声がかたまつて響いたかと思う間もなく、前のように拍子を取つて、一同が床板を踏み鳴らした。それ見る夢じやないやつぱり事実だ。静かにしろ、夜なかだぞ、とこつちも負けんくらいな声を出して、廊下を向うへ馳けだした。おれの通る路は暗い、ただはずれに見える月あかりが目標だ。おれが馳け出して二間も来たかと思うと、廊下の真中で、堅い大きなものに向脛をぶつけて、あ痛いが頭へひびく間に、身体はすんと前へ抛り出された。こん畜生と起き上がつてみたが、馳けられない。気はせくが、足だけは云う事を利かない。じれつたいから、一本足で飛んで来たら、もう足音も人声も静まり返つて、森とし

ている。いくら人間が卑怯だつて、こんなに卑怯に出来るものじやない。まるで豚だ。こ  
うなれば隠れている奴を引きずり出して、あやまらせてやるまではひかないぞと、心を極  
めて寢室しんしつの一つを開けて中を検査しようと思つたが開かない。錠じょうをかけてあるのか、机  
か何か積んで立て懸かけてあるのか、押おしても、押しても決して開かない。今度は向う合せ  
の北側の室へやを試みた。開かない事はやっぱり同然である。おれが戸を開けて中に居る奴を  
引ひつ捕とらまえてやろうと、焦いら慮つてると、また東のはずれで鬨こゑの声と足拍子が始まつた。こ  
の野郎やろう申し合せて、東西相応じておれを馬鹿にする気だな、とは思つたがさてどうしてい  
いか分らない。正直に白状してしまふが、おれは勇氣のある割合に智ち慧えが足りない。こん  
な時にはどうしていいかさっぱりわからない。わからないけれども、決して負けるつもり  
はない。このままに済ましてはおれの顔にかかわる。江戸えどっ子は意い氣き地ぢがないと云われる  
のは残念だ。宿直をして鼻はな垂なれ小僧こぞうにかかわれて、手のつけようがなくて、仕方が  
ないから泣き寝入りにしたと思われちや一生の名折れだ。これでも元は旗本はたもとだ。旗本の  
元は清和源氏せいわけんじで、多田ただの満まん仲じゆうの後裔こうえいだ。こんな土百姓どびやくしやうとは生まれからして違ちが  
うんだ。ただ智慧のないところが惜しいだけだ。どうしていいか分らないのが困るだけだ。  
困こつたつて負けるものか。正直だから、どうしていいか分らないんだ。世の中に正直が勝



たないで、外に勝つものがあるか、考えてみる。今夜中に勝てなければ、あした勝つ。あした勝てなければ、あさつて勝つ。あさつて勝てなければ、下宿から弁当を取り寄せて勝つまでここに居る。おれはこう決心をしたから、廊下の真中へあぐらをかいて夜のあけるのを待っていた。蚊がぶんぶん来たけれども何ともなかった。さつき、ぶつけた向脛を撫でてみると、何だかぬらぬらする。血が出るんだろう。血なんか出たければ勝手に出るがいい。そのうち最前からの疲れが出て、ついうとうと寝てしまった。何だか騒がしいので、眼が覚めた時はえつ糞くそしまったと飛び上がった。おれの坐すわつてた右側にある戸が半分あい、生徒が二人、おれの前に立っている。おれは正気に返って、はっと思う途端に、おれの鼻の先にある生徒の足を引ひつ攫つかんで、力任せにぐいと引いたら、そいつは、どたりと仰あ向むけに倒れた。ざまを見る。残る一人がちよつと狼ろうばい狽ばいしたところを、飛びかかって、肩おせを押えて二三度こづき廻したら、あつけに取られて、眼をばちばちさせた。さあおれの部屋まで来いと引つ立てると、弱虫だと見えて、一も二もなく尾ついて来た。夜よはどうにあげている。

おれが宿直部屋へ連れてきた奴を詰きつもん問し始めると、豚は、打ぶつても擲ないても豚だから、ただ知らんがなで、どこまでも通す了見と見えて、けっして白状しない。そのうち一人来

る、二人来る、だんだん二階から宿直部屋へ集まってくる。見るとみんな眠ねむそうに瞼まぶたをはらしている。けちな奴等だ。一晩ぐらい寝ないで、そんな面をして男と云われるか。面でも洗って議論に來いと云ってやつたが、誰も面を洗おしいに行かない。

おれは五十人あまりを相手に約一時間ばかり押問答おしもんどうをしていると、ひよつくり狸がやつて來た。あとから聞いたたら、小使が学校に騒動がありますって、わざわざ知らせに行つたのだそうだ。これしきの事に、校長を呼ぶなんて意氣地がなさ過ぎる。それだから中学校の小使なんぞをしてるんだ。

校長はひと通りおれの説明を聞いた。生徒の言草いしぐさもちよつと聞いた。追つて処分するまでは、今まで通り学校へ出る。早く顔を洗つて、朝飯を食わないと時間に間に合わないから、早くしろと云つて寄宿生をみんな放免ほうめんした。手温てぬるい事だ。おれなら即席そくせきに寄宿生をことごとく退校してしまう。こんな悠ゆう長ちような事をするから生徒が宿直員を馬鹿にするんだ。その上おれに向つて、あなたもさぞご心配でお疲れでしょう、今日はご授業におよ及ばんと云うから、おれはこう答えた。「いえ、ちつとも心配じゃありません。こんな事が毎晩あつても、命のある間は心配にやなりません。授業はやりませす、一晩ぐらい寝なくつて、授業が出来ないくらいなら、頂戴ちようだいした月給を学校の方へ割戻わりもどします」校長は

何と思つたものか、しばらくおれの顔を見つめていたが、しかし顔が大分はれていきますよと注意した。なるほど何だか少々重たい気がする。その上べた一面痒い。蚊がよつぽと刺したに相違ない。おれは顔中ぼりぼり掻きながら、顔はいくら膨れたつて、口はたしかにきけますから、授業には差し支えませんかと答えた。校長は笑いながら、大分元気ですねと賞めた。実を云うと賞めたんじやあるまい、ひやかしたんだろう。

## 五

君釣りに行きませんかと赤シャツがおれに聞いた。赤シャツは気味の悪いように優しい声を出す男である。まるで男だか女だか分かりやしない。男なら男らしい声を出すもんだ。ことに大学卒業生じやないか。物理学校でさえおれくらいな声が出るのに、文学士がこれじや見つともない。

おれはそうですなあと少し進まない返事したら、君釣をした事がありますかと失敬な事を聞く。あんまりないが、子供の時、小梅の釣堀で鮒を三匹釣った事がある。それから神楽坂の毘沙門の縁日で八寸ばかりの鯉を針で引っかけて、しめたと思つたら、

ばちやりと落としてしまったがこれは今考えても惜しいと云つたら、赤シャツは顔を前方へ突き出してホホホと笑った。何もそう気取つて笑わなくても、よさそうな者だ。

「それじゃ、まだ釣りの味は分らんですな。お望みならちと伝授しましょう」とすこぶる得意である。だれがご伝授をうけるものか。一体釣や猟をする連中はみんな不人情な人間ばかりだ。不人情でなくつて、殺生をして喜ぶ訳がない。魚だつて、鳥だつて殺されるより生きてる方が楽に極まつてる。釣や猟をしなくつちや活計がたたないなら格別だが、何不足なく暮している上に、生き物を殺さなくつちや寝られないなんて贅沢な話だ。こう思ったが向うは文学士だけに口が達者だから、議論じゃ叶われないと思つて、だまつた。すると先生このおれを降参させたと疍違ひして、早速伝授しましょう。おひまなら、今日どうです、いっしょに行つちや。吉川君と二人ぎりじや、淋しいから、来たまえとしきりに勧める。吉川君というのは画学の教師で例の野だいこの事だ。この野だは、どういう了見だか、赤シャツのうちへ朝夕出入して、どこへでも随行して行く。まるで同輩じやない。主従みたようだ。赤シャツの行く所なら、野だは必ず行くに極っているんだから、今さら驚ろきもしないが、二人で行けば済むところを、なんで無愛想のおれへ口を掛けたんだろう。大方高慢ちきな釣道楽で、自分の釣るところをおれに見せびらか

すつもりかなんかで誘つたに違いない。そんな事で見せびらかされるおれじやない。鮪の二匹や三匹釣つたつて、びくともするもんか。おれだつて人間だ、いくら下手だつて糸さえ卸しや、何かかかるだろう、ここでおれが行かないと、赤シャツの事だから、下手だから行かないんだ、嫌いだから行かないんじゃないと邪推するに相違ない。おれはこう考えたから、行きましようと言えた。それから、学校をしまつて、一応うちへ歸つて、支度を整えて、停車場で赤シャツと野だを待ち合せて浜へ行つた。船頭は一人で、船は細長い東京辺では見た事もない恰好である。さつきから船中見渡すが釣竿が一本も見えない。釣竿なしで釣が出来るものか、どうする見だろうと、野だに聞くと、沖釣には竿は用いませぬ、糸だけでげすと錨を撫でて黒人じみた事を云つた。こう遣り込められるくらいならだまつていればよかつた。

船頭はゆつくりゆつくり漕いでいるが熟練は恐しいもので、見返えると、浜が小さく見えるくらいもう出ている。高柏寺の五重の塔が森の上へ抜け出して針のように尖がつてる。向側を見ると青嶋が浮いている。これは人の住まない島だそうだ。よく見ると石と松ばかりだ。なるほど石と松ばかりじゃ住めっこない。赤シャツは、しきりに眺望していい景色だと云つてる。野だは絶景でげすと云つてる。絶景だか何だか知らない

が、いい心持ちには相違ない。ひろびろとした海の上で、潮風に吹かれるのは薬だと思つた。いやに腹が減る。「あの松を見たまえ、幹が真直で、上が傘のように開いてターナーの画にありそうだね」と赤シャツが野だに云うと、野だは「全くターナーですね。どうもあの曲り具合つたらありませんね。ターナーそっくりですよ」と心得顔である。ターナーとは何の事だか知らないが、聞かないでも困らない事だから黙っていた。舟は島を右に見てぐるりと廻つた。波は全くない。これで海だとは受け取りにくいほど平だ。赤シャツのお陰ではなはだ愉快だ。出来る事なら、あの島の上へ上がってみたいと思つたから、あの岩のある所へは舟はつけられないんですかと聞いてみた。つけられん事もないですが、釣をするには、あまり岸じやいけないですと赤シャツが異議を申し立てた。おれは黙つてた。すると野だがどうです教頭、これからあの島をターナー島と名づけようじやありませんかと余計な発議をした。赤シャツはそいつは面白い、吾々はこれからそう云おうと賛成した。この吾々のうちにおれもはいつてるなら迷惑だ。おれには青嶋でたくさんだ。あの岩の上に、どうです、ラフハエルのマドンナを置いちや。いい画が出来ますぜと野だ云うと、マドンナの話はよそうじやないかホホホホと赤シャツが気味の悪い笑い方をした。なに誰も居ないから大丈夫ですと、ちよつとおれの方を見たが、わざと顔をそむけ

てにやにやと笑った。おれは何だかやな心持ちがした。マドンナだろうが、小旦那こだんなだろうが、おれの関係した事でないから、勝手に立たせるがよかろうが、人に分らない事を言つて分らないから聞いたつて構やしませんてえような風をする。下品な仕草だ。これで当人は私も江戸わたくし へどつ子でげすなどと云つてる。マドンナと云うのは何でも赤シャツの馴染なじみの芸者の渾名あだなか何かには違いないと思つた。なじみの芸者を無人島の松の木の下に立たして眺ながめていれば世話はない。それを野だが油絵にでもかいて展覧会へ出したらよかろう。

ここいらがいいだろうと船頭は船をとめて、錨いかりを卸した。幾尋いくひろあるかねと赤シャツが聞くと、六尋むひろぐらいだと云う。六尋ぐらいじゃ鯛たいはむずかしいなど、赤シャツは糸を海へなげ込んだ。大将鯛を釣る気と見える、豪胆ごうたんなものだ。野だは、なに教頭のお手際じやかかりますよ。それになぎですからとお世辞を云いながら、これも糸を繰くり出して投げ入れる。何だか先に錘おもりのような鉛なまりがぶら下がつてただけだ。浮うきがない。浮がなくなつて釣をするのは寒暖計なしで熱度をはかるようなものだ。おれには到とつてい底出来ないと見ていると、さあ君もやりたまえ糸はありますかと聞く。糸はあまるほどあるが、浮がありませんと云つたら、浮がなくなつちや釣が出来ないのは素人しろうとですよ。こうしてね、糸が水底みずそこへついた時分に、船縁ふなべりの所で人指しゆびで呼吸をはかるんです、食うとすぐ手に答える。――

そらきた、と先生急に糸をたぐり始めるから、何かかかったと思つたら何にもかからない、餌えがなくなつてたばかりだ。いい気味きびだ。教頭、残念な事をしましたね、今のはたしかに大ものに違いなかつたんですが、どうも教頭のお手際てぎわでさえ逃げられちゃ、今日は油断ができませんよ。しかし逃げられても何です。浮うと睨にらめくらしをしてる連中よりはましです。すね。ちようど歯どめがなくなつちや自転車へ乗れないのと同程度ですからねと野のだは妙みよな事ばかり喋しゃべ舌ぜつる。よつほど撲なぐりつけてやろうかと思つた。おれだつて人間だ、教頭ひとりで借り切つた海じやあるまいし。広い所ところだ。鰹かつおの一匹ひとひきぐらい義理にだつて、かかつてくれるだろうと、どぼんと錘つちと糸を抛ほうり込んでいい加減に指の先であやつつていた。

しばらくすると、何だかびくびくと糸にあたるものがある。おれは考えた。こいつは魚に相違ちがない。生きてるものでなくつちや、こうびくつく訳がない。しめた、釣れたとぐい手繰たぐり寄せた。おや釣れましたかね、後世おそ恐おそるべしだと野のだがひやかすうち、糸はもう大概手繰り込んでただ五尺ばかりほどしか、水に浸ひいておらん。船縁ふねのしほから覗のぞいてみたら、金魚こいしのような縞しまのある魚が糸にくつついて、右左ただよへ漾たいながら、手に応じて浮うき上がつてくる。面白い。水際みづぎから上げるとき、ぽちやりと跳はねたから、おれの顔は潮水うしづだらけになつた。ようやくつらまえて、針をとろうとするがなかなか取れない。捕つらまえた手はぬるぬ





で十五六上げた。可笑しい事に釣れるのも、釣れるのも、みんなゴルキばかりだ。鯛なんて薬にしたくつてもありやしない。今日は露西亜文学の大当りだと赤シャツが野だに話している。あなたの手腕でゴルキなんですから、私なんぞがゴルキなのは仕方ありません。当り前ですなと野だが答えている。船頭に聞くとこの小魚は骨が多くつて、まずくつて、とても食えないんだそうさ。ただ肥料には出来るそうさ。赤シャツと野だは一生懸命に肥料を釣っているんだ。気の毒の至りだ。おれは一匹で懲りたから、胴の間へ仰向けになつて、さつきから大空を眺めていた。釣をするよりこの方がよっぽど洒落ている。

すると二人は小声で何か話し始めた。おれにはよく聞えない、また聞きたくもない。おれは空を見ながら清の事を考えている。金があつて、清をつれて、こんな綺麗な所へ遊びに来たらさぞ愉快だろう。いくら景色がよくつても野だなどといつしよじやつまらない。清は皺苦茶だらけの婆さんだが、どんな所へ連れて出たつて恥ずかしい心持ちはしない。野だのようなのは、馬車に乘ろうが、船に乘ろうが、凌雲閣へのろうが、到底寄り付けたものじゃない。おれが教頭で、赤シャツがおれだったら、やつぱりおれにへけつけお世辞を使つて赤シャツを冷かすに違いない。江戸っ子は軽薄だと云うがなるほどこんなものが田舎巡りをして、私は江戸っ子でげすと繰り返していたら、軽薄は江戸っ子で、

江戸っ子は軽薄の事だと田舎者が思うに極まつてる。こんな事を考えていると、何だか二人がくすくす笑い出した。笑い声の間に何か云うが途切れ途切れでとんと要領を得ない。

「え？ どうだか……」 「……全くです……知らないんですから……罪ですね」 「まさか……」 「バツタを……本当ですよ」

おれは外の言葉には耳を傾けなかつたが、バツタと云う野だの語を聴いた時は、思わずきつとなつた。野だは何のためかバツタと云う言葉だけことさら力を入れて、明瞭におれの耳にはいるようにして、そのあとをわざとぼかしてしまった。おれは動かないでやはり聞いていた。

「また例の堀田が……」 「そうかも知れない……」 「天麩羅……ハハハハハ」 「……煽動して……」 「団子もっ」

言葉はかように途切れ途切れであるけれども、バツタだの天麩羅だの、団子だのというところをもつて推し測つてみると、何でもおれのことについて内所話ないしよばなをしているに相違ない。話すならもつと大きな声で話すがいい、また内所話をするくらいなら、おれなんか誘わなければいい。いけ好かない連中だ。バツタだろうが雪踏せつただろうが、非はおれにある事じゃない。校長がひとまずあずけると云つたから、狸たぬきの顔にめんじてただ今のところ

は控ひかえているんだ。野だの癖に入らぬ批評をしやがる。毛筆けふででもしやぶつて引つ込んでるがいい。おれの事は、遅おそかれ早かれ、おれ一人で片付けてみせるから、差支さしつかえはないが、また例の堀田がとか煽動してとか云う文句が気にかかる。堀田がおれを煽動して騒動そどうを大きくしたと云う意味なのか、あるいは堀田が生徒を煽動しておれをいじめたと云うのか方角がわからない。青空を見てみると、日の光がだんだん弱つて来て、少しはひやりとする風が吹き出した。線香せんこうの烟けむりのような雲が、透すき徹と底おの上を静かに伸のして行つたと思つたら、いつしか底の奥おくに流れ込んで、うすくもやを掛かけたようになった。

もう帰ろうかと赤シャツが思い出したように云うと、ええちようど時分です。今夜はマドンナの君にお逢あいですかと野だが云う。赤シャツは馬鹿ばかあ云つちやいけない、間違まちがいになると、船縁ふねに身を倚もたした奴やつを、少し起き直る。エへへへ大丈夫ですよ。聞いたつて……と野だが振り返つた時、おれは皿さらのような眼めを野だの頭の上へまともに浴びせ掛けてやった。野だはまぼしそうに引つ繰り返つて、や、こいつは降参だと首を縮めて、頭を搔かいた。何という猪口ちよこぎ才さいだろう。

船は静かな海を岸へ漕こぎ戻もどる。君釣つりはあまり好きでないと見えますねと赤シャツが聞くから、ええ寝ねていて空を見る方がいいですと答えて、吸まいかけた巻烟草まきたばこを海の中へたた

き込んだら、ジユと音がして艀ろの足で掻き分けられた浪の上を揺られながら漾ただよっていった。「君が来たんで生徒も大いに喜んでるから、奮ふんぱつ発してやってくれたまえ」と今度は釣えんこにはまるで縁えんこ故もない事を云い出した。「あんまり喜んでもいいないでしょう」「いえ、お世辞おせわじゃない。全く喜んでるんです、ね、吉川君」「喜んでるところじゃない。大騒おおさわぎです」と野だはにやにやと笑った。こいつの云う事は一々しやくさわ癩しやくさわに障るから妙だ。「しかし君注意しないと、険けん呑のんですよ」と赤シャツが云うから「どうせ険呑けんのんです。こうなりや険呑かんくこは覚悟かくごです」と云ってやった。実際おれは免めん職しよくになるか、寄宿生をことごとくあやまらせるか、どっちか一つにする了見りやうけんでいた。「そう云つちや、取りつきどころもないが——実は僕も教頭として君のたぬを思うから云うんだが、わるく取つちや困る」「教頭は全く君に好意を持つてるんですよ。僕も及およばずながら、同じ江戸っ子だから、なるべく長くご在ざい校がうを願ねがって、お互たがいに力ちからになろうと思つて、これでも蔭かげながら尽じん力りよくしているんですよ」と野だが人間並なまみの事を云った。野だのお世話せわになるくらいなら首くびを縊くって死しんじまわあ。

「それでね、生徒は君の来たのを大變かんげい歡迎かんげいしているんだが、そこにはいろいろな事情しやうじやうがあつてね。君も腹はらの立つ事もあるだろうが、ここが我慢がまんだと思つて、辛防しんぼうしてくれたま

え。決して君のためにならないような事はしないから」

「いろいろの事情た、どんな事情です」

「それが少し込み入ってるんだが、まあだんだん分りますよ。僕が話さないでも自然と分つて来るです、ね吉川君」

「ええなかなか込み入ってますからね。一朝一夕にや到底分りません。しかしだんだん分ります、僕が話さないでも自然と分つて来るです」と野達は赤シャツと同じような事を云う。

「そんな面倒な事情なら聞かなくてもいいんですが、あなたの方から話し出したから伺うんです」

「そりやごもつともだ。こつちで口を切つて、あとをつけないのは無責任ですね。それじやこれだけの事を云っておきましょう。あなたは失礼ながら、まだ学校を卒業したてで、教師は始めての、経験である。ところが学校というものはなかなか情実のあるもので、そ書生流に淡泊には行かないですからね」

「淡泊に行かなければ、どんな風に行くんです」

「さあ君はそう率直だから、まだ経験に乏しいと云うんですがね……」

「どうせ経験には乏しいはずです。履歴書りれきしょにもかいときました。が二十三年四ヶ月です。か  
ら」

「さ、そこで思わぬ辺から乗ぜられる事があるんです」

「正直にしていれば誰だれが乗じたって怖こわくはないです」

「無論怖くはない、怖くはないが、乗ぜられる。現に君の前任者がやられたんだから、気を付けないといけないと云うんです」

野だが大人おとなしくなつたなど気が付いて、ふり向いて見ると、いつしか艫ともの方で船頭と釣の話をしている。野だが居ないんでよつぽど話しよくなつた。

「僕の前任者が、誰だれに乗ぜられたんです」

「だれと指すと、その人の名譽に係するから云えない。また判然と証拠しょうこのない事だから云うとこつちの落度になる。とにかく、せつかく君が来たもんだから、ここで失敗しちや僕等ぼくらも君を呼んだ甲斐かひがない。どうか気を付けてくれたまえ」

「気を付けろつたつて、これより気の付けようはありません。わるい事をしなけりや好い  
んでしよう」

赤シャツはホホホと笑つた。別段おれは笑われるような事を云つた覚えはない。今こんに

日ただ今に至るまでこれでいいと堅く信じている。考えてみると世間の大部分の人はわ  
るくなる事を奨励しているように思う。わるくならなければ社会に成功はしないもの  
と信じているらしい。たまに正直な純粋な人を見ると、坊っちゃん達の小僧だのと難  
癖をつけて軽蔑する。それじゃ小学校や中学校で嘘をつくな、正直にしろと倫理の先  
生が教えない方がいい。いつそ思い切つて学校で嘘をつく法とか、人を信じない術とか、  
人を乗せる策を教授する方が、世のためにも当人のためにもなるだろう。赤シャツがホホ  
ホホと笑つたのは、おれの単純なのを笑つたのだ。単純や真率が笑われる世の中じゃ仕様  
がない。清はこんな時に決して笑つた事はない。大いに感心して聞いたもんだ。清の方が  
赤シャツよりよっぽど上等だ。

「無論悪い事をしなければ好いんですが、自分だけ悪い事をしなくても、人の悪  
いのが分らなくつちや、やつぱりひどい目に逢うでしょう。世の中には磊落なように見  
えても、淡泊なように見えても、親切に下宿の世話なんかしてくれても、めつたに油断の  
出来ないのがありますから……。大分寒くなつた。もう秋ですね、浜の方は霽でセピヤ色  
になつた。いい景色だ。おい、吉川君どうだい、あの浜の景色は……」と大きな声を出し  
て野だを呼んだ。なあるほどこりや奇絶ですね。時間があると写生するんだが、惜しいで



すね、このままにしておくのはと野だは大いにたたく。

港屋の二階に灯が一つついて、汽車の笛がヒューと鳴るとき、おれの乗っていた舟は磯の砂へぎぐりと、舳をつき込んで動かなくなつた。お早うお帰りと、かみさんが、浜に立つて赤シャツに挨拶する。おれは船端から、やつと掛声をして磯へ飛び下りた。

## 六

野だは大嫌いだ。こんな奴は沢庵石をつけて海の底へ沈めちまう方が日本のためだ。赤シャツは声が気に食わない。あれは持前の声をわざと気取つてあんな優しいように見せてるんだろう。いくら気取つたつて、あの面じや駄目だ。惚れるものがあつたつてマドンナぐらいなものだ。しかし教頭だけに野だよりむずかしい事を云う。うちへ帰つて、あいつの申し条を考えてみると一応もつともものようでもある。はつきりとした事は云わないから、見当がつきかねるが、何でも山嵐がよくない奴だから用心しろと云うのらしい。それならそうとはつきり断言するがいい、男らしくもない。そうして、そんな悪い教師なら、早く免職さしたらよかろう。教頭なんて文学士の癖に意気地のないもんだ。蔭

口をきくのでさえ、公然と名前が云えないくらいな男だから、弱虫に極まつてる。弱虫は親切なものだから、あの赤シャツも女のような親切ものなんだろう。親切は親切、声は声だから、声が気に入らないって、親切を無にしちや筋が違う。それにしても世の中は不思議なものだ、虫の好かない奴が親切で、気のあつた友達が悪漢だなんて、人を馬鹿にしている。大方田舎だから万事東京のさかに行くんだろう。物騒な所だ。今に火事が氷って、石が豆腐になるかも知れない。しかし、あの山嵐が生徒を煽動するなんて、いたずらをしそうもないがな。一番人望のある教師だと云うから、やろうと思つたら大抵の事は出来るかも知れないが、——第一そんな廻りくどい事をしないでも、じかにおれを捕まえて喧嘩を吹き懸けりや手数省ける訳だ。おれが邪魔になるなら、実はこれこれだ、邪魔だから辞職してくれと云や、よさそうなものだ。物は相談すくでどうでもなる。向うの云い条がもつともなら、明日にでも辞職してやる。ここばかり米が出来る訳でもあるまい。どこの果へ行つたって、のたれ死はしないつもりだ。山嵐もよつほど話せない奴だな。

ここへ来た時第一番に氷水を奢つたのは山嵐だ。そんな裏表のある奴から、氷水でも奢つてもらつちや、おれの顔に関わる。おれはたった一杯しか飲まなかつたから一錢五厘しか払わしぢやない。しかし一錢だろうが五厘だろうが、詐欺師の恩になつては、死ぬまで

心持ちがよくない。あした学校へ行ったら、一銭五厘返しておこう。おれは清きよから三円借りている。その三円は五年経たつた今日までまだ返さない。返せないんじゃない。返さないんだ。清は今に返すだろうなどと、かりそめにもおれの懐かいちゆう中をあてにしてはいない。おれも今に返そうなどと他人がましい義理立てはしないつもりだ。こつちがこんな心配をすればするほど清の心を疑うぐるようなもので、清の美しい心にけちを付けると同じ事になる。返さないのは清を踏ふみつけるのじゃない、清をおれの片破かたわれと思うからだ。清と山嵐とはもとより比べ物にならないが、たとい氷水だろうが、甘茶あまちやだろうが、他人から恵めぐみを受けて、だまつているのは向うをひとかどの人間と見立てて、その人間に対する厚意の所作だ。割前を出せばそれだけの事で済むところを、心のうちで難ありがた有いと恩に着るのは銭金で買える返礼じゃない。無位無冠でも一人前の独立した人間だ。独立した人間が頭を下げるのは百万両より尊たつといお礼と思わなければならない。

おれはこれでも山嵐に一銭五厘奮ふんぱつ発させて、百万両より尊とい返礼をした気である。山嵐は難ありがた有いと思つてしかるべきだ。それに裏へ廻ひれつつて卑劣な振舞ふるまいをするとは怪けしからん野郎やろうだ。あした行つて一銭五厘返してしまえば借りも貸しもない。そうしておいて喧嘩けんかをしてやろう。

おれはここまで考えたら、眠ねむくなつたからぐうぐう寝ねてしまった。あくる日は思う仔細しさいがあるから、例刻より早ヤ目に出校して山嵐を待ち受けた。ところがなかなか出て来ない。うらなりが出て来る。漢学の先生が出て来る。野だが出て来る。しまいには赤シャツまで出て来たが山嵐の机の上は白墨はくぼくが一本たてに寝ねているだけで閑静かんせいなものだ。おれは、控ひかえじよ

所かえじよへはいるや否や返かへそうと思つて、うちを出る時から、湯銭のように手の平へ入れて一銭五厘、学校まで握にぎつて来た。おれは膏あぶらつ手だから、開けてみると一銭五厘が汗あせをかいている。汗をかいてる銭を返しちや、山嵐が何とか云うだろうと思つたから、机の上へ置いてふうふう吹いてまた握にぎつた。ところへ赤シャツが来て昨日は失敬、迷めい惑わくでしたらうと云つたから、迷惑めいわくじやありません、お蔭で腹が減りましたと答えた。すると赤シャツは山嵐の机の上へ肱ひじを突ついて、あの盤ばん台たい面めんをおれの鼻の側面へ持つて来たから、何をするかと思つたら、君昨日返りがけに船の中で話した事は、秘密にしてくれたまえ。まだ誰だれにも話はなしやしませんと云つた。女のような声を出すだけに心配性な男と見える。話はなさない事はたしかである。しかしこれから話そうと云う心持ちで、すでに一銭五厘手の平に用意よういしているくらいだから、ここで赤シャツから口留くちどめめをされちや、ちと困る。赤シャツも赤シャツだ。山嵐と名を指さないにしろ、あれほど推察の出来る謎なぞをかけておきながら、

今さらその謎を解いちや迷惑だとは教頭とも思えぬ無責任だ。元来ならおれが山嵐と戦争をはじめて鎬しのぎを削けずつてる真中まんなかへ出て堂々とおれの肩かたを持つべきだ。それでこそ一校の教頭で、赤シャツを着ている主意も立つというもんだ。

おれは教頭に向むかつて、まだ誰にも話さないが、これから山嵐と談判するつもりだと云つたら、赤シャツは大いに狼狽ろうばいして、君そんな無法な事をしちや困る。僕は堀田君の事について、別段君に何も明言した覚えはないんだから——君がもしここで乱暴を働いてくれると、僕は非常に迷惑する。君は学校に騒動そうどうを起すつもりで来たんじゃないかと妙みょうに常識をはずれた質問をするから、当り前あたまえです、月給をもらつたり、騒動を起したりしちや、学校の方でも困るでしようと言つた。すると赤シャツはそれじゃ昨日の事は君の参考だけにとめて、口外してくれるなど汗をかいて依頼いらいに及およぶから、よろしい、僕も困るんだが、そんなにあなたが迷惑ならよしましようにと受け合つた。君大丈夫だいじょうぶかいと赤シャツは念を押おした。どこまで女らしいんだか奥行おくゆきがわからない。文学士なんて、みんなあんな連中ならつまらんものだ。辻褄つじつまの合わない、論理に欠けた注文をして恬然てんぜんとしている。しかもこのおれを疑うぐつてる。憚はばかりながら男だ。受け合つた事を裏へ廻まわつて反古ほんこにするようなさもない了りようけん見みはもつてるもんか。

ところへ両隣りの机の所有者も出校したんで、赤シャツは早々自分の席へ帰って行った。赤シャツは歩くき方から気取ってる。部屋の中を往来するのでも、音を立てないように靴の底をそつと落す。音を立てないであるくのが自慢になるもんだとは、この時から始めて知った。泥棒の稽古じやあるまいし、当り前にするがいい。やがて始業の喇叭がなった。山嵐はどうとう出て来ない。仕方がないから、一銭五厘を机の上へ置いて教場へ出掛けた。

授業の都合で一時間目は少し後れて、控所へ帰ったら、ほかの教師はみんな机を控えて話をしている。山嵐もいつの間にか来ている。欠勤だと思ったら遅刻したんだ。おれの顔を見るや否や今日は君のお蔭で遅刻したんだ。罰金を出したまえと云った。おれは机の上にあつた一銭五厘を出して、これをやるから取っておけ。先達て通町で飲んだ氷水の代だと山嵐の前へ置くと、何を云ってるんだと笑いかけたが、おれが存外真面目でいるので、つまらない冗談をするなと錢をおれの机の上に掃き返した。おや山嵐の癖にどこまでも奢る気だな。

「冗談じゃない本当だ。おれは君に氷水を奢られる因縁がないから、出すんだ。取らない法があるか」

「そんなに一銭五厘が気になるなら取つてもいいが、なぜ思い出したように、今時分返すんだ」

「今時分でも、いつ時分でも、返すんだ。奢られるのが、いやだから返すんだ」

山嵐は冷然とおれの顔を見てふんと云つた。赤シャツの依頼がなければ、ここで山嵐の卑劣ひれつをあばいて大喧嘩をしてやるんだが、口外しないと受け合つたんだから動きがとれない。人がこんなに真赤まっかになつてるのにふんという理窟りくつがあるものか。

「氷水の代は受け取るから、下宿は出てくれ」

「一銭五厘受け取ればそれでいい。下宿を出ようが出まいがおれの勝手だ」

「ところが勝手でない、昨日、あすこの亭主ていしゅが来て君に出てもらいたいと云うから、その訳を聞いたら亭主の云うのはもつともだ。それでももう一応たしかめるつもりで今朝けさあそこへ寄つて詳しい話くわを聞いてきたんだ」

おれには山嵐の云う事が何の意味だか分らない。

「亭主が君に何を話したんだか、おれが知つてるもんか。そう自分だけで極めたつて仕様があるか。訳があるなら、訳を話すが順だ。てんから亭主の云う方がもつともだなんて失敬千萬な事を云うな」

「うん、そんなら云つてやろう。君は乱暴であの下宿で持て余あまされてゐるんだ。いくら下宿の女房だつて、下女たあ違ちがうぜ。足を出して拭ふかせるなんて、威張いばり過ぎるさ」

「おれが、いつ下宿の女房に足を拭ふかせた」

「拭ふかせたかどうか知らないが、とにかく向うじや、君に困こつてるんだ。下宿料の十円や十五円は懸かけ物を一幅ぶく売りや、すぐ浮ういてくるつて云つてたぜ」

「利きいた風な事をぬかす野郎やろうだ。そんなら、なぜ置おいた」

「なぜ置おいたか、僕は知らん、置くことは置おいたんだが、いやになつたんだから、出ると云うんだらう。君出てやれ」

「当り前あたりまえだ。居てくれと手を合せたつて、居るものか。一体そんな云が懸かりを云うような所へ周しゅう旋せんする君からしてが不埒ふちちだ」

「おれが不埒ふちちか、君が大人おとなしくないんだか、どつちかだらう」

山嵐やまあらしもおれに劣おとらぬ肝癪かんしゃく持ちだから、負け嫌ぎらいいな大きな声を出す。控所かかどに居た連中は何事なにことが始はまつたかと思つて、みんな、おれと山嵐やまあらしの方かたを見て、颯あざを長くしてぼんやりしてゐる。おれは、別に恥はずかしい事ことをした覚えはないんだから、立ち上がりながら、部屋中へやぢゆう一通り見巡みまわしてやつた。みんなが驚おどろいてるなかに野のだだけは面白おもしろそうに笑わらつていた。お



れの大きな眼が、貴様も喧嘩をするつもりかと云う権幕で、野だの干瓢づらを射貫いた時に、野だは突然真面目な顔をして、大いにつつしんだ。少し怖わかったと見える。そのうち喇叭が鳴る。山嵐もおれも喧嘩を中止して教場へ出た。

午後は、先夜おれに対して無礼を働いた寄宿生の処分法についての会議だ。会議というものは生れて始めてだからとんと容子が分らないが、職員が寄つて、たかつて自分勝手な説をたてて、それを校長が好い加減に纏めるのだろう。纏めるといのは黒白の決しかねる事柄について云うべき言葉だ。この場合のような、誰が見たって、不都合としか思われぬ事件に会議をするのは暇潰しだ。誰が何と解釈したつて異説の出ようはずがない。こんな明白なのは即座に校長が処分してしまえばいいに。随分決断のない事だ。校長つてものが、これならば、何の事はない、煮え切らない愚図の異名だ。

会議室は校長室の隣りにある細長い部屋で、平常は食堂の代理を勤める。黒い皮で張つた椅子が二十脚ばかり、長いテーブルの周囲に並んでちよつと神田の西洋料理屋ぐらいな格だ。そのテーブルの端に校長が坐つて、校長の隣りに赤シャツが構える。あとは勝手次第に席に着くんだそうだが、体操の教師だけはいつも席末に謙遜するという話だ。お

れは様子が分らないから、博物の教師と漢学の教師の間へはいり込んだ。向うを見ると山嵐と野だが並んでる。野だの顔はどう考えても劣等だ。喧嘩はしても山嵐の方が遙かに趣がある。おやじの葬式の時に小日向の養源寺の座敷にかかった懸物はこの顔によく似ている。坊主に聞いてみたら韋駄天と云う怪物だそうだ。今日は怒ってるから、眼をぐるぐる廻しちや、時々おれの方を見る。そんな事で威嚇かされてたまるもんかと、おれも負けない気で、やつぱり眼をぐりつかせて、山嵐をにらめてやった。おれの眼は恰好はよくないが、大きい事においては大抵な人には負けない。あなたは眼が大きいから役者になるときつと似合いますと清がよく云ったくらいだ。

もう大抵お揃いでしようかと校長が云うと、書記の川村と云うのが一つ二つと頭数を勘定してみる。一人足りない。一人不足ですがと考えていたが、これは足りないはずだ。唐茄子のうらなり君が来ていない。おれとうらなり君とはどう云う宿世の因縁か知らないが、この人の顔を見て以来どうしても忘れられない。控所へくれば、すぐ、うらなり君が眼に付く、途中をあるいていても、うらなり先生の様子が心に浮ぶ。温泉へ行くと、うらなり君が時々蒼い顔をして湯壺のなかに膨れている。挨拶をするとへえと恐縮して頭を下げるから気の毒になる。学校へ出てうらなり君ほど大人しい人は居ない。めつた

に笑つた事もないが、余計な口をきいた事もない。おれは君子という言葉を書物の上で知つてるが、これは字引にあるばかりで、生きてるものではないと思つてたが、うらなり君に逢つてから始めて、やつぱり正体のある文字だと感心したくらいだ。

このくらい関係の深い人の事だから、会議室へはいるや否や、うらなり君の居ないのは、すぐ気がついた。実を云うと、この男の次へでも坐わろうかと、ひそかに目標にして来たくらいだ。校長はもうやがて見えるでしょうと、自分の前にある紫の袱紗包をほどこして、蒟蒻版のような者を読んでゐる。赤シャツは琥珀のパイプを絹ハンケチで磨き始めた。この男はこれが道楽である。赤シャツ相当のところだろう。ほかの連中は隣り同志で何だか私語き合つてゐる。手持無沙汰なのは鉛筆の尻に着いてゐる、護謨の頭でテールの上へしきりに何か書いてゐる。野だは時々山嵐に話しかけるが、山嵐は一向応じない。ただうんとかああと云うばかりで、時々怖い眼をして、おれの方を見る。おれも負けずに睨め返す。

ところへ待ちかねた、うらなり君が気の毒そうにはいつて来て少々用事がありまして、遅刻致しましたと慇懃に狸に挨拶をした。では会議を開きますと狸はまず書記の川村君に蒟蒻版を配布させる。見ると最初が処分の件、次が生徒取締の件、その他二三ヶ

条である。狸は例の通りもつたいぶつて、教育の生<sup>いきり</sup>靈<sup>りょう</sup>という見えでこんな意味の事を述べた。「学校の職員や生徒に過失のあるのは、みんな自分の寡徳<sup>かどく</sup>の致すところで、何か事件がある度に、自分はよくこれで校長が勤まるとひそかに慚愧<sup>ざんき</sup>の念に堪<sup>た</sup>えんが、不幸にして今回もまたかかる騒動を引き起したのは、深く諸君に向つて謝罪しなければならん。しかしひとたび起つた以上は仕方がない、どうにか処分をせんければならん、事實はすでに諸君のご承知の通りであるからして、善後策について腹藏のない事を参考のためにお述べ下さい」

おれは校長の言葉を聞いて、なるほど校長だの狸だのと云うものは、えらい事を云うもんだと感心した。こう校長が何もかも責任を受けて、自分の咎<sup>とが</sup>だとか、不徳だとか云うくらしいなら、生徒を処分するのは、やめにして、自分から先へ免<sup>めんしよく</sup>職<sup>しよく</sup>になつたら、よさそうなもんだ。そうすればこんな面倒<sup>めんどう</sup>な会議なんぞを聞く必要もなくなる訳だ。第一常識から云つても分つてる。おれが大人しく宿直をする。生徒が乱暴をする。わるいのは校長でもなけりや、おれでもない、生徒だけに極<sup>きま</sup>つてる。もし山嵐<sup>さんらん</sup>が煽<sup>せん</sup>動<sup>どう</sup>したとすれば、生徒と山嵐を退治<sup>たいじ</sup>ればそれでたくさんだ。人の尻<sup>しり</sup>を自分で背負<sup>しよ</sup>い込<sup>こ</sup>んで、おれの尻だ、おれの尻だと吹き散らかす奴が、どこの国にあるもんか、狸でなくつちや出来る芸当じやない。

彼はこんな条理に適わない議論を吐いて、得意気に一同を見廻した。ところが誰も口を開くものがない。博物の教師は第一教場の屋根に鳥がとまっているのを眺めている。漢学の先生は蒟蒻版を畳んだり、延ばしたりしてゐる。山嵐はまだおれの顔をにらめている。会議と云うものが、こんな馬鹿気たものなら、欠席して昼寝でもしている方がましだ。

おれは、じれったくなつたから、一番大いに弁じてやろうと思つて、半分尻をあげかけたら、赤シャツが何か云い出したから、やめにした。見るとパイプをしまつて、縞のある絹ハンケチで顔をふきながら、何か云つている。あの手巾はきつとマドンナから巻き上げたに相違ない。男は白い麻を使うもんだ。「私も寄宿生の乱暴を聞いてはなはだ教頭として不行届であり、かつ平常の徳化が少年に及ばなかつたのを深く慚ずるのであります。でこう云う事は、何か陥欠があると起るもので、事件その物を見ると何だか生徒だけがわるいようであるが、その真相を極めると責任はかえつて学校にあるかも知れない。だから表面上にあらわれたところだけで嚴重な制裁を加えるのは、かえつて未来のためによくないかとも思われます。かつ少年血氣のものであるから活氣があふれて、善悪の考えはなく、半ば無意識にこんな悪戯をやる事はないとも限らん。でもとより処分法は校長のお考えにある事だから、私の容喙する限りではないが、どうかその辺をご斟酌になつ

て、なるべく寛大なお取計とりはからいを願いたいと思います」

なるほど狸が狸なら、赤シャツも赤シャツだ。生徒があげられるのは、生徒がわるいんじゃない教師が悪るいんだと公言している。気狂きちがいが人の頭を撲りなぐ付けるのは、なぐられた人がわるいから、気狂がなぐるんだそうだ。難ありがた有かたい合せだ。活気にみちて困るなら運動場へ出て相撲すもうでも取るがいい、半ば無意識に床の中へバツタを入れられてたまるものか。この様子じゃ寝頸ねくびをかかれても、半ば無意識だつて放免するつもりだろう。

おれはこう考えて何か云おうかなと考えてみたが、云うなら人を驚ろすかように滔々とうとうと述べたてなくつちやつまらない、おれの癖として、腹が立ったときに口をきくと、二言か三言で必ず行き塞つまつてしまう。狸でも赤シャツでも人物から云うと、おれよりも下等だが、弁舌はなかなか達者だから、まずい事を喋舌しゃべつて揚あげ足を取られちゃ面白くない。ちよつと腹案を作つてみよう、胸のなかで文章を作つてる。すると前に居た野だのだが突然起立したには驚ろいた。野だの癖に意見を述べるなんて生意気だ。野だは例のへらへら調で「実に今回のバツタ事件及び咄とつかん喊事件は吾々心ある職員をして、ひそかに吾校わが将来の前途ぜんとに危惧きぐの念を抱いだかしむるに足る珍事ちんじでありまして、吾々職員たるものはこの際奮ふるつて自ら省りみて、全校の風紀を振しん肅しゆくしなければなりません。それでただ今校長及び教頭

のお述べになつたお説は、実に肯綮こうけいに中つた剴切がいせつなお考えで私は徹頭徹尾てつとうてつび賛成致します。どうかなるべく寛大かんだいのご処分を仰ぎたいと思ひます」と云つた。野だの云う事は言語はあるが意味がない、漢語をのべつに陳列ちんれつするぎりで訳が分らない。分つたのは徹頭徹尾賛成致しますと云う言葉だけだ。

おれは野だの云う意味は分らないけれども、何だか非常に腹が立つたから、腹案も出来ないうちに起たち上がつてしまつた。「私は徹頭徹尾反対です……」と云つたがあとが急に出来来ない。「……そんな頓珍漢とんちんかんな、処分は大嫌いだいきらです」とつけたら、職員が一同笑ひ出した。「一体生徒が全然悪わるいんです。どうしても詫あやまらせなくっちゃ、癖くせになります。退校たいこうさしても構わづらいませぬ。……何だ失敬な、新しく来た教師だと思つて……」と云つて着席せきした。すると右隣りに居る博物が「生徒がわるい事も、わるいが、あまり嚴重な罰などをするとかえつて反動を起していけないでしょう。やつぱり教頭のおっしゃる通り、寛大方かんたうに賛成します」と弱い事を云つた。左隣の漢学は穩便説おんびんせつに賛成と云つた。歴史も教頭と同説だと云つた。忌々いまいましい、大抵おほむねのものは赤シャツ党だ。こんな連中が寄り合つて学校を立てていりや世話はない。おれは生徒をあやまらせるか、辞職するか二つのうち一つに極めてるんだから、もし赤シャツが勝ちを制したら、早速うちへ歸つて荷作りをする覚か

悟くわでいた。どうせ、こんな手合てあいを弁べん口こうで屈くつ伏ぷくさせる手際はなし、させたところまでご交際を願うのは、こつちでご免だ。学校に居ないとすればどうなったって構うもんか。また何か云うと笑うに違いない。だれが云うもんかと澄すましていた。

すると今までだまつて聞いていた山嵐が奮然として、起ち上がった。野郎また赤シャツ賛成の意を表するな、どうせ、貴様とは喧嘩だ、勝手にしろと見ていると山嵐は硝子窓ガラスを振ふるわたせるような声で「私は教頭及びその他諸君のお説には全然不同意であります。というものはこの事件はどの点から見ても、五十名の寄宿生が新来の教師某氏ぼうしを軽侮けいぶしてこれを翻ほん弄ろうしようとした所しよ為いとより外ほかには認められぬのであります。教頭はその原因を教師の人物いかにお求めになるようでありますが失礼ながらそれは失言かと思ひます。某氏が宿直にあたられたのは着後早々の事で、まだ生徒に接せられてから二十日に満たぬ頃ころであります。この短かい二十日間において生徒は君の学問人物を評価し得る余地がないのであります。軽侮されべき至当な理由があつて、軽侮を受けたのなら生徒の行為に斟しん酌しゃくを加える理由もありましようが、何らの原因もないのに新来の先生を愚弄ぐろうするような軽薄な生徒を寛かん假かしては学校の威信いしんに関わる事と思ひます。教育の精神は単に学問を授けるばかりではない、高こう尚しょうな、正直な、武士的な元氣を鼓吹こすいすると同時に、野卑やひな、軽躁けいそうな、



暴慢な悪風を掃蕩するにあると思います。もし反動が恐ろしいの、騒動が大きくなるの  
 と姑息な事を云つた日にはこの弊風はいつ矯正出来るか知れませんか。かかる弊風を  
 杜絶するためにこそ吾々はこの学校に職を奉じているので、これを見逃がすくらいなら始  
 めから教師にならん方がいいと思います。私は以上の理由で寄宿生一同を厳罰に処する  
 上に、当該教師の面前において公けに謝罪の意を表せしむるのを至当の所置と心得ます」  
 と云いながら、どんと腰を卸した。一同はだまって何にも言わない。赤シャツはまたパイ  
 プを拭き始めた。おれは何だか非常に嬉しかった。おれの云おうと思うところをおれの代  
 りに山嵐がすっかり言ってくれたようなものだ。おれはこう云う単純な人間だから、今ま  
 での喧嘩はまるで忘れて、大いに難有いと云う顔をもつて、腰を卸した山嵐の方を見た  
 ら、山嵐は一向知らん面をしている。

しばらくして山嵐はまた起立した。「ただ今ちよつと失念して言い落しましたから、申  
 します。当夜の宿直員は宿直中外出して温泉に行かれたようであるが、あれはもつての外  
 の事と考えます。いやしくも自分が一校の留守番を引き受けながら、咎める者のないのを  
 幸に、場所もあるうに温泉などへ入湯に行くなどと云うのは大きな失体である。生徒は生  
 徒として、この点については校長からとくに責任者にご注意あらん事を希望します」

妙な奴だ、ほめたと思つたら、あとからすぐ人の失策をあばいている。おれは何の気もなく、前の宿直が出あるいた事を知つて、そんな習慣だと思つて、つい温泉まで行つてしまつたんだが、なるほどそう云われてみると、これはおれが悪かった。攻撃こうげきされても仕方がない。そこでおれはまた起つて「私は正に宿直中に温泉に行きました。これは全くわるい。あやまります」と云つて着席したら、一同がまた笑い出した。おれが何か云いさえすれば笑う。つまらん奴等やつらだ。貴様等これほど自分のわるい事を公けにわるかつたと断言出来るか、出来ないから笑うんだろう。

それから校長は、もう大抵ご意見もないようでありますから、よく考えた上で処分しましょうと云つた。ついでだからその結果を云うと、寄宿生は一週間の禁足になつた上に、おれの前へ出て謝罪をした。謝罪をしなければその時辞職して帰るところだつたがなまじい、おれのいう通りになつたのでどうどう大変な事になつてしまつた。それはあとから話すが、校長はこの時会議の引き続きだと号してこんな事を云つた。生徒の風儀ふうぎは、教師の感化で正していかななくてはならん、その一着手として、教師はなるべく飲食店などにしゅつ出にゅう入にゅうしない事にした。もつとも送別会などの節は特別であるが、単独にあまり上等でない場所へ行くのはよしたい——たとえば蕎麦屋そばやだの、団子屋だんごやだの——と云いかけたらまた

一同が笑った。野だが山嵐を見て天麩羅と云つて目くばせをしたが山嵐は取り合わなかった。いい気味だ。

おれは脳がわるいから、狸の云うことなんか、よく分らないが、蕎麦屋や団子屋へ行つて、中学の教師が勤まらなくなつちや、おれみたような食い心棒にや到底出来つ子ないと思つた。それなら、それでいいから、初手から蕎麦と団子の嫌いなものと注文して雇うがいい。だんまりで辞令を下げておいて、蕎麦を食うな、団子を食うなと罪なお布令を出すのは、おれのような外に道楽のないものにとつては大変な打撃だ。すると赤シャツがまた口を出した。「元来中学の教師なぞは社会の上流にくらいするものだからして、単に物質的の快樂ばかり求めるべきものでない。その方に耽るとつい品性にわるい影響を及ぼすようになる。しかし人間だから、何か娛樂がないと、田舎へ来て狭い土地では到底暮せるものではない。それで釣に行くとか、文学書を読むとか、または新体詩や俳句を作るとか、何でも高尚な精神的娛樂を求めなくつてはいけない……」

だまつて聞いてると勝手な熱を吹く。沖へ行つて肥料を釣つたり、ゴルキが露西亞の文学者だつたり、馴染の芸者が松の木の下に立つたり、古池へ蛙が飛び込んだりするのが精神的娛樂なら、天麩羅を食つて団子を呑み込むのも精神的娛樂だ。そんな下さらない娛樂

を授けるより赤シャツの洗濯せんたくでもするがいい。あんまり腹が立ったから「マドンナに逢あうのも精神的娯楽ですか」と聞いてやった。すると今度は誰も笑わない。妙な顔をして互たがいに眼と眼を見合せている。赤シャツ自身は苦しそうに下を向いた。それ見ろ。利いたろう。ただ気の毒だったのはうらなり君で、おれが、こう云つたら蒼い顔をますます蒼くした。

## 七

おれは即夜下宿そくやを引き払はらった。宿へ帰つて荷物をまとめていると、女房にようぼうが何か不都合ふつごうでもございましたか、お腹の立つ事があるなら、云つておくれたら改めますと云う。どうも驚おどろく。世の中にはどうして、こんな要領を得ない者ばかり揃そろつてるんだろう。出てもらいたいんだか、居てもらいたいんだか分わかりやしない。まるで氣狂きちがいだ。こんな者を相手に喧嘩けんかをしたって江戸えどっ子の名折れだから、車屋をつれて来てさっさと出てきた。

出た事は出たが、どこへ行くというあてもない。車屋が、どちらへ参りますと云うから、だまつて尾ついて来い、今にわかる、と云つて、すたすたやって来た。面倒めんどうだから山城屋へ行いこうかとも考えたが、また出なければならぬから、つまり手数だ。こうして歩いてる

うちには下宿とか、何とか看板のあるうちを目付け出すだろう。そうしたら、そこが天意に叶ったわが宿と云う事にしよう。とぐるぐる、閑静で住みよさそうな所をあるいているうち、とうとう鍛冶屋町へ出てしまった。ここは土族屋敷で下宿屋などのある町ではないから、もつと賑やかな方へ引き返そうかとも思ったが、ふといい事を考え付いた。おれが敬愛するうらなり君はこの町内に住んでいる。うらなり君は土地の人で先祖代々の屋敷を控えているくらいだから、この辺の事情には通じているに相違ない。あの人を尋ねて聞いたら、よさそうな下宿を教えてくださいませんか。幸一度挨拶に来て勝手は知ってるから、捜がしてあるく面倒はない。ここだろうと、いい加減に見当をつけて、ご免ご免と二返ばかり云うと、奥から五十ぐらいな年寄が古風な紙燭をつけて、出て来た。おれは若い女も嫌いではないが、年寄を見ると何だかなつかしい心持ちがする。大方清がすきだから、その魂が方々のお婆さんに乗り移るだろう。これは大方うらなり君のおつ母さんだろう。切り下げの品格のある婦人だが、よくうらなり君に似ている。まあお上がりと云うところを、ちよつとお目にかかりたいからと、主人を玄関まで呼び出して実はこれこれだが君どこか心当りはありませんかと尋ねてみた。うらなり先生それはさぞお困りでございましょう、としばらく考えていたが、この裏町に萩野と云って老人夫婦ぎりで暮ら

しているものがある、いつぞや座敷ざしきを明けておいても無駄だから、たしかな人があるなら貸してもいいから周旋しゅうせんしてくれと頼たのんだ事がある。今でも貸すかどうか分らんが、まあいつしよに行つて聞いてみましよう、親切おんじやうに連れて行つてくれた。

その夜から萩野の家の下宿人となつた。驚いたのは、おれがいか銀の座敷を引き払うと、翌あくるひ日ひから入れ違ちがいに野だが平気な顔をして、おれの居た部屋を占領せんりやうした事だ。さすがのおれもこれにはあきれた。世の中はいかさま師ばかりで、お互たがひに乗せつこをしているのかも知れない。いやになつた。

世間せけんがこんなものなら、おれも負けない気で、世間並せけんなみにしなくちや、遣りきれない訳になる。巾着切きんちやくきりの上前じやうぜんをはねなければ三度のご膳ぜんが戴いたけないと、事が極きまればこうして、生きてるのも考え物だ。と云つてぴんぴんした達者たつしやなからだで、首くびを縊くつちや先祖へ濟まない上に、外聞げいぶんが悪い。考かんえると物理学ぶつがく学校がくなどへはいつて、数学すうがくなんて役にも立たない芸げいを覚おぼえるよりも、六百円ろくひやくえんを資本もとにして牛乳屋ぎゅうにゅうやでも始めればよかつた。そうすれば清もおれの傍そばを離はなれずに濟たすむし、おれも遠くから婆ばあさんの事を心配しんぱせずに暮くらされる。いつしよに居るうちは、そうでもなかつたが、こうして田舎いなかへ来てみると清はやつぱり善人だ。あんな気立きだてのいい女は日本中にっぽんぢゆうさがして歩いたつてめつたにはない。婆さん、おれの立つとき

に、少々風邪を引いていたが今頃はどうか知らん。先だつての手紙を見たらさぞ喜んだらう。それにしても、もう返事がきそうなものだが——おれはこんな事ばかり考えて二三日暮していた。

気になるから、宿のお婆さんに、東京から手紙は来ませんかと時々尋ねてみるが、聞くたんびに何にも参りませんと気の毒そうな顔をする。ここの夫婦はいか銀とは違つて、もとが士族だけに双方共上品だ。爺さんが夜になると、変な声を出して謡をうたうには閉口するが、いか銀のようにお茶を入れましようと思つて無暗に出て来ないから大きに樂だ。お婆さんは時々部屋へ来ていろいろな話をする。どうして奥さんをお連れなさつて、いっしょにお出でなんだのぞなもしなどと質問をする。奥さんがあるように見えますかね。可哀想にこれでもまだ二十四ですぜと云つたらそれでも、あなた二十四で奥さんがおありなさるのは当り前ぞなもしと冒頭を置いて、どこの誰さんは二十でお嫁をお貰いたの、どこの何とかさんは二十二で子供を二人お持ちたのと、何でも例を半ダースばかり挙げて反駁を試みたには恐れ入つた。それじゃ僕も二十四でお嫁をお貰いけるけれ、世話をしておくれんかなと田舎言葉を真似て頼んでみたら、お婆さん正直に本当かなもしと聞いた。「本当の本当のつて僕あ、嫁が貰いたくつて仕方がないんだ」

「そうじやろうがな、もし。若いうちは誰もそんなものじゃけれ」この挨拶あいさつには痛み入つて返事が出来なかつた。

「しかし先生はもう、お嫁がおありなさるに極きまつとらい。私はちやんと、もう、睨ねらんどるぞなもし」

「へえ、活眼かつがんだね。どうして、睨ねらんどるんですか」

「どうしてて。東京から便りはないか、便りはないかて、毎日便りを待ち焦こがれておいでるじやないかなもし」

「こいつあ驚おどろいた。大変な活眼だ」

「中あたりましたろうがな、もし」

「そうですね。中つたかも知れませんよ」

「しかし今時の女子おなごは、昔むかしと違ちがうて油断が出来んけれ、お気をお付けたがええぞなもし」  
「何ですかい、僕の奥さんが東京で間男でもこしらえていますか」

「いいえ、あなたの奥さんはたしかじゃけれど……」

「それで、やっと安心した。それじゃ何を気を付けるんですい」

「あなたのはたしか——あなたのはたしかじゃが——」



「どこに不たしかなのが居ますかね」

「ここ等らにも大分居おります。先生、あの遠山のお嬢じょうさんをご存知かなもし」

「いいえ、知りませんね」

「まだご存知ないかなもし。こちらであなた一番の別嬪べっぴんさんじゃがなもし。あまり別嬪さんじゃけれ、学校の先生方はみんなマドンナマドンナと言うといでるぞなもし。まだお聞きのかなもし」

「うん、マドンナですか。僕あ芸者の名かと思つた」

「いいえ、あなた。マドンナと云うと唐人とうじんの言葉で、別嬪さんの事じゃろうがなもし」

「そうかも知れないね。驚いた」

「大方画学の先生がお付けた名ぞなもし」

「野だがつけたんですかい」

「いいえ、あの吉川よしかわ先生がお付けたのじゃがなもし」

「そのマドンナが不たしかなんですかい」

「そのマドンナさんが不たしかなマドンナさんでな、もし」

「厄やつかい介あだなだね。渾名あだなの付いてる女にや昔から碌ろくなものは居ませんからね。そうかも知れま

せんよ」

「ほん当にそうじゃなもし。鬼神きしんのお松まつじやの、姫妃だつきのお百ひゃくじやのてて怖こわい女おが居おりまし  
たなもし」

「マドンナもその同類なんですかね」

「そのマドンナさんがなもし、あなた。そらあの、あなたをここへ世話をしておくれた古  
賀先生なもし——あの方の所へお嫁よめに行く約やくそく束が出来ていたのじゃがなもし——」

「へえ、不思議なもんですね。あのうらなり君が、そんな艶福えんぷくのある男とは思わなかつ  
た。人みは見懸みかけによらない者だな。ちつと気を付けよう」

「ところが、去年あすこのお父さんが、お亡くなりて、——それまではお金もあるし、銀  
行の株も持つてお出いでるし、万事都合つごうがよかつたのじゃが——それからというものは、どう  
いうものか急に暮し向きが思わしくなくなつて——つまり古賀さんがあまりお人よが好過よす  
ぎるけれ、お欺だまされたんぞなもし。それや、これやお興こし入いれも延びているところへ、あの  
教頭さんがお出いでて、是非お嫁にほしいとお云いいるのじゃがなもし」

「あの赤シャツがですか。ひどい奴やつだ。どうもあのシャツはただのシャツじゃないと思つ  
てた。それから？」

「人を頼んで懸合かけあうておみると、遠山さんでも古賀さんに義理があるから、すぐには返事は出来かねて——まあよう考えてみようぐらいの挨拶をおしたのじゃがなもし。すると赤シャツさんが、手蔓てづるを求めて遠山さんの方へ出入でいりをおするようになって、とうとうあなた、お嬢さんを手馴てなづ付けておしまいたのじゃがなもし。赤シャツさんも赤シャツさんじゃが、お嬢さんもお嬢さんじゃてて、みんなが悪わるく云いますのよ。いったん古賀さんへ嫁に行くてて承知をしときながら、今さら学士さんが出いでたけれ、その方に替かえよてて、それじや今日様こんにちさまへ済むまいがなもし、あなた」

「全く済まないね。今日様どころか明日様にも明後日様にも、いつまで行つたつて済みっこありませんね」

「それで古賀さんにお気の毒じゃてて、お友達の堀田ほったさんが教頭の所へ意見をしにお行きたら、赤シャツさんが、あしは約束のあるものを横取りするつもりはない。破約になれば貰うかも知れんが、今のところは遠山家とただ交際をしているばかりじゃ、遠山家と交際をするには別段古賀さんに済まん事もなろうとお云いるけれ、堀田さんも仕方がなしにお戻もどりたそうな。赤シャツさんと堀田さんは、それ以来折おりあ合あいがわるいという評判ぞなもし」

「よくいろいろな事を知ってますね。どうして、そんな詳しい事が分るんですか。感心しちゃった」

「狭い<sup>せま</sup>けれ何でも分りますぞなもし」

分り過ぎて困るくらいだ。この容子<sup>ようす</sup>じやおれの天麩羅<sup>てんぷら</sup>や団子<sup>だんご</sup>の事も知ってるかも知れない。厄介<sup>やっかい</sup>な所だ。しかしお蔭<sup>かげ</sup>様<sup>さま</sup>でマドンナの意味もわかるし、山嵐と赤シャツの関係もわかるし大いに後学になった。ただ困るのはどっちが悪る者だか判然しない。おれのよな単純なものには白とか黒とか片づけてもらわないと、どっちへ味方をしていいかわからない。

「赤シャツと山嵐たあ、どっちがいい人ですかね」

「山嵐て何ぞなもし」

「山嵐というのは堀田の事ですよ」

「そりや強い事は堀田さんの方が強そうじゃけれど、しかし赤シャツさんは学士さんじゃけれ、働きはある方<sup>かた</sup>ぞな、もし。それから優しい事も赤シャツさんの方が優しいが、生徒の評判は堀田さんの方がええというぞなもし」

「つまりどっちがいいんですかね」

「つまり月給の多い方が豪えらいのじやろうがなもし」

これじゃ聞いたって仕方がないから、やめにした。それから二三日して学校から帰るとお婆さんがにこにこして、へえお待遠さま。やつと参りました。と一本の手紙を持って来てゆつくりご覧と云つて出て行つた。取り上げてみると清からの便りだ。符箋ふせんが二三枚ついでるから、よく調べると、山城屋から、いか銀の方へ廻まわして、いか銀から、萩野へ廻まわつて来たのである。その上山城屋では一週間ばかり逗とまり留ゆうしている。宿屋だけに手紙まで泊とめるつもりなんだろう。開いてみると、非常に長いもんだ。坊ぼっちゃんの手紙を頂いてから、すぐ返事をかこうと思つたが、あいにく風邪を引いて一週間ばかり寝ねていたものだから、つい遅おそくなつて済まない。その上今時のお嬢さんのように読み書きが達者でないものだから、こんなまずい字でも、かくのによつぽど骨が折れる。甥おいに代筆を頼もうと思つたが、せっかくあげるのに自分でかかなくつちや、坊ぼっちゃんに済まないと思つて、わざわざ下したがきを一返して、それから清書をした。清書をするには二日で済んだが、下た書きをするには四日かかった。読みにくいかも知れないが、これでも一いっ生しょう懸けん命めいにかいたのだから、どうぞしまいまで読んでくれ。という冒頭ぼうとうで四尺ばかり何やらかやら認しためてある。なるほど読みにくい。字がまずいばかりではない、大抵たいてい平板名だから、どこで切れ

て、どこで始まるのだから句読をつけるのによつぽど骨が折れる。おれは焦つ勝ちな性分だから、こんな長くて、分りにくい手紙は、五円やるから読んでくれと頼まれても断わるのだが、この時ばかりは真面目になつて、始から終まで読み通した。読み通した事は事実だが、読む方に骨が折れて、意味がつかないから、また頭から読み直してみた。部屋のなかは少し暗くなつて、前の時より見にくく、なつたから、とうとう椽鼻へ出て腰をかきながら鄭寧に拝見した。すると初秋の風が芭蕉の葉を動かして、素肌に吹きつけた歸りに、読みかけた手紙を庭の方へなびかしたから、しまいぎわには四尺あまりの半切れがさらりさらりと鳴つて、手を放すと、向うの生垣まで飛んで行きそうだ。おれはそんな事には構つていられない。坊っちゃんは竹を割つたような気性だが、ただ肝癩が強過ぎてそれが心配になる。——ほかの人に無暗に渾名なんか、つけるのは人に恨まれるものになるから、やたらに使つちやいけない、もしつけたら、清だけに手紙で知らせろ。——田舎者は人がわるいそうだから、気をつけてひどい目に遭わないようにしろ。——氣候だつて東京より不順に極つてるから、寝冷をして風邪を引いてはいけない。坊っちゃんの手紙はあまり短過ぎて、容子がよくわからないから、この次にはせめてこの手紙の半分ぐらいの長さのを書いてくれ。——宿屋へ茶代を五円やるのはいいが、あとで困りやしない

か、田舎へ行つて頼りになるはお金ばかりだから、なるべく儉約して、万一の時に差支えないようにしなくっちゃいけない。——お小遣がなくて困るかも知れないから、為替で十円あげる。——先だつて坊つちちゃんからもらった五十円を、坊つちちゃんが、東京へ歸つて、うちを持つ時の足しにと思つて、郵便局へ預けておいたが、この十円を引いてもまだ四十円あるから大丈夫だ。——なるほど女と云うものは細かいものだ。

おれが椽鼻で清の手紙をひらつかせながら、考え込んでいると、しきりの襖をあけて、萩野のお婆さんが晚めしを持ってきた。まだ見てお出でるのかなもし。えっほど長いお手紙じゃなもし、と云つたから、ええ大事な手紙だから風に吹かしては見、吹かしては見るんだと、自分でも要領を得ない返事をして膳についた。見ると今夜も薩摩芋の煮つけだ。ここのうちは、いか銀よりも鄭寧で、親切で、しかも上品だが、惜しい事に食い物がまづい。昨日も芋、一昨日も芋で今夜も芋だ。おれは芋は大好きだと明言したには相違ないが、こう立てつづけに芋を食わされては命がつづかない。うらなり君を笑うどころか、おれ自身が遠からぬうちに、芋のうらなり先生になつちまう。清ならこんな時に、おれの好きな鮪のさし身か、蒲鉾のつけ焼を食わせるんだが、貧乏士族のけちん坊と来ちゃ仕方がない。どう考えても清といつしよでなくつちあ駄目だ。もしあの学校に長くでも居る

模様なら、東京から召よび寄よせてやろう。天麩羅蕎麦そばを食たっちゃならない、団子を食たっちゃならない、それで下宿に居ゐて芋いもばかり食たつて黄色きいろくなつていろなんて、教育者きよくしやうはつらいものだ。禅ぜん宗しゆ坊主ぼうしゆだつて、これよりは口に栄耀えいようをさせているだろう。——おれは一皿いちりんの芋いもを平ひらげて、机ひきだしの抽斗ひきだしから生卵なまたまごを二つ出だして、茶碗ちやわんの縁ふちでたたき割わつて、ようやく凌しのいだ。生卵なまたまごでも營養えいようをとらなくつちあ一週二十一時間の授業じゆくが出来できるものか。

今日は清の手紙で湯に行く時間が遅おそくなつた。しかし毎日行いきつめたのを一日でも欠かかすのは心持こころもちちがわるい。汽車にでも乗のつて出懸でかけようと、例れいの赤手拭あかてぬぐいをぶら下さげて停てい車場やばまで来きると二三分前に発車はつしやしたばかりで、少々待まちたなければならぬ。ベンチへ腰こしを懸かけて、敷島しきしまを吹ふかしていると、偶然ぐうぜんにもうらなり君きみがやつて来た。おれはさつきの話わを聞きいてから、うらなり君きみがななおおささらら氣きの毒どくになつた。平常ふだんから天地てんちの間まに居い候こうをしてしているように、小さく構かまえているのがいかにも憐あわれに見みえたが、今夜こんやは憐あわれどころの騷さわぎではない。出来るならば月給げつぎんを倍ばいにして、遠山えんざんのお嬢ぢやうさんと明日あしたから結婚けつこんさして、一ヶ月いっかげつばかり東京とうきやうへでも遊あそびにやつてやりたい氣きがした矢先やせんだから、やお湯お湯ですか、さあ、こつちへお懸かけなさいと威勢いせいよく席せきを譲ゆずると、うらなり君きみは恐おそれ入いつた体裁ていざいで、いえ構かまうておくれななさるな、と遠慮えんりよだか何なにだかやつぱり立たつてる。少し待まちたなくつちや出でません、



草臥くたびれますからお懸けなさいとまた勧めてみた。実はどうかして、そばへ懸けてもらいたかったくらいに気の毒でたまらない。それではお邪魔じやまを致いたしましょうとようやくおれの云う事を聞いてくれた。世の中には野だみたように生意気な、出ないで済む所へ必ず顔を出す奴もいる。山嵐ののようにおれが居なくっちゃ日にっぼん本ほんが困るだろうと云うような面かたを肩かたの上へ載のせてる奴もいる。そうかと思うと、赤シャツのようにコスメチックと色男の問屋をもつて自ら任じているのもある。教育が生きてフロックコートを着ればおれになるんだと云わぬばかりの狸たぬきもいる。皆みな々々それ相応に威張みってるんだが、このうらなり先生せんせいのようおとなに在れどもなきがごとく、人質おとなに取られた人形おとなのように大人おとなしくしているのは見た事が無い。顔はふくれていますが、こんな結構な男を捨てて赤シャツに靡なびくなんて、マドンナもよつぽど気の知れないおきやんだ。赤シャツが何ダース寄まつたって、これほど立派だんなな旦那な様まが出来るもんか。

「あなたはどうつか悪いんじやありませんか。大分たいぎそうに見えますが……」「いえ、別段これという持病もないですが……」

「そりゃ結構です。からだが悪いと人間も駄目だめですね」

「あなたは十分じゅうぶんご丈夫じょうぶのようですね」

「ええ瘠せても病気はしません。病気なんてものあ大嫌いですから」

うらなり君は、おれの言葉を聞いてにやにやと笑った。

ところへ入口で若々しい女の笑声が聞えたから、何心なく振り返ってみるとえらい奴が来た。色の白い、ハイカラ頭の、背の高い美人と、四十五六の奥さんとが並んで切符を売る窓の前に立っている。おれは美人の形容などが出来る男でないから何にも云えないが全く美人に相違ない。何だか水晶の珠を香水で暖ためて、掌へ握ってみたような心持ちがした。年寄の方が背は低い。しかし顔はよく似ているから親子だろう。おれは、や、来たなと思う途端に、うらなり君の事は全然忘れて、若い女の方ばかり見ていた。すると、うらなり君が突然おれの隣から、立ち上がって、そろそろ女の方へ歩き出したんで、少し驚いた。マドンナじゃないかと思った。三人は切符所の前で軽く挨拶している。遠いから何を云ってるのか分らない。

停車場の時計を見るともう五分で発車だ。早く汽車がくればいいがなど、話し相手が居なくなつたので待ち遠しく思っていると、また一人あわてて場内へ馳け込んで来たものがある。見れば赤シャツだ。何だかべらべら然たる着物へ縮緬の帯をだらしなく巻き付けて、例の通り金鎖りをぶらつかしている。あの金鎖りは贗物である。赤シャツは誰も

知るまいと思つて、見せびらかしているが、おれはちゃんど知つてる。赤シャツは馳け込んだなり、何かきよろきよろしていたが、切符売下所うりきげじよの前に話している三人へ慇懃いんぎんにお辞儀じぎをして、何か二こと、三こと、云つたと思つたら、急にこつちへ向いて、例のごとく猫足ねこあしにあるいて来て、や君も湯ですか、僕は乗り後れやしないかと思つて心配して急いで来たら、まだ三四分ある。あの時計はたしかかしらんと、自分の金側きんがわを出して、二分ほどちがつてると云いながら、おれの傍へ腰そばを卸おろした。女の方はちつとも見返らないで杖つえの上に顛あじをのせて、正面ばかり眺ながめている。年寄の婦人は時々赤シャツを見るが、若い方は横を向いたままである。いよいよマドンナに違いない。

やがて、ピューと汽笛きてきが鳴つて、車がつく。待ち合せた連中はぞろぞろ吾れ勝わがちに乗り込む。赤シャツはいの一号に上等へ飛び込んだ。上等へ乗つたつて威張れるどころではない、住田すみたまで上等が五銭で下等が三銭だから、わずかに二銭違いで上下の区別がつく。こういうおれでさえ上等を奮発ふんぱつして白切符にぎを握にぎつてるんでもわかる。もつとも田舎者はけちだから、たつた二銭の出入でもすこぶる苦になると見えて、大抵たいていは下等へ乗る。赤シャツのあとからマドンナとマドンナのお袋が上等へはいり込んだ。うらなり君は活版で押おしたやうに下等ばかりへ乗る男だ。先生、下等の車室の入口へ立つて、何だか躊躇ちゆうちよ躊躇ちよの体ていであ

つたが、おれの顔を見るや否や思いきつて、飛び込んでしまった。おれはこの時何となく気の毒でたまらなかつたから、うらなり君のあとから、すぐ同じ車室へ乗り込んだ。上等の切符で下等へ乗るに不都合はなからう。

温泉へ着いて、三階から、浴衣ゆかたのなりで湯壺ゆつぽへ下りてみたら、またうらなり君に逢つた。おれは会議や何かでいざと極まると、咽喉のどが塞ふさがつて饒舌しゃべれない男だが、平常ふだんは随分ずいぶん弁ずる方だから、いろいろ湯壺のなかでうらなり君に話しかけてみた。何だか憐れぼくつてたまらない。こんな時に一口でも先方の心を慰なぐさめてやるのは、江戸えどっ子の義務だと思つてゐる。ところがあいにくうらなり君の方では、うまい具合にこっちの調子に乗つてくれない。何を云つても、えとかいえとかぎりで、しかもそのえといえが大分めんどう面倒らしいので、しまいにはとうとう切り上げて、こつちからご免めんこうむ蒙つた。

湯の中では赤シャツに逢わなかつた。もつとも風呂ふろ呂ろの数はたくさんあるのだから、同じ汽車で着いても、同じ湯壺で逢うとは極まつていない。別段不思議にも思わなかつた。風呂を出してみるといい月だ。町内の両側やなぎわに柳やなぎが植うつて、柳の枝えだが丸まるい影を往来の中おとへ落おしている。少し散歩でもしよう。北へ登つて町のはずれへ出ると、左に大きな門があつて、門の突き当りがお寺で、左右が妓楼ぎろうである。山門のなかに遊ゆう廓かくがあるなんて、前代未聞

の現象だ。ちよつとはいつてみたいが、また狸から会議の時にやられるかも知れないから、やめて素通りにした。門の並びに黒い暖簾のれんをかけた、小さな格子こうしまど窓の平屋はおれが団子を食べつて、しくじつた所だ。丸提灯まるちようちんに汁粉しるこ、お雑煮ぞうじとかいたのがぶらさがつて、提灯の火が、軒端のきばに近い一本の柳の幹を照らしている。食いたいなど思ったが我慢して通り過ぎた。

食いたい団子の食えないのは情ない。しかし自分の許いいなすけ嫁よめが他人に心移したのは、なお情ないだろう。うらなり君の事を思うと、団子は愚かおろ、三日ぐらい断食だんじきしても不平はこぼせない訳だ。本当に人間ほどあてにならないものはない。あの顔を見ると、どうしたつて、そんな不人情な事をしそうには思えないんだが——うつくしい人が不人情で、冬と瓜うがんの水みずぶく膨れのような古賀さんが善良な君子なのだから、油断が出来ない。淡泊たんぱくだと思つた山嵐せんとうは生徒を煽動せんどうしたと云うし。生徒を煽動したのかと思うと、生徒の処分を校長せんまに逼るし。厭味いやみで練りかためたような赤シャツが存外親切で、おれに余所よそながら注意をしてくれるかと思うと、マドンナを胡魔化ごまかしたり、胡魔化したのかと思うと、古賀の方が破談なんくせにならなければ結婚は望まないんだと云うし。いか銀が難癖なんくせをつけて、おれを追い出すかと思うと、すぐ野だ公いが入れ替かわつたり——どう考えてもあてにならない。こんな事を

清にかいてやったら定めて驚く事だろう。箱根はこねの向うだから化物ばけものが寄り合ってるんだと云うかも知れない。

おれは、性しょうらい来構くわわない性分だから、どんな事でも苦にしないで今日まで凌いで来たのだが、ここへ来てからまだ一ヶ月立つか、立たないうちに、急に世のなかを物騒ぶつそうに思出した。別段際だった大事件にも出逢わないのに、もう五つ六つ年を取ったような気がする。早く切り上げて東京へ帰るのが一番よかろう。などとそれからそれへ考えて、いつか石橋を渡わたつて野芹川のせりがわの堤とてへ出た。川と云うとえらそうだが実は一間ぐらいな、ちよろちよろした流れで、土手に沿うて十二丁ほど下ると相生村あいおいむらへ出る。村には観音様かんのんさまがある。

温泉ゆの町を振り返ると、赤い灯が、月の光の中にかがやいている。太鼓たいこが鳴るのは遊廓あそびがらに相違ない。川の流れは浅いけれども早いから、神経質の水のようにやたらに光る。ぶらぶら土手の上をあるきながら、約三丁も来たと思つたら、向うに人影ひとかげが見え出した。月に透すかしてみると影は二つある。温泉ゆへ来て村へ帰る若い衆しゅかも知れない。それにしては唄うたもうたわない。存外静かだ。

だんだん歩いて行くと、おれの方が早足だと見えて、二つの影法師が、次第に大きくな

る。一人は女らしい。おれの足音を聞きつけて、十間ぐらいの距離きよりに逼った時、男がたちまち振り向いた。月は後うしろからさしている。その時おれは男の様子を見て、はてなと思った。男と女はまた元の通りにあるき出した。おれは考えがあるから、急に全速力で追かつ懸けた。先方は何の気もつかずに最初の通り、ゆるゆる歩を移している。今は話し声も手に取るように聞える。土手の幅は六尺ぐらいだから、並んで行けば三人がようやくくだ。おれは苦もなく後ろから追い付いて、男の袖そでを擦すり抜ぬけざま、二足前へ出した踵くびすをぐるりと返して男の顔を覗のぞき込こんだ。月は正面からおれの五分刈がりの頭から顚あたの辺りまで、会え釈しゃくもなく照てらす。男はあつと小声に云ったが、急に横を向いて、もう帰ろうと女を促うながすが早いか、温泉ゆの町の方へ引き返した。

赤シャツは図太くて胡魔化すつもりか、気が弱くて名乗り損そくなったのかしら。ところが狭くて困こつてるのは、おればかりではなかった。

## 八

赤シャツに勧められて釣つりに行つた帰りから、山やま嵐あらしを疑うぐり出した。無い事を種たねに下

宿を出ると云われた時は、いよいよ不埒な奴だと思った。ところが会議の席では案に相違して滔々と生徒嚴罰論を述べたから、おや変だなと首を振った。萩野の婆さんから、山嵐が、うらなり君のために赤シャツと談判をしたと聞いた時は、それは感心だと手を拍った。この様子ではわる者は山嵐じやあるまい、赤シャツの方が曲ってるんで、好加減な邪推を突しやかに、しかも遠廻しに、おれの頭の中へ浸み込ましたのではあるまいかと迷ってる矢先へ、野芹川の土手で、マドンナを連れて散歩なんかしている姿を見たから、それ以来赤シャツは曲者だと極めてしまった。曲者だか何だかよくは分らないが、ともかくも善い男じやない。表と裏とは違った男だ。人間は竹のように真直でなくつちや頼もしくない。真直なものは喧嘩をしても心持ちがいい。赤シャツのようなやさしいのと、親切なのと、高尚なのと、琥珀のパイプとを自慢そうに見せびらかすのは油断が出来ない、めったに喧嘩も出来ないと思った。喧嘩をしても、回向院の相撲のような心持ちのいい喧嘩は出来ないと思った。そうなると一銭五厘の出入で控所全体を驚ろかした議論の相手の山嵐の方がはるかに人間らしい。会議の時に金壺眼をぐりつかせて、おれを睨めた時は憎い奴だと思ったが、あとで考えると、それも赤シャツのねちねちした猫撫声よりはましだ。実はあの会議が済んだあとで、よっぽど仲直りをしようかと思っ



て、一こと二こと話しかけてみたが、野郎返事もしないで、まだ眼を剥つてみせたから、こつちも腹が立つてそのままにしておいた。

それ以来山嵐はおれと口を利かない。机の上へ返した一銭五厘はいまだに机の上に乗っている。ほこりだらけになって乗っている。おれは無論手が出せない、山嵐は決して持つて帰らない。この一銭五厘が二人の間の墻壁になつて、おれは話そうと思つても話せない、山嵐は頑として黙つてる。おれと山嵐には一銭五厘が祟つた。しまいには学校へ出て一銭五厘を見るのが苦になつた。

山嵐とおれが絶交の姿となつたに引き易えて、赤シャツとおれは依然として在来の關係を保つて、交際をつづけている。野芹川で逢つた翌日などは、学校へ出ると第一番におれの傍へ来て、君今度の下宿はいいですかのまたいつしよに露西亞文学を釣りに行こうじゃないかのいろいろな話を話しかけた。おれは少々憎らしかったから、昨夜は二返逢いしましたねと云つたら、ええ停車場で——君はいつでもあの時分出掛けるのですか、遅いじゃないかと云う。野芹川の土手でもお目に懸りましたねと喰らわしてやつたら、いいえ僕はあるへは行かない、湯にはいつて、すぐ帰つたと答えた。何もそんなに隠さないでもよからう、現に逢つてるんだ。よく嘘をつく男だ。これで中学の教頭が勤まるなら、おれ

なんか大学総長がつとまる。おれはこの時からいよいよ赤シャツを信用しなくなつた。信用しない赤シャツとは口をきいて、感心している山嵐とは話をしない。世の中は随分ずいぶん妙なものだ。

ある日の事赤シャツがちよつと君に話があるから、僕のうちまで来てくれと云うから、惜しいと思つたが温泉行きを欠勤して四時頃出掛けて行つた。赤シャツは一人ものだが、教頭だけに下宿はとくの昔に引き払つて立派な玄関を構えている。家賃は九円五拾錢だそうだ。田舎へ来て九円五拾錢払えばこんな家へはいれるなら、おれも一つ奮発して、東京から清を呼び寄せて喜ばしてやろうと思つたくらいな玄関だ。頼むと云つたら、赤シャツの弟が取次に出て来た。この弟は学校で、おれに代数と算術を教わる至つて出来る子だ。その癖渡りものだから、生れ付いての田舎者よりも人が悪るい。赤シャツに逢つて用事を聞いてみると、大將例の琥珀のパイプで、きな臭い烟草をふかしながら、こんな事を云つた。「君が来てくれてから、前任者の時代よりも成績がよくあがつて、校長も大いにいい人を得たと喜んでるので——どうか学校でも信頼しているのだから、そのつもりで勉強していただきたい」

「へえ、そうですか、勉強つて今より勉強は出来ませんが——」

「今のくらいで充分じゆうぶんです。ただ先だってお話しした事ですね、あれを忘れずにいて下さればいいのです」

「下宿の世話なんかするものあ剣けん呑のんだという事ですか」

「そう露骨ろこつに云うと、意味もない事になるが——まあ善いさ——精神は君にもよく通じている事と思うから。そこで君が今のように出精しゅっせいして下されば、学校の方でも、ちゃんと見ているんだから、もう少しして都合つごうさえつけば、待遇たいぐうの事も多少はどうにかなるだろうと思うんですがね」

「へえ、俸給ほうきゅうですか。俸給ほうきゅうなんかどうでもいいんですが、上がれば上がった方がいいですね」

「それで幸い今度転任者が一人出来るから——もつとも校長に相談してみないと無論受け合えない事だが——その俸給から少しは融通ゆうずうが出来るかも知れないから、それで都合をつけるように校長に話してみようと思うんですがね」

「どうも難有ありがとう。だれが転任するんですか」

「もう発表になるから話しても差し支つかえないでしょう。実は古賀君です」

「古賀さんは、だつてこの人じゃありませんか」

「この地の人ですが、少し都合があつて——半分は当人の希望です」

「どこへ行くんです」

「日向の延岡で——土地が土地だから一級俸上つて行く事になりました」

「誰か代りが来るんですか」

「代りも大抵極まつてゐるんです。その代りの具合で君の待遇上の都合もつくんです」

「はあ、結構です。しかし無理に上がらないでも構いません」

「とも角も僕は校長に話すつもりです。それで校長も同意見らしいが、追つては君にもつと働いて頂だかなくつてはならんようになるかも知れないから、どうか今からそのつもりで覚悟をしてやつてもらいたいですね」

「今より時間でも増すんですか」

「いいえ、時間は今より減るかも知れませんが——」

「時間が減つて、もつと働くんですか、妙だな」

「ちよつと聞くと妙だが、——判然とは今言にくいが——まあつまり、君にもつと重大な責任を持つてもらうかも知れないという意味なんです」

おれには一向分らない。今より重大な責任と云えば、数学の主任だろうが、主任は山嵐

だから、やつこさんなかなか辞職する氣遣いはない。それに、生徒の人望があるから転任や免職は学校の得策であるまい。赤シャツの談話はいつでも要領を得ない。要領を得なくつても用事はこれで済んだ。それから少し雑談をしているうちに、うらなり君の送別会をやる事や、ついてはおれが酒を飲むかと云う問や、うらなり先生は君子で愛すべき人だと云う事や——赤シャツはいろいろ弁じた。しまいに話をかえて君俳句をやりますかと来たから、こいつは大変だと思つて、俳句はやりません、さようならと、そこそこに歸つて来た。発句は芭蕉か髪結床の親方のやるもんだ。数学の先生が朝顔やに釣瓶をとられてたまるものか。

歸つてうんと考え込んだ。世間には随分氣の知れない男が居る。家屋敷はもちろん、勤める学校に不足のない故郷がいやになつたからと云つて、知らぬ他国へ苦勞を求めに出る。それも花の都の電車が通つてゐる所なら、まだしもだが、日向の延岡とは何の事だ。おれは船つきのいいここへ来てさえ、一ヶ月立たないうちにもう歸りたくなつた。延岡と云えば山の中も山の中も大変な山の中だ。赤シャツの云うところによると船から上がつて、一  
日馬車へ乗つて、宮崎へ行つて、宮崎からまた一日車へ乗らなくつては着けないそう  
だ。名前を聞いてさえ、開けた所とは思えない。猿と人が半々に住んでるような氣がす

る。いかに聖人のうらなり君だつて、好んで猿の相手になりたくもないだろうに、何という物数奇だ。ものずき

ところへあいかわらず婆ばあさんが夕食ゆうめしを運んで出る。今日もまた芋いもですかいと聞いてみたら、いえ今日はお豆腐とうふぞなもと云つた。どっちにしたつて似たものだ。

「お婆さん古賀さんは日向へ行くそうですね」

「ほん当にお気の毒じやな、もし」

「お気の毒だつて、好んで行くんなら仕方がないですね」

「好んで行くて、誰がぞなもし」

「誰がぞなもしつて、当人がさ。古賀先生が物数奇に行くんじやありませんか」

「そりやあなた、大違いの勘五郎かんごろうぞなもし」

「勘五郎かね。だつて今赤シャツがそう云いましたぜ。それが勘五郎なら赤シャツは嘘つきほらえもんの法螺右衛門だ」

「教頭さんが、そうお云いるのはもつともじやが、古賀さんのお往いきともないのももつともぞなもし」

「そんなら両方もつともなんですね。お婆さんは公平でいい。一体どういふ訳なんです」

「今朝古賀のお母さんが見えて、だんだん訳をお話したがなもし」

「どんな訳をお話したんです」

「あそこもお父さんがお亡くなりになってから、あたし達が思うほど暮しくら向が豊かむぎになうてお困りじゃけれ、お母さんが校長さんにお頼みて、もう四年も勤めているものじゃけれ、どうぞ毎月頂くものを、今少しふやしておくれんかてて、あなた」

「なるほど」

「校長さんが、ようまあ考えてみとうとお云いたげな。それでお母さんも安心して、今に増給のご沙汰さたがあるぞ、今月か来月かと首を長くして待つておいでたところへ、校長さんがちよつと来てくれと古賀さんにお云いるけれ、行ってみると、気の毒だが学校は金が足りんけれ、月給を上げる訳にゆかん。しかし延岡になら空いた口があつて、そつちなら毎月五円余分にとれるから、お望み通りでよかろうと思つて、その手続きにしたから行くがええと云われたげな。――」

「じゃ相談じゃない、命令じゃありませんか」

「さよよ。古賀さんはよそへ行つて月給が増すより、元のままでもええから、ここに居おりたい。屋敷もあるし、母もあるからとお頼みたけれども、もうそう極めたあとで、古賀さ

んの代りは出来ているけれ仕方がないと校長がお云いたげな」

「へん人を馬鹿ばかにしてら、面白おもしろくもない。じゃ古賀さんは行く気はないんですね。どう  
れで変だと思つた。五円ぐらい上がったつて、あんな山の中へ猿のお相手をしに行く唐とうへ  
変木んぼくはまずないからね」

「唐変木で、先生なんぞなもし」

「何でもいいさあ、——全く赤シャツの作さりやく略りやくだね。よくない仕打しうちだ。まるで欺だまし撃うち  
ですね。それでおれの月給を上げるなんて、不都合ふつごうな事があるものか。上げてやるつたつ  
て、誰が上がつてやるものか」

「先生は月給がお上りるのかなもし」

「上げてやるつて云うから、断ことわろうと思つてんです」

「何で、お断ことわりるのぞなもし」

「何でもお断ことわりだ。お婆さん、あの赤シャツは馬鹿ばかですぜ。卑怯ひきようでさあ」

「卑怯ひきようでもあんだ、月給を上げておくれたら、大人おとなしく頂おといておく方が得えぞなもし。若い  
うちはよく腹の立つものじゃが、年をとつてから考えると、も少しの我慢がまんじゃあつたのに  
惜あやしい事をした。腹立てたためにこないな損こをしたと悔くむのが当り前まじゃけれ、お婆の言



う事をきいて、赤シャツさんが月給をあげてやろとお言いたら、難有うと受けておおきなさいや」

「年寄としよりの癖に余計な世話を焼かなくつてもいい。おれの月給は上がろうと下がろうとおれの月給だ」

婆さんはだまつて引き込んだ。爺じいさんは呑気のんきな声を出して謡うたいをうたつてる。謡というものは読んでわかる所を、やにむずかしい節をつけて、わざと分らなくする術だろう。あんな者を每晚飽あきずに唸うなる爺さんの気が知れない。おれは謡どころの騒さわぎじゃない。月給を上げてやろうと云うから、別段欲しくもなかったが、入らない金を余しておくのもつたいないと思つて、よろしいと承知したのだが、転任したくないものを無理に転任させてその男の月給の上前はを跳ねるなんて不人情な事が出来るものか。当人がもとの通りでいいと云うのに延岡くんだ下りまで落ちさせるとは一体どう云う了りようけん見けんだろう。太宰だざい権帥ごんのそつでさえ博多はかた近辺で落ちついたものだ。河合かあひ又五郎またごろうだつて相良さからでとまつてるじゃないか。とにかく赤シャツの所へ行つて断わつて来なくつちあ気が済まない。

小倉こくらの袴はかまをつけてまた出掛けた。大きな玄関けんへ突つつ立たつて頼むと云うと、また例の弟が取次めつきに出て来た。おれの顔を見てまた来たかという眼付めつきをした。用があれば二度だつて三

度だつて来る。よる夜なかだつて叩き起さないとは限らない。教頭の所へご機嫌伺いにくるようなおれと見損つてるか。これでも月給が入らないから返しに来んだ。すると弟が今来客中だと云うから、玄関でいいからちよつとお目にかかりたいと云つたら奥へ引き込んだ。足元を見ると、畳付きの薄つぺらな、のめりの駒下駄がある。奥でもう万歳ですよと云う声が聞える。お客とは野だだなど気がついた。野だでなくては、あんな黄色い声を出して、こんな芸人じみた下駄を穿くものはない。

しばらくすると、赤シャツがランプを持つて玄関まで出て来て、まあ上がりたまえ、外の人じやない吉川君だ、と云うから、いえここでたくさんです。ちよつと話せばいいんです、と云つて、赤シャツの顔を見ると金時のようだ。野だ公と一杯飲んで見える。「さつき僕の月給を上げてやるというお話でしたが、少し考えが變つたから断わりに来ただです」

赤シャツはランプを前へ出して、奥の方からおれの顔を眺めたが、とっさの場合返事をしかねて茫然としてゐる。増給を断わる奴が世の中にたった一人飛び出して来たのを不審に思つたのか、断わるにしても、今帰つたばかりで、すぐ出直してこなくつてもよさそうなものだと、呆れ返つたのか、または双方合併したのか、妙な口をして突つ立つた

ままである。

「あの時承知したのは、古賀君が自分の希望で転任するという話でしたからで……」

「古賀君は全く自分の希望で半ば転任するんです」

「そうじゃないんです、ここに居たいんです。元の月給でもいいから、郷里に居たいのです」

「君は古賀君から、そう聞いたのですか」

「そりや当人から、聞いたんじやありません」

「じゃ誰からお聞きです」

「僕の下宿の婆さんが、古賀さんのおつ母かさんから聞いたのを今日僕に話したのです」

「じゃ、下宿の婆さんがそう云ったのですね」

「まあそうです」

「それは失礼ながら少し違うでしょう。あなたのおつしやる通りだと、下宿屋の婆さんの云う事は信ずるが、教頭の云う事は信じないと云うように聞えるが、そういう意味に解釈して差さ支しえつかないでしょうか」

おれはちよつと困った。文学士なんてものはやっぱりえらいものだ。妙な所へこだわつ

て、ねちねち押し寄せてくる。おれはよく親父から貴様はそそっかしくて駄目だ駄目だと云われたが、なるほど少々そそっかしいようだ。婆さんの話を聞いてはっと思つて飛び出して来たが、実はうらなり君にもうらなりのおつ母さんにも逢つて詳しい事情は聞いてみなかったのだ。だからこう文学士流に斬り付けられると、ちよつと受け留めにくい。

正面からは受け留めにくいがおれはもう赤シャツに対して不信任を心の中で申し渡してしまつた。下宿の婆さんもけちん坊の欲張り屋に相違ないが、嘘は吐かない女だ、赤シヤツのように裏表はない。おれは仕方がないから、こう答えた。

「あなたの云う事は本当かも知れないですが——とにかく増給はご免蒙ります」

「それはますます可笑しい。今君がわざわざお出になつたのは増俸を受けるには忍びない、理由を見出したからのように聞えたが、その理由が僕の説明で取り去られたにもかかわらず増俸を否まれるのは少し解しかねるようですね」

「解しかねるかも知れませんがね。とにかく断わりますよ」

「そんなに否なら強いてとまでは云いませんが、そう二三時間のうちに、特別の理由もないのに豹変しちや、将来君の信用にかかわる」

「かかわつても構わないです」

「そんな事はないはずです、人間に信用ほど大切なものはありませんよ。よしんば今一步譲<sup>ゆず</sup>つて、下宿の主人が……」

「主人じゃない、婆さんです」

「どちらでもよろしい。下宿の婆さんが君に話した事を事実としたところで、君の増給は古賀君の所得を削<sup>けず</sup>つて得たものではないでしょう。古賀君は延岡へ行かれる。その代りがくる。その代りが古賀君よりも多少低給で来てくれる。その剩<sup>じょうよ</sup>余を君に廻<sup>ま</sup>わすと云うのだから、君は誰にも気の毒がる必要はないはずです。古賀君は延岡でただ今よりも榮進される。新任者は最初からの約<sup>やくそく</sup>束で安くくる。それで君が上がられれば、これほど都合のいい事はないと思うですがね。いやなら否<sup>いや</sup>でもいいが、もう一返うちでよく考えてみませんか」

おれの頭はあまりえらくないのだから、いつもなら、相手がこういう巧<sup>こうみよう</sup>妙<sup>めう</sup>な弁舌を揮<sup>ふる</sup>えば、おやそうかな、それじゃ、おれが間違<sup>おそ</sup>つてたと恐れ入<sup>おそ</sup>つて引きさがるのだけれども、今夜はそうは行かない。ここへ来た最初から赤シャツは何だか虫が好かなかつた。途<sup>と</sup>中で親切な女みたような男だと思<sup>ちゆう</sup>い返した事はあるが、それが親切でも何でもなさそうなので、反動の結果今じゃよつほど厭<sup>いや</sup>になつている。だから先がどれほどうまく論理的に

弁論たぐましを遅くしようとも、堂々たる教頭流におれを遣り込めようとも、そんな事は構わない。議論のいい人が善人とはきまらない。遣り込められる方が悪人とは限らない。表向きは赤シャツの方が重々もつともだが、表向きがいくら立派だって、腹の中まで惚ほれさせる訳には行かない。金や威力いりよくや理屈りくつで人間の心が買える者なら、高利貸でも巡査じゆんさでも大学教授でも一番人に好かれなくてはならない。中学の教頭ぐらいな論法でおれの心がどう動くものか。人間は好き嫌いで働くものだ。論法で働くものじゃない。

「あなたの云う事はもつともですが、僕は増給がいやになつたんですから、まあ断わります。考えたつて同じ事です。さようなら」と云いすてて門を出た。頭の上には天の川が一筋かかっている。

## 九

うらなり君の送別会のあるという日の朝、学校へ出たら、山やま嵐あらしが突とつ然ぜん、君先だつてはいか銀が来て、君が乱暴して困るから、どうか出るように話してくれと頼たのんだから、真面目まじめに受けて、君に出てやれと話したのだが、あとから聞いてみると、あいつは悪わるい

奴やつで、よく偽筆ぎひつへ贗落款にせらつかんなどを押おして売りつけるそうだから、全く君の事も出鱈目でたらめに違ちがいない。君に懸物かけものや骨董こつどうを売りつけて、商売にしようと思つてたところが、君が取り合あわな<sup>い</sup>で儲もうけがないものだから、あんな作りごとをこしらえて胡魔化ごまかしたのだ。僕はあの人物を知らなかつたので君に大変失敬しんけいした勘弁かんべんしたまえと長々しい謝罪しやざいをした。

おれは何とも云わずに、山嵐の机の上にあつた、一錢五厘りんをとつて、おれの蝦蟇口がまぐちのかへ入れた。山嵐は君それを引き込こめるのかと不審ふしんそうに聞くから、うんおれは君に奢おごられるのが、いやだつたから、是非返すつもりでいたが、その後だんだん考えてみると、やつぱり奢おごつてもらう方がいいようだから、引き込ますんだと説明した。山嵐は大きな声をしてアハハハと笑いながら、そんなら、なぜ早く取らなかつたのだと聞いた。実は取ろうと取ろうと思つてたが、何なにだか妙みょうだからそのままにしておいた。近来は学校へ来て一錢五厘を見るのが苦くるになるくらいいいやつたよと云つたら、君はよつほど負け惜おしみの強い男だと云うから、君はよつほど剛情張ごうじやうばりだと答えてやつた。それから二人の間にこんな問答もんたが起おこつた。

「君は一体どこの産だ」

「おれは江戸えどつ子だ」

「うん、江戸っ子か、道理で負け惜しみが強いと思った」

「きみはどこだ」

「僕は会津だ」

「会津っ婆か、強情な訳だ。今日の送別会へ行くのかい」

「行くとも、君は？」

「おれは無論行くんだ。古賀さんが立つ時は、浜まで見送りに行こうと思ってるくらいだ」

「送別会は面白いぜ、出て見たまえ。今日は大いに飲むつもりだ」

「勝手に飲むがいい。おれは肴を食ったら、すぐ帰る。酒なんか飲む奴は馬鹿だ」

「君はすぐ喧嘩を吹き懸ける男だ。なるほど江戸っ子の軽跳な風を、よく、あらわしてる」

「何でもいい、送別会へ行く前にちよつとおれのうちへお寄り、話があるから」

山嵐は約束通りおれの下宿へ寄った。おれはこの間から、うらなり君の顔を見る度に  
気の毒でたまらなかつたが、いよいよ送別の今日となつたら、何だか憐れっぽくって、出  
来る事なら、おれが代りに行ってやりたい様な気がしだした。それで送別会の席上で、大



いに演説でもしてその行を盛さかんにしてやりたいと思うのだが、おれのべらんめえ調子じゃ、到底とうてい物にならないから、大きな声を出す山嵐を雇やとつて、一番赤シャツの荒肝あらぎもを挫ひしいでやろうと考え付いたから、わざわざ山嵐を呼んだのである。

おれはまず冒頭ぼうとうとしてマドンナ事件から説き出したが、山嵐は無論マドンナ事件はおれより詳しく知くわっている。おれが野芹川のぜりがわの土手の話をして、あれは馬鹿野郎ばかやろうだと云つたら、山嵐は君はだれを捕つらまえても馬鹿呼よばわりをする。今日学校で自分の事を馬鹿と云つたじゃないか。自分が馬鹿なら、赤シャツは馬鹿じゃない。自分は赤シャツの同類じゃないと主張した。それじゃ赤シャツは腑ふ抜ぬけの呆助ほうすけだと云つたら、そうかもしれないと山嵐は大いに賛成した。山嵐は強い事は強いが、こんな言葉になると、おれより遙はるかに字を知つていない。会津つぽなんてものはみんな、こんなものなんだろう。

それから増給事件と将来重く登用すると赤シャツが云つた話をしたら山嵐はふふんと鼻から声を出して、それじゃ僕を免めんしよく職しやくする考えだなと云つた。免職するつもりだつて、君は免職になる気かと聞いたら、誰だれがなるものか、自分が免職になるなら、赤シャツもいっしょに免職させてやると大いに威張いばつた。どうしていっしょに免職させる気かと押し返して尋ねたら、そこはまだ考えていないと答えた。山嵐は強そうだが、智慧ちえはあまりなさ

そうだ。おれが増給を断ことわつたと話したら、大将大きに喜んでさすが江戸っ子だ、えらいと賞ほめてくれた。

うらなりが、そんなに厭いやがつているなら、なぜ留任の運動をしてやらなかったと聞いてみたら、うらなりから話を聞いた時は、既すでにきまつてしまつて、校長へ二度、赤シャツへ一度行つて談判してみたが、どうする事も出来なかつたと話した。それについても古賀あまり好人物過ぎるから困る。赤シャツから話があつた時、断然断わるか、一応考えてみますと逃にげればいいのに、あの弁舌に胡魔化されて、即そく席に許諾きよだくしたものだから、あとからお母つかさんが泣きついてても、自分が談判に行つても役に立たなかつたと非常に残念がった。

今度の事件は全く赤シャツが、うらなりを遠ざけて、マドンナを手に入れる策略なんだろうとおれが云つたら、無論そうに違いない。あいつは大人おとなしい顔をして、悪事を働いて、人が何か云うと、ちやんと逃にげ道を拵こしらえて待つてゐるんだから、よつほど奸物かんぶつだ。あんな奴にかかつては鉄拳制裁てつけんせいさいでなくつちや利かないと、瘤こぶだらけの腕うでをまくつてみせた。おれはついでだから、君の腕は強そうだな柔術じゆうじゆつでもやるかと聞いてみた。すると大将二の腕へ力瘤を入れて、ちよつと攫つかんでみると云うから、指の先で揉もんでみたら、何の事

はない湯屋にある軽石の様なものだ。

おれはあまり感心したから、君そのくらいの腕なら、赤シャツの五人や六人は一度に張り飛ばされるだろうと聞いたたら、無論さと云いながら、曲げた腕を伸のばしたり、縮ましたりすると、力瘤がぐるりぐるりと皮のなかで廻かいてん転する。すこぶる愉快ゆかいだ。山嵐の証明する所によると、かんじんよ縋りを二本より合せて、この力瘤の出る所へ巻きつけて、うんと腕を曲げると、ぷつりと切れるそうさ。かんじんよりなら、おれにも出来そうだと云つたら、出来るものか、出来るならやつてみると来た。切れないと外聞なぐがわるいから、おれは見合せた。

君どうだ、今夜の送別会に大いに飲んだあと、赤シャツと野なぐだを撲つてやらないかと面白半分面白に勧めてみたら、山嵐はそうだなと考えていたが、今夜はまあよそうと云つた。なぜと聞くと、今夜は古賀に気の毒だから——それにどうせ撲るくらいなら、あいつらの悪い所を見届けて現場で撲らなくつちや、こつちの落度なぐになるからと、分別べんべつのありそうな事を附加つけたした。山嵐でもおれよりは考えがあると見える。

じゃ演説をして古賀君を大いにほめてやれ、おれがすると江戸っ子のぺらぺらになつて重みがなくていけない。そうして、きまつた所へ出ると、急に溜りゆういん飲いんが起つて咽喉のどの所

へ、大きな丸たまが上がつて来て言葉が出ないから、君に譲ゆずるからと云つたら、妙な病気だな、じゃ君は人中じや口は利けないんだね、困るだろう、と聞くから、何そんなに困りやしないと答えておいた。

そうこうするうち時間が来たから、山嵐と一所に会場へ行く。会場は花かしんてい晨亭といつて、当地ここで第一等の料理屋だそうだが、おれは一度も足を入れた事がない。もとの家老とかの屋敷やしきを買い入れて、そのまま開業したという話だが、なるほど見懸みかけからして厳いめしい構かまえだ。家老の屋敷が料理屋になるのは、陣羽織じんぼおりを縫ぬい直して、胴着どうぎにする様なものだ。

二人が着いた頃ころには、人数にんずももう大たい概がい揃そろつて、五十畳の広間じょうに二つ三つ人間の塊かたまりが出来ている。五十畳だけに床とこは素敵そてきに大きい。おれが山城屋で占せんりょう領りょうした十五畳敷の床とは比較にならない。尺を取つてみたら二間あつた。右の方に、赤い模様のある瀬戸物の瓶かめを据すえて、その中なかつに松まつの大きな枝えだが挿さしてある。松の枝を挿して何にする気か知らないが、何ヶ月立つても散る気遣きぢいがないから、銭が懸からなくつて、よかろう。あの瀬戸物はどこで出来るんだと博物の教師に聞いたら、あれは瀬戸物じやありません、伊万里いまりですと云つた。伊万里だつて瀬戸物じやないかと、云つたら、博物はえへへへと笑つていた。あとで聞いてみたら、瀬戸で出来る焼物だから、瀬戸と云うのだそうだ。おれは江戸っ子だか

ら、陶器とうぎの事を瀬戸物せとものというのかと思っていた。床の真中に大きな懸物があつて、おれの顔くらいな大きな字が二十八字かいてある。どうも下手へたなものだ。あんまり不味まずいから、漢学の先生に、なぜあんなまじいものを麗れい々と懸けておくんですと尋ねたところ、先生はあれは海屋かいおくといつて有名な書家のかいた者だと教えてくれた。海屋だか何だか、おれは今だに下手だと思つている。

やがて書記の川村がどうかお着席をと云うから、柱があつて寄りかかるのに都合のいい所へ坐すわつた。海屋の懸物の前に狸たぬきが羽織はおり、袴はかまで着席すると、左に赤シャツが同じく羽織袴で陣取じんとつた。右の方は主人公だというのでうらなり先生、これも日本服で控ひかえている。おれは洋服だから、かしこまるのが窮きゆう屈くつだったから、すぐ胡坐あぐらをかいた。隣となりの体操たいそう教師は黒ずぼんで、ちゃんとかしこまっている。体操の教師だけにいやに修行が積んでいゝる。やがてお膳ぜんが出る。徳利とくりが並ならぶ。幹事かんじが立つて、一言開会いちごんの辞を述べる。それから狸が立つ。赤シャツが起たつ。ことごとく送別の辞を述べたが、三人共申し合せたようにならなり君の、良教師で好人物な事を吹ふ聴ちやうして、今回去られるのはまことに残念である、学校としてのみならず、個人として大いに惜しむところであるが、ご一身上のご都合で、切に転任をご希望になつたのだから致いたし方かたがないという意味を述べた。こんな嘘うそをついて

送別会を開いて、それでちつとも恥かしいとも思っていない。ことに赤シャツに至って三人のうちで一番うらなり君をほめた。この良友を失うのは実に自分にとって大なる不幸である。とまで云った。しかもそのいい方がいかにも、もつともらしくって、例のやさしい声を一層やさしくして、述べ立てるのだから、始めて聞いたものは、誰でもきつとだまされるに極きまつてる。マドンナも大方この手で引掛ひっかけたんだらう。赤シャツが送別の辞を述べ立てている最中、向側むかいがわに坐っていた山嵐がおれの顔を見てちよつと稲光いなびかりをさした。おれは返電として、人指し指でべつかんこうをして見せた。

赤シャツが座に復するのを待ちかねて、山嵐がぬつと立ち上がったから、おれは嬉うれしかったので、思わず手をぼちぼちと拍うつた。すると狸を始め一同がごとごとくおれの方を見たには少々困った。山嵐は何を云うかと思うとただ今校長始めことに教頭は古賀君の転任を非常に残念がられたが、私は少々反対で古賀君が一日も早く当地を去られるのを希望しております。延岡は僻遠へきえんの地で、当地に比べたら物質上の不便はあるだらう。が、聞くところによれば風俗のすこぶる淳じゆんぼく朴くな所で、職員生徒ごとごとく上代じやうだい樸ぼく直ちよくの気風を帯びているそうである。心にもないお世辞を振り蒔まいたり、美しい顔をして君子おとしを陥おとしれたりするハイカラ野郎は一人もないと信ずるからして、君のどとき温良篤厚とつこうの士は必

ずその地方一般の歡迎かんげいを受けられるに相違そういない。吾輩わがはいは大いに古賀君のためにこの転任を祝するのである。終りに臨んで君が延岡に赴任ふにんされたら、その地の淑女しゆくじよにして、君子の好速こうきゆうとなるべき資格あるものを扨えらんで一日も早く円満なる家庭をかたち作つて、かの不貞無節なるお転婆てんばを事実の上において慚死ざんしせしめん事を希望します。えへんえへんと二つばかり大きな咳せきばら払いをして席に着いた。おれは今度も手を叩たたこうと思つたが、またみんながおれの面かおを見るといやだから、やめにしておいた。山嵐さんらんが坐ると今度はうらなり先生が起つた。先生はご鄭寧ていねいに、自席から、座敷の端はしの末座まで行つて、慇懃いんぎんに一同に挨拶あいさつをした上、今般は一身上の都合で九州へ参る事になりましたについて、諸先生方が小生のためにこの盛せいでい大なる送別会をお開き下さつたのは、まことに感銘かんめいの至りに堪たえぬ次第で——ことにただ今は校長、教頭その他諸君の送別の辞を頂戴ちやうだいして、大いに難有ありがたく服膺ふくようする訳であります。私はこれから遠方へ参りますが、なにとぞ従前の通りお見捨てなくご愛顧あいこのほどを願います。とへえつく張つて席に戻もどつた。うらなり君はどこまで人が好いんだか、ほとんど底が知れない。自分がこんなに馬鹿にされている校長や、教頭に恭うやうやしくお礼を云つている。それも義理一いっぺん遍の挨拶ならだが、あの様子や、あの言葉つきや、あの顔つきから云うと、心しんから感謝しているらしい。こんな聖人に真面目にお

礼を云われたら、気の毒になつて、赤面しそうなものだが狸も赤シャツも真面目に謹きんちちよ聴うしているばかりだ。

挨拶が済んだら、あちらでもチュー、こちらでもチュー、という音がする。おれも真似をして汗しるを飲んでみたがまずいもんだ。口取くちとりに蒲鉾かまぼこはついてるが、どす黒くて竹輪たけのこの出来損ないである。刺身さしみも並んでるが、厚くつて鮪まぐろの切り身を生で食うと同じ事だ。それでも隣となり近所の連中はむしやむしや旨うまそうに食っている。大方江戸前の料理を食った事がないんだろう。

そのうち爛徳利かんどくりが頻繁ひんぱんに往来し始めたたら、四方が急に賑にぎやかになった。野だ公は恭しく校長の前へ出て盃さかずきを頂ういてる。いやな奴だ。うらなり君は順々に猷けんしゅう酬うをして、一巡ちじゆんめぐ周まわるつもりとみえる。はなはだご苦労である。うらなり君がおれの前へ来て、一つ頂戴ていだい致いたししようと袴はかまのひだを正して申し込まれたから、おれも窮屈きゆうくつにズボンのままかしくまつて、一盃はい差さし上げた。せつかく参まゐつて、すぐお別れになるのは残念しんげんですね。ご出しゅつ立たつはいつです、是非ぜひ浜までお見送みおくりをしましょうと云つたら、うらなり君はいえご用多おほのところ決してそれには及およびませんと答こたへた。うらなり君が何と云つたつて、おれは学校を休んで送おくる氣きでいる。



それから一時間ほどするうちに席上は大分乱れて来る。まあ一杯、おや僕が飲めと云うのに……などと呂律の巡りかねるのも一人二人出来て来た。少々退屈したから便所へ行つて、昔風な庭を星明りにすかして眺めていると山嵐が来た。どうださっきの演説はうまかつたろう。と大分得意である。大賛成だが一ヶ所気に入らないと抗議を申し込んだら、どこが大賛成だと聞いた。

「美しい顔をして人を陥れるようなハイカラ野郎は延岡に居らないから……と君は云つたろう」

「うん」

「ハイカラ野郎だけでは不足だよ」

「じゃ何と云うんだ」

「ハイカラ野郎の、ペテン師の、イカサマ師の、猫被りの、香具師の、モモンガーの、岡つ引きの、わんわん鳴けば犬も同然な奴とでも云うがいい」

「おれには、そう舌は廻らない。君は能弁だ。第一単語を大變たくさん知ってる。それで演舌が出来ないのは不思議だ」

「なにこれは喧嘩けんかのときに使おうと思つて、用心のために取つておく言葉さ。演舌となつちや、こうは出ない」

「そうかな、しかしぺらぺら出るぜ。もう一遍やつて見たまえ」

「何遍でもやるさいいか。——ハイカラ野郎のペテン師の、イカサマ師の……」と云いかけてみると、椽えん側がわをどたばた云わして、二人ばかり、よろよろしながら馳かけ出して来た。「両君そりやひどい、——逃げるなんて、——僕が居るうちは決して逃にがさない、さあのみたまえ。——いかさま師？——面白い、いかさま面白い。——さあ飲みたまえ」

とおれと山嵐をぐいぐい引つ張つて行く。実はこの兩人共便所に来たのだが、酔よつてるもんだから、便所へはいるのを忘れて、おれ等を引つ張るのだろう。酔よつ払いは目あたの中あたの所へ用事を拵えて、前の事はすぐ忘れてしまふんだらう。

「さあ、諸君、いかさま師を引つ張つて来た。さあ飲ましてくれたまえ。いかさま師をうんと云うほど、酔よわしてくれたまえ。君逃げちやいかん」

と逃げもせぬ、おれを壁かべ際ぎわへお押し付けた。諸方を見廻してみると、膳の上えんせいに満足な肴さかなも乗つてゐるのは一つもない。自分の分ぶんを奇麗きれいに食つくい尽して、五六間先へ遠征えんせいに出た奴もいる。校長はいつ帰つたか姿が見えない。

ところへお座敷はこちら？ と芸者が三四人はいつて来た。おれも少し驚ろいたが、壁際へ押し付けられているんだから、じつとしてただ見ていた。すると今まで床柱へもたれて例の琥珀のパイプを自慢そうに呷っていた、赤シャツが急に起つて、座敷を出にかかった。向うからはいつて来た芸者の一人が、行き違いながら、笑つて挨拶をした。その一人は一番若くて一番奇麗な奴だ。遠くで聞えなかつたが、おや今晚はぐらい云つたらしい。赤シャツは知らん顔をして出て行つたぎり、顔を出さなかつた。大方校長のあとを追懸けて歸つたんだろう。

芸者が来たら座敷中急に陽気になつて、一同が鬨の声を揚げて歓迎したのかと思うくらい、騒々しい。そうしてある奴はなんこを攫む。その声の大きな事、まるで居合抜の稽古のようだ。こつちでは拳を打つてる。よつ、はつ、と夢中で両手を振るところは、ダーク一座の操人形よりよつぽど上手だ。向うの隅ではおいお酌だ、と徳利を振つてみて、酒だ酒だと言ひ直している。どうもやかましくて騒々しくつてたまらない。そのうちで手持無沙汰に下を向いて考え込んでるのはうらなり君ばかりである。自分のために送別会を開いてくれたのは、自分の転任を惜んでくれるんじゃない。みんなが酒を呑んで遊ぶためだ。自分独りが手持無沙汰で苦しむためだ。こんな送別会なら、開いてもらわ

ない方がよっぽどでした。

しばらくしたら、めいめい胴間声どうまごえを出して何か唄うたい始めた。おれの前へ来た一人の芸者が、あんた、なんぞ、唄いなはれ、と三味線を抱かかえたから、おれは唄わない、貴様唄ってみると云つたら、金かねや太鼓たいこでねえ、迷子の迷子の三太郎と、どんどこ、どんのちやんちきりん。叩いて廻あつて逢あわれるものならば、わたしなんぞも、金や太鼓でどんどこ、どんのちやんちきりと叩いて廻あつて逢あいたい人がある、と二た息にうたつて、おおしんどと云つた。おおしんどなら、もつと楽なものをやればいいのに。

すると、いつの間にか傍そばへ来て坐つた、野だが、鈴ちやん逢あいたい人に逢つたと思つたら、すぐお帰りで、お気の毒さまみたようでげすと相あ変へらず嘸はなし家いみたような言葉使つかいをする。知りまへんと芸者はつんと済すました。野だは頓とん着じゃくなく、たまたま逢あいは逢あいながら……と、いやな声を出して義太夫ぎだゆうの真似まねをやる。おきなはれやと芸者は平手で野だの膝ひざを叩たたいたら野だは恐きょう悦えつして笑つてる。この芸者は赤シャツに挨拶あいさつをした奴やつだ。芸者に叩たたかれて笑うなんて、野だもおめでたい者だ。鈴ちやん僕ぼくが紀伊きいの国くにを踊おどるから、一つ弾ひいて頂戴てんがいと云い出した。野だはこの上まだ踊おどる気きでいる。

向うの方で漢学のお爺じいさんが齒はのない口くちを歪ゆがめて、そりや聞きえませなせん伝兵衛でんべいさん、お前

とわたしのその中は……とまでは無事に済すましたが、それから？ と芸者に聞いています。爺さんなんて物覚えのわるいものだ。一人が博物を捕つかまえて近ちか頃ころこないなのが、でけましたぜ、弾いてみまほうか。よう聞いて、いなはれや——花月かげつき巻、白いリボンのハイカラ頭、乗るは自転車、弾くはヴァイオリン、半可はんかの英語でぺらぺらと、I am glad to see you と唄うと、博物はなるほど面白い、英語入りだねと感心している。

山嵐は馬鹿に大きな声を出して、芸者、芸者と呼んで、おれが剣舞けんぶをやるから、三味線を弾けと号令を下した。芸者はあまり乱暴な声なので、あつげに取られて返事もしない。山嵐は委細わいさい構わず、ステッキを持つて来て、踏破ふみやぶるせんざん千山万岳せんざんばんがくのけむり烟まんなかと真中へ出て独りかくで隠し芸を演じている。ところへ野のだががすでに紀伊の国を済まして、かつぽれを済まして、棚たなの達磨だるまさんを済して丸まる裸はだかの越中えつちゆうふんどし禪ぜん一つになって、棕櫚しゆろ箒ぼうきを小脇せうわきに抱か込んで、日清談判破裂はれつして……と座敷中練りあるき出した。まるで気違きちがいだ。

おれはさつきから苦しそうに袴も脱ぬがず控えているうらなり君が気の毒でたまらなかつたが、なんぼ自分の送別会だつて、越中禪はだかおどりの裸はだか 踊おどりまで羽織袴はねおりで我慢がまんしてみている必要はあるまいと思つたから、そばへ行つて、古賀さんもう帰りましょうと退去を勧めてみた。するとうらなり君は今日は私の送別会だから、私が先へ帰つては失礼です、どうぞご遠えんり

慮なくと動く景色もない。なに構うもんですか、送別会なら、送別会らしくするがいいです、あの様をご覧なさい。氣狂会です。さあ行きましようと、進まないのを無理に勧め、座敷を出かかるところへ、野だが箒を振り振り進行して来て、やご主人が先へ帰るとはひどい。日清談判だ。帰せないと箒を横にして行く手を塞いだ。おれはさつきから肝癩が起つているところだから、日清談判なら貴様はちゃんちゃんだろうと、いきなり拳骨で、野だの頭をほかりと喰わしてやった。野だは二三秒の間毒気を抜かれた体で、ぼんやりしていたが、おやこれはひどい。お撲ちになつたのは情ない。この吉川をご打擲とは恐れ入った。いよいよもつて日清談判だ。とわからぬ事をならべているところへ、うしろから山嵐が何か騷動が始まつたと見てとつて、劍舞をやめて、飛んできたが、このていたらくを見て、いきなり頸筋をうんと攫んで引き戻した。日清……：いたい。いたい。どうもこれは乱暴だと振りもがくところを横に振つたら、すんと倒れた。あとはどうなつたか知らない。途中でうらなり君に別れて、うちへ帰つたら十一時過ぎだった。

祝勝会で学校はお休みだ。練兵場れんべいばで式があるとこのので、狸たぬきは生徒を引率して参列しなくてはならない。おれも職員ひとりの一人としていっしょにくつついて行くんだ。町へ出ると日の丸だらけで、まぼしいくらいである。学校の生徒は八百人もあるのだから、体操の教師が隊伍たいごを整えて、一組一組の間を少しづつ明けて、それへ職員が一人か二人ふたりずつ監督かんとくとして割り込む仕掛しかけである。仕掛しかけだけはすこぶる巧こう妙みょうなものだが、実際はすこぶる不手際である。生徒は小供こどもの上に、生意気で、規律を破らなくっては生徒の体面にかかわると思つてる奴等やつらだから、職員が幾いく人たりについて行つたつて何の役に立つもんか。命令も下さないのに勝手な軍歌をうたつたり、軍歌をやめるとワーと訳もないのに鬨ときの声を揚げたり、まるで浪なみ人が町内をねりあるいてるようなものだ。軍歌も鬨ときの声も揚げない時はがやがや何か喋舌しゃべつてる。喋舌しゃべらないでも歩けそうなもんだが、日本人はみな口から先へ生れるのだから、いくら小言を云いつたつて聞きつこない。喋舌しゃべるのもただ喋舌しゃべるのではない、教師のわる口を喋舌しゃべるんだから、下等だ。おれは宿直事件で生徒を謝罪おまじさして、まあこれならよかろうと思つていた。ところが実際は大違おまちいである。下宿の婆ばあさんの言葉を借りて云えば、正に大違かんごろういの勘五郎である。生徒があやまったのは心しんから後悔こうかいしてあやまったのではない。ただ校長から、命令されて、形式的に頭を下げたのである。商人が頭ば

かり下げて、狡い事をやめないのと一般で生徒も謝罪だけはするが、いたずらは決してやるものではない。よく考えてみると世の中はみんなこの生徒のようなものから成立しているかも知れない。人があやまつたり詫びたりするのを、真面目に受けて勘弁するのは正直過ぎる馬鹿と云うんだろう。あやまるのも仮りにあやまるので、勘弁するのも仮りに勘弁するのだと思つてれば差し支えない。もし本当にあやまらせる気なら、本当に後悔するまで叩きつけなくてはいけない。

おれが組と組の間にはいつて行くと、天麩羅だの、団子だの、と云う声が絶えずする。しかも大勢だから、誰が云うのだから分らない。よし分つてもおれの事を天麩羅と云つたんじゃないやありません、団子と申したのじゃありません、それは先生が神経衰弱だから、ひがんで、そう聞くんだけれい云うに極まつてる。こんな卑劣な根性は封建時代から、養成したこの土地の習慣なんだから、いくら云つて聞かしたつて、教えてやつたつて、到底直りつこない。こんな土地に一年も居ると、潔白なおれも、この真似をしなければならなく、なるかも知れない。向うでうまく言い抜けられるような手段で、おれの顔を汚すのを抛つておく、樗蒲一はない。向こうが人ならおれも人だ。生徒だつて、子供だつて、ずう体はおれより大きいや。だから刑罰として何か返報をしてやらなくつては義理がわる



い。ところがこつちから返報をする時分に尋常じんじょうの手段で行くと、向うから逆振さかねじを食わして来る。貴様がわるいからだと言うと、初手はつてから逃げ路にみちが作つてある事だから滔々とうとうと弁じ立てる。弁じ立てておいて、自分の方を表向きだけ立派にしてそれからこつちの非を攻撃こうげきする。もともと返報にした事だから、こちらの弁護は向うの非が拳がらない上は弁護べんごにならない。つまりは向うから手を出しておいて、世間体はこつちが仕掛けた喧嘩けんかのように、見倣みなされてしまう。大変な不利益だ。それなら向うのやるなり、愚迂多良童子ぐうたらどうじを極め込んでいれば、向うはますます増長するばかり、大きく云えば世の中のためにならない。そこで仕方がないから、こつちも向うの筆法を用いて捕まつかえられないで、手の付けようのない返報をしなくてはならなくなる。そうなつては江戸えどつ子も駄目だめだ。駄目だが一年もこうやられる以上は、おれも人間だから駄目でも何でもそうならなくつちや始末がつかない。どうしても早く東京へ帰つて清きよといつしよになるに限る。こんな田舎いなかに居るのは墮だ落らくしに來ているようなものだ。新聞配達をしたつて、ここまで墮落するよりはましだ。

こう考えて、いやいや、附ついてくると、何だか先鋒せんぽうが急にがやがや騒さわぎ出した。同時に列はびたりと留まる。変だから、列を右へはずして、向うを見ると、大手町おおもてまちを突き當つて薬師町やくしまちへ曲がる角の所で、行き詰づまつたぎり、押し返おしたり、押し返されたりして揉も

み合っている。前方から静かに静かにと声を洩らして来た体操教師に何ですと聞くと、曲り角で中学校と師範学校が衝突したんだと云う。

中学と師範とはどこの県下でも犬と猿のように仲がわるいそうさ。なぜだかわからないが、まるで気風が合わない。何かあると喧嘩をする。大方狭い田舎で退屈だから、暇潰しにやる仕事なんだろう。おれは喧嘩は好きな方だから、衝突と聞いて、面白半分に馳け出して行つた。すると前の方にいる連中は、しきりに何だ地方税の癖に、引き込めど、怒鳴つてる。後ろからは押せ押せと大きな声を出す。おれは邪魔になる生徒の間をくぐり抜けて、曲がり角へもう少して出ようとした時に、前へ！と云う高く鋭い号令が聞えたと思つたら師範学校の方は肅肅として行進を始めた。先を争つた衝突は、折合がついたには相違ないが、つまり中学校が一步を譲つたのである。資格から云うと師範学校の方が上だそうさ。

祝勝の式はすこぶる簡単なものであつた。旅団長が祝詞を読む、知事が祝詞を読む、参列者が万歳を唱える。それでおしまいだ。余興は午後にあると云う話だから、ひとまず下宿へ帰つて、こないだじゅうから、気に掛つていた、清への返事をかきかけた。今度はもつと詳しく書いてくれとの注文だから、なるべく念入りに認めなくつちやならない。し

かしいぎとなつて、半切はんきりを取り上げると、書く事はたくさんあるが、何から書き出していいか、わからない。あれにしようか、あれは面倒臭めんどうくさいい。これにしようか、これはつまらない。何か、すらすらと出て、骨が折れなくつて、そうして清が面白がるようなものはないかしらん、と考へてみると、そんな注文通りの事件は一つもなさそうだ。おれは墨すみを磨すつて、筆をしめして、巻紙まきしを睨にらめて、——巻紙を睨めて、筆をしめして、墨を磨つて——同じ所作を同じように何返も繰り返したあと、おれには、とても手紙は書けるものではないと、諦あきらめて硯すずりの蓋ふたをしてしまった。手紙なんぞをかくのは面倒臭い。やつぱり東京まで出掛けて行つて、逢あつて話をするのが簡便だ。清の心配は察しないでもないが、清の注文通りの手紙を書くのは三七日の断食だんじきよりも苦しい。

おれは筆と巻紙を抛ほうり出して、ごろりと転がって肱ひじまくら枕まくらをして庭にわの方なたを眺ながめてみたが、やつぱり清の事が気にかかる。その時おれはこう思った。こうして遠くへ来てまで、清の身の上を案じていてやりさえすれば、おれの真心まごころは清に通じるに違いない。通じさえすれば手紙なんぞやる必要はない。やらなければ無事で暮くらしてると思つてゐるだろう。たよりは死んだ時か病氣の時か、何か事の起つた時にやりさえすればいい訳だ。

庭は十坪とつぽほどの平庭で、これという植木もない。ただ一本の蜜柑みかんがあつて、塀へいのそとか

ら、目標めじるしになるほど高い。おれはうちへ帰ると、いつでもこの蜜柑を眺める。東京を出た事のないものには蜜柑の生なつているところはすこぶる珍めずらしいものだ。あの青い実がだんだん熟うれてきて、黄色になるんだらうが、定めて奇麗きれいだらう。今でももう半分色の変つたのがある。婆ばあさんに聞いてみると、すこぶる水気の多い、旨うまい蜜柑だそうだ。今に熟うれたら、たと召めし上がれと云つたから、毎日少しづつ食つてやらう。もう三週間もしたら、充じゆう分ぶん食えるだらう。まさか三週間以内にここを去る事もなからう。

おれが蜜柑の事を考えているところへ、偶然ぐうぜん山嵐やまあらしが話しにやつて来た。今日は祝勝会しゅつせうかいだから、君といつしよにご馳走ちせうを食おうと思つて牛肉を買つて来たど、竹の皮の包つつみを袂たもとから引きずり出して、座敷ざしきの真中まんなかへ抛り出した。おれは下宿で芋責いもせめ豆腐責とうふせめになつて上うへ、蕎麦屋そばや行き、団子屋だんごや行きを禁じられてる際だから、そいつは結構だと、すぐ婆ばあさんから鍋なべと砂糖さとうをかり込んで、煮方にがたに取りかかった。

山嵐は無暗むやみに牛肉を頬張ほおばりながら、君あの赤シャツが芸者げいしやに馴染なじみのある事を知つてるかとか聞きくから、知つてるとも、この間うらなりの送別会せうべつかいの時に来た一人がそうだらうと云つたら、そうだ僕ぼくはこの頃ころようやく勘づいたのに、君はなかなか敏びんしやう捷じやうだと大いにほめた。「あいつは、ふた言目には品性しんせいだの、精神的娯楽げうらくだのと云う癖くせに、裏へ廻まわつて、芸者と関

係なんかつけどる、怪しからん奴だ。それもほかの人が遊ぶのを寛容するならいいが、君が蕎麦屋へ行ったり、団子屋へはいるのさえ取締上害になると云って、校長の口を通して注意を加えたじやないか」

「うん、あの野郎の考えじや芸者買は精神的娯楽で、天麩羅や、団子は物理的娯楽なんだろう。精神的娯楽なら、もつと大べらにやるがいい。何だあの様は。馴染の芸者がはいつてくると、入れ代りに席をはずして、逃げるなんて、どこまでも人を胡魔化す気だから気に食わない。そうして人が攻撃すると、僕は知らないとか、露西亞文学だとか、俳句が新体詩の兄弟分だとか云って、人を烟に捲くつもりなんだ。あんな弱虫は男じやないよ。全く御殿女中の生れ変りか何かだぜ。ことによると、あいつのおやじは湯島のかげまかもしれない」

「湯島のかげまた何だ」

「何でも男らしくないもんだらう。——君そのところはまだ煮えていないぜ。そんなのを食うと條虫が湧くぜ」

「そうか、大抵大丈夫だらう。それで赤シャツは人に隠れて、温泉の町の角屋へ行つて、芸者と会見するそうだ」

「角屋つて、あの宿屋か」

「宿屋兼料理屋さ。だからあいつを一番へこますためには、あいつが芸者をつれて、あそこへはいり込むところを見届けておいて面詰めんきつするんだね」

「見届けるつて、夜番よばんでもするのかい」

「うん、角屋の前に枳屋ますやという宿屋があるだろう。あの表二階をかりて、障子しょうじへ穴をあけて、見ているのさ」

「見ているときに来るかい」

「来るだろう。どうせひと晩じゃいけない。二週間ばかりやるつもりでなくっちゃ」

「随分ずいぶん疲れるぜ。僕あ、おやじの死ぬとき一週間ばかり徹夜てつやして看病した事があるが、あとでぼんやりして、大いに弱った事がある」

「少しぐらい身体が疲れたつて構わんさ。あんな奸物かんぶつをあのままにしておくど、日本のためにならないから、僕が天に代つて誅戮ちゅうりくを加えるんだ」

「愉快ゆかいだ。そう事が極まれば、おれも加勢してやる。それで今夜から夜番をやるのかい」  
「まだ枳屋かけあに懸合つてないから、今夜は駄目だ」

「それじゃ、いつから始めるつもりだい」

「近々のうちやるさ。いづれ君に報知をするから、そうしたら、加勢してくれたまえ」  
 「よろしい、いつでも加勢する。僕は計略は下手だが、喧嘩とくるとこれでなかなかすばしいぜ」

おれと山嵐がしきりに赤シャツ退治の計略を相談していると、宿の婆さんが出て来て、学校の生徒さんが一人、堀田先生にお目にかかりたいてお出でたぞなもし。今お宅へ参じたのじやが、お留守じやけれ、大方ここじやろうてて捜し当ててお出でたのじやがなもしと、鬩の所へ膝を突いて山嵐の返事を待つてる。山嵐はそうですかと玄関まで出て行つたが、やがて帰つて来て、君、生徒が祝勝会の余興を見に行かないかつて誘いに来たんだ。今日は高知から、何とか踊りをしに、わざわざここまで多人数乗り込んで来ているのだから、是非見物しろ、めつたに見られない踊だというんだ、君もいつしよに行つてみたまえと山嵐は大いに乗り気で、おれに同行を勧める。おれは踊なら東京でたくさん見ている。毎年八幡様のお祭りには屋台が町内へ廻つてくるんだから沙酌みでも何でもちやんと心得ている。土佐つぽの馬鹿踊なんか、見たくも無いと思つたけれども、せつかく山嵐が勧めるもんだから、つい行く気になつて門へ出た。山嵐を誘いに来たものは誰かと思つたら赤シャツの弟だ。妙な奴が来たもんだ。

会場へはいると、回向院の相撲か本門寺の御会式のように幾旒となく長い旗を所々に植え付けた上に、世界万国の国旗をことごとく借りて来たくらい、縄から縄、綱から綱へ渡しかけて、大きな空が、いつになく賑やかに見える。東の隅に一夜作りの舞台を設けて、ここでいわゆる高知の何とか踊りをやるんだそうだ。舞台を右へ半町ばかりくると葭簀の囲いをして、活花が陳列してある。みんなが感心して眺めているが、一向くだらないものだ。あんなに草や竹を曲げて嬉しがるなら、背虫の色男や、跛の亭主を持つて自慢するがよかろう。

舞台とは反対の方面で、しきりに花火を揚げる。花火の中から風船が出た。帝国万歳とかいてある。天主の松の上をふわふわ飛んで営所のなかへ落ちた。次はぼんと音がして、黒い団子が、しよつと秋の空を射抜くように揚がると、それがおれの頭の上で、ぽかりと割れて、青い煙が傘の骨のように開いて、だらだらと空中に流れ込んだ。風船がまた上がった。今度は陸海軍万歳と赤地に白く染め抜いた奴が風に揺られて、温泉の町から相生村の方へ飛んでいった。大方観音様の境内へでも落ちたろう。

式の時はずいぶんでもなかったが、今度は大変な人出だ。田舎にもこんな人間が住んでるかと思つた。驚ろいたぐらいうじやうじやしている。利口な顔はあまり見当たらないが、数から云



うとたしかに馬鹿に出来ない。そのうち評判の高知の何とか蹠が始まった。蹠というから藤間か何ぞのやる蹠りかと早合点していたが、これは大間違いであった。

いかめしい後鉢巻うしろはちまきをして、立つ付け袴つばかまを穿いた男が十人ばかりずつ、舞台の上に三列に並んで、その三十人がことごとく抜き身を携さげているには魂消たまげた。前列と後列の間はわずか一尺五寸ぐらいたらう、左右の間隔かんかくはそれより短くとも長くはない。たった一人列を離はなれて舞台の端はしに立つてるのがあるばかりだ。この仲間外れはずの男は袴だけはつけているが、後鉢巻は儉約して、抜身の代りに、胸へ太鼓たいこを懸かけている。太鼓は太神楽だいかぐらの太鼓と同じ物だ。この男がやがて、いやあ、はああと呑気のんきな声を出して、妙な謡うたをうたいながら、太鼓をぼこぼん、ぼこぼんと叩たたく。歌の調子は前代未聞の不思議なものだ。三河万歳みかわまんざいと普陀洛ふだらくやの合併がつべいしたものと思えば大した間違いにはならない。

歌はすこぶる悠ゆう長ちようなもので、夏分の水飴みずあめのように、だらしがなが、句切りをとるためにぼこぼんを入れるから、のべつのも拍子ひょうしは取れる。この拍子に応じて三十人の抜き身がぴかぴかと光るのだが、これはまたすこぶる迅速しんそくなお手際で、拝見していても冷々ひやひやする。隣となりも後ろも一尺五寸以内に生きた人間が居て、その人間がまた切れぬ抜き身を自分と同じように振り舞まわすのだから、よほど調子が揃そろわなければ、同志撃どうしうち

を始めて怪我をする事になる。それも動かないで刀だけ前後とか上下とかに振るのなら、まだ危険もないが、三十人が一度に足踏みをして横を向く時がある。ぐるりと廻る事がある。膝を曲げる事がある。隣りのものが一秒でも早過ぎるか、遅過ぎれば、自分の鼻は落ちるかも知れない。隣りの頭はそがれるかも知れない。抜き身の動くのは自由自在だが、その動く範囲は一尺五寸角の柱のうちにきざられた上に、前後左右のものと同方向に同速度にひらめかなければならない。こいつは驚いた、なかなかもって汐酌や関の戸の及ぶところでない。聞いてみると、これははなはだ熟練の入るもので容易な事では、こういう風に調子が合わないそうさ。ことにむずかしいのは、かの万歳節のぼこぼん先生だそうさ。三十人の足の運びも、手の働きも、腰の曲げ方も、ことごとくこのぼこぼん君の拍子一つで極まるのだそうさ。傍で見ていると、この大将が一番呑気そうに、いやあ、はああと気楽にうたつてるが、その実ははなはだ責任が重くって非常に骨が折れるとは思議なものだ。

おれと山嵐が感心のあまりこの躑を余念なく見物していると、半町ばかり、向うの方で急にわつと云う鬨の音がして、今まで穏やかに諸所を縦覧していた連中が、にわかに波を打って、右左りに揺き始める。喧嘩だ喧嘩だと云う声がすると思うと、人の袖を潜り抜け

て来た赤シャツの弟が、先生また喧嘩です、中学の方で、今朝の意趣返しをするんで、また師範の奴と決戦を始めたところです、早く来て下さいと云いながらまた人の波のなかへ潜り込んでどつかへ行つてしまった。

山嵐は世話の焼ける小僧だまた始めたのか、いい加減にすればいいのにと逃げる人を避けながら一散に馳け出した。見ている訳にも行かないから取り鎮めるつもりだろう。おれは無論の事逃げる気はない。山嵐の踵を踏んであとからすぐ現場へ馳けつけた。喧嘩は今が真最中である。師範の方は五六十人もあろうか、中学はたしかに三割方多い。師範は制服をつけているが、中学は式後大抵は日本服に着換えているから、敵味方はすぐわかる。しかし入り乱れて組んづ、解れつ戦つてゐるから、どこから、どう手を付けて引き分けていいか分らない。山嵐は困つたなど云う風で、しばらくこの乱雑な有様を眺めていたが、こうなつちや仕方がない。巡查がくると面倒だ。飛び込んで分けようと、おれの方を見て云うから、おれは返事もしないで、いきなり、一番喧嘩の烈しそうな所へ躍り込んだ。止せ止せ。そんな乱暴をすると学校の体面に關わる。よさないかと、出るだけの声を出して敵と味方の分界線らしい所を突き貫けようとしたが、なかなかそう旨くは行かない。一二間はいつたら、出る事も引く事も出来なくなつた。目の前に比較的大きな師範生が、

十五六の中学生と組み合っている。止せと云ったら、止さないかと師範生の肩かたを持って、無理に引き分けようとする途端とたんにだれか知らないが、下からおれの足をすくった。おれは不意を打たれて握にぎった、肩を放して、横に倒たおれた。堅かたい靴くつでおれの背の上へ乗った奴がある。両手と膝を突いて下から、跳はね起きたら、乗った奴は右の方へころがり落ちた。起き上がったを見ると、三間ばかり向うに山嵐の大きな身体が生徒の間に挟はさまりながら、止せ止せ、喧嘩は止せ止せと揉み返されてるのが見えた。おい到底駄目だと云ってみたが聞えないのか返事もしない。

ひゆうと風を切つて飛んで来た石が、いきなりおれの頬ほおほね骨あたまへ中あたつたなと思つたら、後ろからも、背中を棒ぼうでどやした奴がある。教師の癖くせに出ている、打ぶて打ぶてと云う声がある。教師は二人だ。大きい奴と、小さい奴だ。石を抛なげろ。と云う声もする。おれは、なに生意気な事をぬかすな、田舎者の癖くせにと、いきなり、傍そばに居た師範生の頭を張りつけてやった。石がまたひゆうと来る。今度はおれの五分刈ぶがりの頭を掠かすめて後ろの方へ飛んで行った。山嵐はどうなったか見えない。こうなつちや仕方がない。始めは喧嘩をとめにはいつたんだが、どやされたり、石をなげられたりして、恐おそれ入つて引き下がるうんでれがあるものか。おれを誰だと思ふんだ。身長なりは小さくつても喧嘩の本場で修行を積んだ兄さんだ

と無茶苦茶に張り飛ばしたり、張り飛ばされたりしていると、やがて巡査だ巡査だ逃げろと云う声があった。今まで葛練りの中で泳いでるように身動きも出来なかつたのが、急に楽になつたと思つたら、敵も味方も一度に引上げてしまった。田舎者でも退却は巧妙だ。クロパトキンより旨いくらいである。

山嵐はどうしたかを見ると、紋付の一重羽織をずたずたにして、向うの方で鼻を拭いている。鼻柱をなぐられて大分出血したんだそうさ。鼻がふくれ上がって真赤になつてすこぶる見苦しい。おれは飛白の袷を着ていたから泥だらけになつたけれども、山嵐の羽織ほどの損害はない。しかし頬ぺたがぴりぴりしてたまらない。山嵐は大分血が出ているぜと教えてくれた。

巡査は十五六名来たのだが、生徒は反対の方面から退却したので、捕まつたのは、おれと山嵐だけである。おれらは姓名を告げて、一部始終を話したら、ともかくも警察まで来いと云うから、警察へ行つて、署長の前で事の顛末を述べて下宿へ歸つた。

あくる日眼が覚めてみると、身体中痛くてたまらない。久しく喧嘩をしつげなかつたから、こんなに答えるんだらう。これじやあんまり自慢もできないと床の中で考えていると、婆さんが四国新聞を持ってきて枕元へ置いてくれた。実は新聞を見るのも退儀なんだが、男がこれしきの事に閉口たれて仕様があるものかと無理に腹這いになって、寝ながら、二頁を開けてみると驚ろいた。昨日の喧嘩がちゃんと出ている。喧嘩の出ているのは驚ろかないのだが、中学の教師堀田某と、近頃東京から赴任した生意気なる某とが、順良なる生徒を使噓してこの騒動を喚起せるのみならず、兩人は現場にあつて生徒を指揮したる上、みだりに師範生に向つて暴行をほしいままにしたりと書いて、次にこんな意見が附記してある。本県の中学は昔時より善良温順の気風をもつて全国の羨望するところなりしが、輕薄なる二豎子のために吾校の特権を毀損せられて、この不面目を全市に受けたる以上は、吾人は奮然として起つてその責任を問わざるを得ず。吾人は信ず、吾人が手を下す前に、当局者は相当の処分をこの無頼漢の上に加えて、彼等をして再び教育界に足を入るる余地なからしむる事を。そうして一字ごとにみんな黒点を加えて、お灸を据えたつもりでいる。おれは床の中で、糞でも喰らえと云いながら、むっくり飛び起きた。不思議な事に今まで身体の関節が非常に痛かつたのが、飛び起きると同時に忘れ

たように軽くなつた。

おれは新聞を丸めて庭へ抛なげつけたが、それでもまだ気に入らなかつたから、わざわざ後架こうかへ持つて行つて棄すてて来た。新聞なんて無暗むやみな嘘うそを吐くもんだ。世の中に何が一番法ほ螺らを吹くと云つて、新聞ほどの法螺吹きはあるまい。おれの云つてしかるべき事をみんな向うで並ならべていやがる。それに近頃東京から赴任した生意気な某とは何だ。天下に某と云う名前の人があるか。考えてみる。これでもれつきとした姓せいもあり名もあるんだ。系図が見たけりや、多ただ田だ満まん仲じゆう以来の先祖を一人残らず拜ひましてやらあ。——顔を洗つたら、頬ほぺたが急に痛くなつた。婆さんに鏡をかせと云つたら、けさの新聞をお見たかなもして聞く。読んで後架へ棄すてて来た。欲しけりや拾つて来いと云つたら、驚おどろいて引き下がった。鏡で顔を見ると昨日きのうと同じように傷がついている。これでも大事な顔だ、顔へ傷まで付けられた上へ生意気なる某などと、某呼ばわりをされればたくさんだ。

今日の新聞に辟へ易きして学校を休んだなどと云われちや一生の名折れだから、飯を食つていの一号に出頭した。出てくる奴やつも、出てくる奴もおれの顔を見て笑っている。何がおかしいんだ。貴様達にこしらえてもらつた顔じゃあるまいし。そのうち、野だが出て来て、いや昨日はお手柄てがらで、——名譽めいよのご負傷でげすか、と送別会の時に撲なぐつた返報と心得たの

か、いやに冷かしたから、余計な事を言わずに絵筆でも舐めていろと云ってやった。するところや恐入りやした。しかしさぞお痛い事でげしよう云うから、痛かろうが、痛くなかろうがおれの面だ。貴様の世話になるもんかと怒鳴りつけてやったら、向う側の自席へ着いて、やつぱりおれの顔を見て、隣りの歴史の教師と何か内所話をして笑っている。

それから山嵐が出頭した。山嵐の鼻に至っては、紫色に膨張して、掘ったら中から膿が出そうに見える。自惚のせいか、おれの顔よりよっぽど手ひどく遣られている。おれと山嵐は机を並べて、隣り同志の近い仲で、お負けにその机が部屋の戸口から真正面にあるんだから運がわるい。妙な顔が二つ塊まっている。ほかの奴は退屈にさえなるときとこつちばかり見る。飛んだ事と口で云うが、心のうちではこの馬鹿がと思つてるに相違ない。それでなければあいう風に私語合つてはくすくす笑う訳がない。教場へ出ると生徒は拍手をもって迎えた。先生万歳と云うものが二三人あつた。景氣がいいんだか、馬鹿にされてるんだか分らない。おれと山嵐がこんなに注意の焼点となつてるなかに、赤シャツばかりは平常の通り傍へ来て、どうも飛んだ災難でした。僕は君等に対してお気の毒でなりません。新聞の記事は校長とも相談して、正誤を申し込む手続きにしておいたから、心配しなくてもいい。僕の弟が堀田君を誘いに行ったから、こんな事



が起つたので、僕は実に申し訳がない。それでこの件についてはあくまで尽力するつもりだから、どうかあしからず、などと半分謝罪的な言葉を並べている。校長は三時間目に校長室から出てきて、困った事を新聞がかき出しましたね。むずかしくならなければいいかと多少心配そうに見えた。おれには心配なんかない、先で免職をするなら、免職される前に辞表を出してしまうだけだ。しかし自分がわるくないのにこつちから身を引くのは法螺吹きの新聞屋をますます増長させる訳だから、新聞屋を正誤させて、おれが意地にも務めるのが順だと考えた。帰りがけに新聞屋に談判に行こうと思つたが、学校から取消の手續きはしたと云うから、やめた。

おれと山嵐は校長と教頭に時間の合間を見計つて、嘘のないところを一応説明した。校長と教頭はそうだろう、新聞屋が学校に恨みを抱いて、あんな記事をとさらに掲げたんだろうと論断した。赤シャツはおれ等の行為を弁解しながら控所を一人ごとに廻つてあるいていた。ことに自分の弟が山嵐を誘い出したのを自分の過失であるかのごとく吹聴していた。みんなは全く新聞屋がわるい、怪しからん、両君は実に災難だと云つた。帰りがけに山嵐は、君赤シャツは臭いぜ、用心しないとやられるぜと注意した。どうせ臭いんだ、今日から臭くなつたんじやなかうと云うと、君まだ気が付かないか、きのう

わざわざ、僕等を誘い出して喧嘩のなかへ、捲き込んだのは策だぜと教えてくれた。なるほどそこまでは気がつかなかった。山嵐は粗暴なようだが、おれより智慧のある男だと感心した。

「ああやつて喧嘩をさせておいて、すぐあとから新聞屋へ手を廻してあんな記事をかかせたんだ。実に奸物だ」

「新聞までも赤シャツか。そいつは驚いた。しかし新聞が赤シャツの云う事をそう容易く聴くかね」

「聴かなくつて。新聞屋に友達が居りや訳はないさ」

「友達が居るのかい」

「居なくても訳ないさ。嘘をついて、事実これこれだと話しや、すぐ書くさ」

「ひどいもんだな。本当に赤シャツの策なら、僕等はこの事件で免職になるかも知れないね」

「わるくすると、遣られるかも知れない」

「そんなら、おれは明日辞表を出してすぐ東京へ帰っちまわあ。こんな下等な所に頼んだって居るのはいやだ」

「君が辞表を出したって、赤シャツは困らない」

「それもそうだな。どうしたら困るだろう」

「あんな奸物の遣る事は、何でも証拠しやうこの拳こぶしがらないように、拳こぶしがらないようにと工夫するんだから、反駁はんぱくするのはむずかしいね」

「厄やっかい介かいだな。それじゃ濡衣ぬれぎぬを着るんだね。面白おもしろくもない。天道てんどう是ぜ耶や非ひかだ」

「まあ、もう二三日様子を見ようじゃないか。それでいよいよとなったら、温泉ゆの町で取おさつて抑おさえるより仕方がないだろう」

「喧嘩事件は、喧嘩事件としてか」

「そうさ。こつちはこつちで向うの急所を抑えるのさ」

「それもよからう。おれは策略は下手へたなんだから、万事よろしく頼む。いざとなれば何でもする」

俺と山嵐はこれで分わかれた。赤シャツが果はたたして山嵐の推察すいさつ通はたりをやったのなら、実にひどい奴だ。到底とうてい智慧ちゐ比ひべで勝てる奴ではない。どうしても腕わたり力りよくでなくつちや駄目だめだ。なるほど世界に戦争は絶えない訳だ。個人でも、とどの詰つまりは腕力だ。

あくる日、新聞のくるのを待ちかねて、披ひらいてみると、正誤どころか取り消しも見えな

い。学校へ行つて狸たぬきに催促さいそくすると、あしたぐらい出すでしょうと云う。明日になつて六号活字で小さく取消が出た。しかし新聞屋の方で正誤は無論しておらない。また校長に談判すると、あれより手続きのしようはないのだと云う答だ。校長なんて狸のような顔をして、いやにフロック張つているが存外無勢力なものだ。虚偽きよぎの記事を掲げた田舎新聞一つ詫あやまらせる事が出来ない。あんまり腹が立ったから、それじゃ私が一人で行つて主筆に談判すると云つたら、それはいかん、君が談判すればまた悪口を書かれるばかりだ。つまり新聞屋にかかれた事は、うそにせよ、本当にせよ、つまりどうする事も出来ないものだ。あきらめるより外に仕方がないと、坊主の説教じみた説諭せつゆを加えた。新聞がそんな者なら一日も早く打ぶつ潰つぶしてしまつた方が、われわれの利益だろう。新聞にかかれるのと、泥すつぽに食くいつかれるとが似たり寄つたりだとは今日こんにちただ今狸の説明によつて始めて承知しやうち仕つかまつつた。

それから三日ばかりして、ある日の午後、山嵐が憤ふんぜん然とやつて来て、いよいよ時機が来た、おれは例の計画を断行するつもりだと云うから、そうかそれじゃおれもやろうと、即座そくざに一味徒党に加盟した。ところが山嵐が、君はよす方がよかろうと首を傾かたむけた。なぜと聞くと君は校長に呼ばれて辞表を出せと云われたかと尋たずねるから、いや云われない。君

は？ と聴き返すと、今日校長室で、まことに気の毒だけれども、事情やむをえんから処決よけつしてくれと云われたとの事だ。

「そんな裁判はないぜ。狸は大方腹はらつづみ鼓たたを叩き過ぎて、胃の位置が顛倒てんどうしたんだ。君とおれは、いつしよに、祝勝会へ出てき、いつしよに高知のぴかぴか踊りを見てき、いつしよに喧嘩をとめにはいつたんじやないか。辞表を出せというなら公平に両方へ出せと云うがいい。なんで田舎いなかの学校はそう理窟りくつが分らないんだろう。焦慮じれついな」

「それが赤シャツの指金さしがねだよ。おれと赤シャツとは今までの行懸り上到底ゆきがか両立とうていしない人間だが、君の方は今の通り置いても害にならないと思ってるんだ」

「おれだつて赤シャツと両立するものか。害にならないと思うなんて生意氣だ」

「君はあまり単純過ぎるから、置いたつて、どうでも胡魔化ごまかされると考えてるのさ」

「な悪いや。誰だれが両立してやるものか」

「それに先だつて古賀が去つてから、まだ後任が事故のために到着とうちやくしないだろう。その上に君と僕を同時に追い出しちや、生徒の時間に明きが出来て、授業にさし支つかえるからな」

「それじゃおれを間あいのくさびに一席うかが伺かわせる気なんだな。こん畜生ちくしょう、だれがその手に乗る

ものか」

翌日<sup>あくるひ</sup>おれは学校へ出て校長室へ入って談判を始めた。

「何で私に辞表を出せと云わないんですか」

「へえ？」と狸はあつげに取られている。

「堀田には出せ、私には出さないで好いと云う法がありますか」

「それは学校の方の都合で……」

「その都合が間違<sup>まちが</sup>つてまさあ。私が出さなくって済むなら堀田だって、出す必要はないでしょう」

「その辺は説明が出来かねますが——堀田君は去られてもやむをえんのですが、あなたは辞表を出しになる必要を認めませんから」

なるほど狸だ、要領を得ない事ばかり並べて、しかも落ち付き<sup>はら</sup>払<sup>はら</sup>つてる。おれは仕様が  
ないから

「それじゃ私も辞表を出しましょう。堀田君一人辞職させて、私が安閑<sup>あんかん</sup>として、留ま<sup>ま</sup>つていられると思つていらつしやるかも知れないが、私にはそんな不人情な事は出来ません」

「それは困る。堀田も去りあなたも去ったら、学校の数学の授業がまるで出来なくなってしまうから……」

「出来なくなつても私の知つた事じゃありません」

「君そう我儘わがままを云うものじゃない、少しは学校の事情も察してくれなくっちゃ困る。それに、来てから一月立つか立たないのに辞職したと云うと、君の将来の履歴りれきに関係するから、その辺も少しは考えたらいいでしょう」

「履歴なんか構うもんですか、履歴より義理が大切です」

「そりやごもつとも——君の云うところは一々ごもつともだが、わたしの云う方も少しは察して下さい。君が是非辞職すると云うなら辞職されてもいいから、代りのあるまでどうかやつてもらいたい。とにかく、うちでもう一返考え直してみして下さい」

考え直すつて、直しようのない明々白白たる理由だが、狸ねこが蒼あおくなつたり、赤くなつたりして、可愛想かわいそうになつたからひとまず考え直す事として引き下がった。赤シャツには口もきかなかつた。どうせ遣つつけるなら塊かためて、うんと遣つつける方がいい。

山嵐に狸と談判した模様を話したら、大方そんな事だろうと思つた。辞表の事はいざとなるまでそのままにしておいても差支さしつかえあるまいとの話だったから、山嵐の云う通りに

した。どうも山嵐の方がおれよりも利巧らしいから万事山嵐の忠告に従う事にした。

山嵐はいよいよ辞表を出して、職員一同に告別の挨拶をして浜の港屋まで下つたが、人に知れないように引き返して、温泉の町の柵屋の表二階へ潜んで、障子へ穴をあけて覗き出した。これを知つてゐるものはおればかりだろう。赤シャツが忍んで来ればどうせ夜だ。しかも宵の口は生徒やその他の目があるから、少なくとも九時過ぎに極つてゐる。最初の二晩はおれも十一時頃まで張番をしたが、赤シャツの影も見えない。三日目には九時から十時半まで覗いたがやはり駄目だ。駄目を踏んで夜なかに下宿へ帰るほど馬鹿氣た事はない。四五日すると、うちの婆さんが少々心配を始めて、奥さんのおありるのに、夜遊びはおやめたがええぞなもと忠告した。そんな夜遊びとは夜遊びが違ふ。こつちのは天に代つて誅戮を加える夜遊びだ。とはいふものの一週間も通つて、少しも験が見えないと、いやになるもんだ。おれは性急な性分だから、熱心になると徹夜でもして仕事をしますが、その代り何によらず長持ちのした試しがない。いかに天誅党でも飽きる事に變りはない。六日目には少々いやになつて、七日目にはもう休もうかと思つた。そこへ行くと山嵐は頑固なものだ。宵から十二時過までは眼を障子へつけて、角屋の丸ぼやの瓦斯燈の下を覗めつきりである。おれが行くと今日は何人客があつて、泊りが何人、女が何人とい



ろいろな統計を示すのには驚ろいた。どうも来ないようじやないかと云うと、うん、たしかに来るはずだがと時々腕組うでぐみをして溜息ためいきをつく。可愛想に、もし赤シャツがここへ一度来てくれなければ、山嵐は、生涯しょうがい天誅を加える事は出来ないのである。

八日目には七時頃から下宿を出て、まずゆるりと湯に入つて、それから町で鶏卵けいらんを八つ買った。これは下宿の婆さんの芋責いもぜめに應ずる策である。その玉子を四つずつ左右たもとの袂へ入れて、例の赤手拭あかてぬぐいを肩かたへ乗せて、懐手ふところをしながら、柎屋ますやの櫛子段はしごだんを登つて山嵐の座敷ざしきの障子をあげると、おい有望有望と韋駄天いだてんのような顔は急に活氣を呈ていした。昨夜ゆうべまでは少し塞ふさぎの氣味で、はたで見ているおれさえ、陰氣臭いんきくさいと思つたくらいだが、この顔色を見たら、おれも急にうれしくなつて、何も聞かない先から、愉快愉快と云つた。

「今夜七時半頃あの小鈴こすずと云う芸者が角屋へはいつた」

「赤シャツといっしょか」

「いいや」

「それじゃ駄目だ」

「芸者は二人づれだが、——どうも有望らしい」

「どうして」

「どうしてつて、ああ云う狡い奴だから、芸者を先へよこして、後から忍んでくるかも知れない」

「そうかも知れない。もう九時だろう」

「今九時十二分ばかりだ」と帯の間からニツケル製の時計を出して見ながら云ったが「おい洋燈を消せ、障子へ二つ坊主頭が写つてはおかしい。狐はすぐ疑ぐるから」

おれは一貫張の机の上にあつた置き洋燈をふつと吹きつけた。星明りで障子だけは少々あかるい。月はまだ出ていない。おれと山嵐は一生懸命に障子へ面をつけて、息を凝らしている。チーンと九時半の柱時計が鳴った。

「おい来るだろうかな。今夜来なければ僕はもう厭だぜ」

「おれは銭のつづく限りやるんだ」

「銭つていくらあるんだい」

「今日までで八日分五円六十銭払った。いつ飛び出しても都合のいいように毎晩勘定するんだ」

「それは手廻しがいい。宿屋で驚いてるだろう」

「宿屋はいいが、気が放せないから困る」

「その代り昼寝ひるねをするだろう」

「昼寝はするが、外出が出来ないんで窮きゆうくつ屈くつでたまらない」

「天誅も骨が折れるな。これで天網てんもう恢かい々かい疎そにして洩もらしちまつたり、何かしちや、つまらないぜ」

「なに今夜はきつとくるよ。——おい見る見ろ」と小声になつたから、おれは思わずどきりとした。黒い帽子ぼうしを戴いたた男が、角屋の瓦斯燈を下から見上げたまま暗い方へ通り過ぎた。違つてゐる。おやおやと思つた。そのうち帳場の時計が遠慮えんりよなく十時を打つた。今夜もとうとう駄目らしい。

世間は半分静かになつた。遊廓ゆうかくで鳴らす太鼓たいこが手に取るように聞きえる。月が温泉の山うしろの後からのつと顔を出した。往来はあかるい。すると、下しもの方から人声が聞えだした。窓から首を出す訳には行かないから、姿を突つき留める事は出来ないが、だんだん近づいて来る模様だ。からんからんと駒下駄こまげたを引き擦する音がする。眼を斜ななめにとするとやつと二人の影かげ法師げぼうしが見えるくらいに近づいた。

「もう大丈夫だいじょうぶですね。邪魔じやまものは追つ払つたから」正ましく野のだの声である。「強がるばかりで策がないから、仕様がな

「これは赤シャツだ。あの男もべらんめえに似ています

ね。あのべらんめえと来たら、勇み肌はだの坊っちゃんだから愛嬌あいきょうがありますよ」「増給  
がいやだの辞表を出したいのって、ありやどうしても神経に異状があるに相違ない」おれ  
は窓をあけて、二階から飛び下りて、思う様打ちぶのめしてやろうと思つたが、やつとの事  
で辛防しんぼうした。二人はハハハハと笑いながら、瓦斯燈の下を潜くぐつて、角屋の中へはいつた。

「おい」

「おい」

「来たぜ」

「とうとう来た」

「これでようやく安心した」

「野だの畜生、おれの事を勇み肌の坊っちゃんだと抜ぬかしやがつた」

「邪魔物と云うのは、おれの事だぜ。失敬千万な」

おれと山嵐は二人の帰路を要撃ようげきしなければならぬ。しかし二人はいつ出てくるか見  
当がつかない。山嵐は下へ行つて今夜ことによると夜中に用事があつて出るかも知れない  
から、出られるようにしておいてくれと頼たのんで来た。今思うと、よく宿のものが承知した  
ものだ。大抵たいていなら泥棒どろぼうと間違えられるところだ。

赤シャツの来るのを待ち受けたのはつらかったが、出て来るのをじっとして待つてるのはなおつらい。寝る訳には行かないし、始終障子の隙から覗めているのもつらいし、どうも、こうも心が落ちつかなくつて、これほど難儀な思いをした事はいまだにない。いつその事角屋へ踏み込んで現場を取つて抑えようと発議したが、山嵐は一言にして、おれの申し出を斥けた。自分共が今時分飛び込んだつて、乱暴者だと云つて途中で遮られる。訳を話して面会を求めれば居ないと逃げるか別室へ案内をする。不用意のところへ踏み込めると仮定したところで何十とある座敷のどこに居るか分るものではない、退屈でも出るのを待つより外に策はないと云うから、ようやくの事でとうとう朝の五時まで我慢した。

角屋から出る二人の影を見るや否や、おれと山嵐はすぐあとを尾けた。一番汽車はまだないから、二人とも城下まであるかなければならない。温泉の町をはずれると一丁ばかりの杉並木があつて左右は田圃になる。それを通りこすところかここに藁葺があつて、畠の中を一筋に城下まで通る土手へ出る。町さえはずれば、どこで追いついても構わないが、なるべくなら、人家のない、杉並木で捕まえてやろうと、見えがくれについて来た。町を外れると急に馳け足の姿勢で、はやてのように後ろから、追いついた。何が来たかと驚ろいて振り向く奴を待てと云つて肩に手をかけた。野達は狼狽の気味で逃げ出そうと

いう景色けしきだったから、おれが前へ廻まわつて行手を塞ふさいでしまった。

「教頭の職を持つてるものが何で角屋へ行つて泊とまつた」と山嵐はすぐ詰なりかけた。

「教頭は角屋へ泊わつて悪わるいという規則がありますか」と赤シャツは依然いぜんとして鄭てい寧ねいな言葉を使つてる。顔の色は少々蒼い。

「取とり締しまり上じょう 不都合だから、蕎麦屋や団子屋へさえはいってはいかんと、云うくらい謹き直ちよくな人が、なぜ芸者といつしよに宿屋へとまり込んだ」野だは隙を見ては逃げ出そう

とするからおれはすぐ前に立ち塞がつて「べらんめえの坊っちゃんた何だ」と怒鳴り付けたら、「いえ君の事を云つたんじゃないんです、全くないんです」と鉄面皮に言訳がましい事をぬかした。おれはこの時気がついてみたら、両手で自分の袂てきを握にぎつてる。追つかける時に袂の中の卵がぶらぶらして困るから、両手で握りながら来たのである。おれはいきなり袂へ手を入れて、玉子を二つ取り出して、やつと云いながら、野だの面へ擲たぎつけた。玉子がぐちゃりと割れて鼻の先から黄味がだらだら流れだした。野だはよつほど仰ぎ天てんした者と見えて、わつと言いながら、尻しりもち持もちについて、助けてくれと云つた。おれは食うために玉子は買ったが、打ぶつけるために袂へ入れてる訳ではない。ただ肝かん癩しやくのあまりに、ついぶつけるともなしに打ぶつけてしまったのだ。しかし野だが尻持しりもちを突いたところを

見て始めて、おれの成功した事に気がついたから、こん畜生ちくしやう、こん畜生と云いながら残る六つを無茶苦茶に擲たきつけたら、野だは顔中黄色になった。

おれが玉子をたたきつけているうち、山嵐と赤シャツはまだ談判最中である。

「芸者をつれて僕が宿屋へ泊つたと云う証しやうこ拠こがありますか」

「宵に貴様のなじみの芸者が角屋へはいつたのを見て云う事だ。胡魔化せるものか」

「胡魔化す必要はない。僕は吉川君と二人で泊つたのである。芸者が宵にはいろいろが、はいるまいが、僕の知つた事ではない」

「だまれ」と山嵐は拳げんこつ骨こつを食わした。赤シャツはよろよろしたが「これは乱暴だ、狼ろうぜ藉きである。理非を弁じないで腕力に訴えるのは無法だ」

「無法でたくさんだ」とまたほかりと撲なぐる。「貴様のような奸物はなぐらなくつちや、答えないんだ」とぼかぼかなぐる。おれも同時に野だを散々に擲なき据たえた。しまいには二人とも杉の根方にうづくまつて動けないのか、眼がちらちらするのか逃げようともしない。「もうたくさんか、たくさんでなけりや、まだ撲なつてやる」とぼかんと兩人ふたりでなぐつたら「もうたくさんだ」と云つた。野だに「貴様もたくさんか」と聞いたら「無論たくさんだ」と答えた。

「貴様等は奸物だから、こうやって天誅を加えるんだ。これに懲りて以来つしむがいい。いくら言葉巧みに弁解が立つても正義は許さんぞ」と山嵐が云つたら兩人共だまつていた。ことによると口をきくのが退儀なのかも知れない。

「おれは逃げも隠れもせん。今夜五時までは浜の港屋に居る。用があるなら巡查なりなんなり、よこせ」と山嵐が云うから、おれも「おれも逃げも隠れもしないぞ。堀田と同じ所に待つてるから警察へ訴えたければ、勝手に訴えろ」と云つて、二人してすたすたあるき出した。

おれが下宿へ帰つたのは七時少し前である。部屋へはいるとすぐ荷作りを始めたら、婆さんが驚いて、どうおしるのぞなもと聞いた。お婆さん、東京へ行って奥さんを連れてくるんだと答えて勘定を済まして、すぐ汽車へ乗つて浜へ来て港屋へ着くと、山嵐は二階で寝ていた。おれは早速辞表を書こうと思つたが、何と書いていいか分らないから、私儀都合有之辞職の上東京へ帰り申候につき左様御承知被下度候以上とかいて校長宛にして郵便で出した。

汽船は夜六時の出帆である。山嵐もおれも疲れて、ぐうぐう寝込んで眼が覚めたら、午後二時であつた。下女に巡査は来ないかと聞いたら参りませんと答えた。「赤シャツも



野だも訴えなかつたなあ」と二人は大きに笑つた。

その夜おれと山嵐はこの不浄な地を離れた。船が岸を去れば去るほどいい心持ちがした。神戸から東京までは直行で新橋へ着いた時は、ようやく娑婆へ出たような気がした。山嵐とはすぐ分れたぎり今日まで逢う機会がない。

清の事を話すのを忘れていた。——おれが東京へ着いて下宿へも行かず、革靴を提げたまま、清や歸つたよと飛び込んだら、あら坊っちゃん、よくまあ、早く歸つて来て下さつたと涙をばたばたと落した。おれもあまり嬉しかったから、もう田舎へは行かない、東京で清とうちを持つんだと云つた。

その後ある人の周旋で街鉄の技手になつた。月給は二十五円で、家賃は六円だ。清は玄関付きの家でなくつても至極満足の様子であつたが気の毒な事に今年の二月肺炎に罹つて死んでしまった。死ぬ前日おれを呼んで坊っちゃん後生だから清が死んだら、坊っちゃんのお寺へ埋めて下さい。お墓のなかで坊っちゃん来るのを楽しみに待つておりますと云つた。だから清の墓は小日向の養源寺にある。

(明治三十九年四月)



# 青空文庫情報

底本：「ちくま日本文学全集 夏目漱石」筑摩書房

1992（平成4）年1月20日第1刷発行

底本の親本：「夏目漱石全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年10月27日第1刷発行

※底本の注にれば、本作品の原稿には、「そのうち学校もいやになった。」の後に、漱石自身による2字あけの指定があるという。このファイルでは、その情報にもとづいて、当該の箇所を2字あけとした。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：真先芳秋

校正：柳沢成雄

1999年9月13日公開

2011年5月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 坊っちゃん

夏目漱石

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>